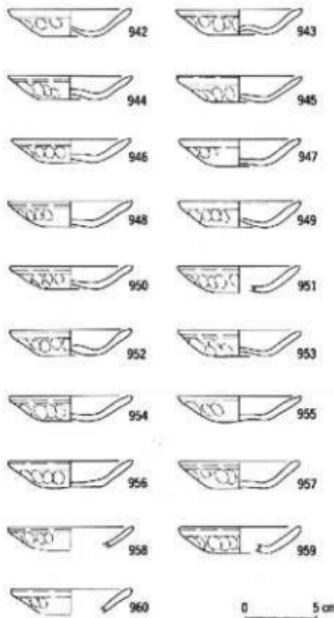


1 オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土
第319図 SK1007実測図

皿状をもつもの942～954と、平底を呈するもの955～957が見られる。

口縁部は底部から外上方に伸び、口縁端部内面に強いナデを施し、やや尖り気味におさめるもの944～952、口縁端部をやや丸くおさめるもの953～960がある。調整は外面ユビオサエ、口縁端部ヨコナデ、内面指ナデによるね上げ状のナデがみられる。時期的には15世紀末から16世紀初頭が考えられる。



第320図 SK1007出土遺物実測図

土坑8 (SK1008) (第321図)

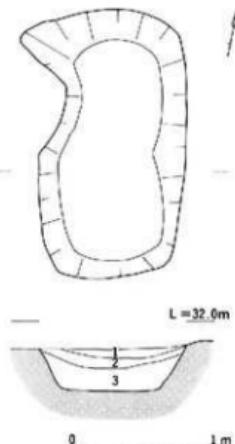
3号屋敷地西側(D-3グリッド)の区画溝内において検出したややいびつな掘り方をもつ長方形土坑である。

規模は長軸1.92m、短軸1.03m、深さ0.30mを測る。掘り方の形状は断面逆台形状を呈しており、遺構内埋土は灰色系統の砂質土3層からなる。このうち2層と3層の境には薄く植物遺体の堆積が見られた。

時期的には区画溝埋土を切り込むことから、中世段階のものと考えられる。

出土遺物 (第322図)

遺構内からはほとんど遺物の出土はないが1点のみ混入と思われる須恵器の壺体部片961が出土している。体部中央部に浅い沈線が巡るもので、肩部にかけて自然釉が見られる。



第321図 SK1008実測図

土坑9 (SK1009)

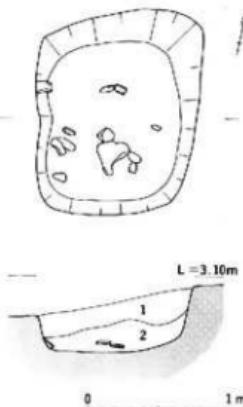
(第323図)

3号屋敷地西側 (E - 3
グリッド) の微高地が自然
流路1 (SR1001) に落ち込
む傾斜面上において検出した
方形土坑である。位置的
には土坑8の真南側約6 m
に位置し、規模は長軸1.14
m、短軸1.10m、深さ0.36

mを測り、ほぼ垂直気味の掘り方をもつ。主軸方向は南北方向である。遺構内の埋土は2層
の褐色砂質土に分層され、遺物は下層部より出土した。

出土遺物 (第324図)

962は備前窯の擂鉢である。口径31.1cmを測り、内面に放射状の櫛描き条線が施されている。
口縁部は直立気味に立ち上がり上端部は丸くおさめている。下端部は断面三角形状に拡張し、

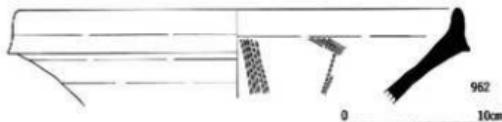


1 褐灰色5YR5/1砂質土(粘性)
2 褐灰色5YR6/1砂質土(粘性)
3 灰色7.5Y5/1砂質土

第323図 SK1009実測図



第322図 SK1008出土遺物実測図



第324図 SK1009出土遺物実測図

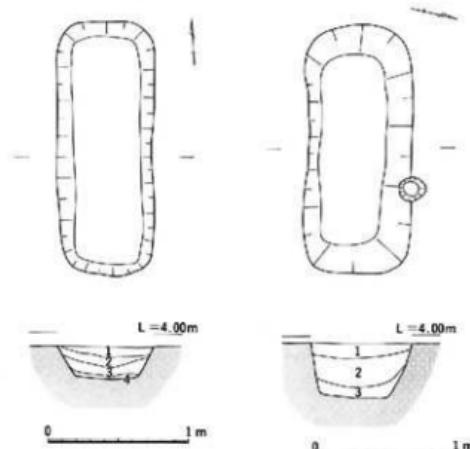
調整は内外面とも強いヨコナデである。時期的には備前焼Ⅳ期、15世紀後半に位置づけられる。この他には須恵器片・土師質釜底部・脚部・鉄滓が出土している。

土坑16 (SK1016) (第325図)

1号屋敷地 (S-19グリッド)において検出した長方形土坑であり、土坑227 (SK1227) を切っている。規模は長軸1.82m、短軸0.68m、深さ0.22mを測る。断面形状は逆台形を呈し、主軸方向は南北である。遺構内埋土は4層に分層され褐色系統の砂質土であり、また第1層には炭化物をやや多く含んでいる。

出土遺物 (第326図)

土坑内からは多数の土師質土器細片と、内底面に平行ミガキを施した瓦器碗底部片963他、土師質土鍋片が出土している。また古い時期の混入遺物として古代の須恵器片、土師器片、6世紀後半段階の須恵器杯身片が出土している。遺構は時期的に13世紀代の年代を考えたい。



土坑18(SK1018) (第327図)

1号屋敷地 (R-18グリッド)において検出した方形状の土坑である。規模は長軸1.78m、短軸0.76m、深さ0.38mを測る。掘り方は検出面より垂直気味に掘り込まれており、遺構内埋土は褐色系統の砂質土で3層に分層される。主軸方向はほぼ東西を示す。

- | | |
|---|----------------------|
| 1 オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土
(炭化物多く含む黄灰色2.5Y4/1
砂質土をブロック状に含む) | 1 にじい黄褐色10YR4/3砂質土 |
| 2 オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土 | 2 褐色10YR4/3砂質土(粘性あり) |
| 3 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土 | 3 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土 |
| 4 黄褐色2.5Y5/4砂質土 | 4 黄褐色2.5Y5/4砂質土 |

第327図 SK1018実測図

第325図 SK1016実測図



第326図 SK1016出土遺物実測図

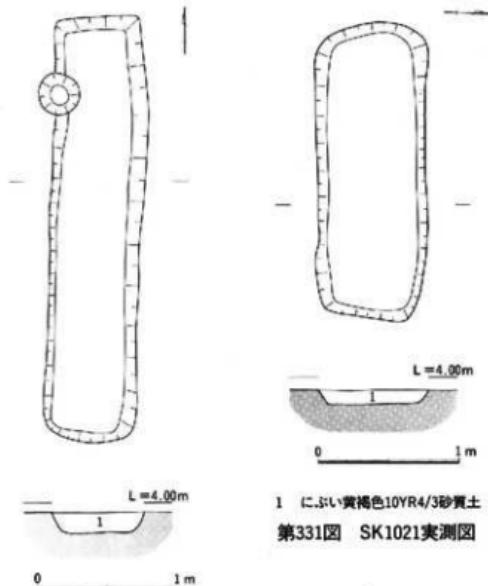
第328図 SK1018出土遺物実測図

出土遺物（第328図）

土坑内からは土師器杯細片とともに瓦器椀片964が出土している。細片であるため全体の調整は観察できないが、口縁部内面には横方向のミガキが認められる。外面はヨコナブ調整である。瓦器椀などから遺構の時期は13世紀代と考えられる。

土坑19(SK1019)（第329図）

1号屋敷地（Q-21グリッド）において検出した長方形土坑である。規模は長軸3.04m、短軸0.66m、深さ0.14mを測る。検出面からの掘り方の断面形状は逆台形を呈し、遺構内埋土は一層のみで、にぶい黄褐色砂質土である。主軸方向はほぼ南北を示す。



出土遺物（第330図）

遺構内からは土師質土器杯片と搬入品である瓦質の風炉965が出土している。体部の破片であるが肩部に火窓があげられており、体部中位の二条の凸帯の間にはスタンプによる花菱文が押捺されている。遺構の時期は15世紀代である。



土坑21(SK1021)（第331図）

1号屋敷地（Q-21グリッド）において検出した西側一辺をやや丸くおさめた長方形土坑である。規模は



第331図 SK1021実測図

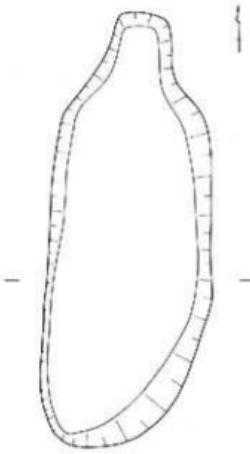
長軸2.12m、短軸0.76m、深さ0.10mを測る浅い土坑で、掘り方の断面形状は浅い逆台形状を呈する。遺構内埋土は1層で、にぶい黄褐色砂質土である。主軸方向は東西を示す。

出土遺物（第332図）

966は黒色土器A類碗片で高台が付くものである。内底面は平坦で形状は杯形になるものと考えられる。内面は3mm幅程度の乱方向のミガキが施されており、外面ナデ調整である。968は須恵器甕の体部片である。外面には平行タタキがみられる。967は土師質土器鍋の口縁部で、端部はやや肥厚し外反する。内面はヨコハケ、外面はヨコナデ調整である。出土遺物から古代の様相を示すと考えられるが、その他に瓦器碗片、土師質土器釜の脚部などが混在していることからおおむね13世紀代の時期と捉えておく。

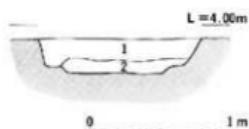
土坑30（SK1030）（第333図）

1号屋敷地（O-21グリッド）において検出した土坑である。数基の土坑と切り合いがみられるが、平面プランは長軸北隅に突出部をもつ不正長楕円形を呈するものと考えられる。規模は長軸3.08m、短軸1.18m、深さ0.24mを測り、掘り方の断面形状は底面が二段に掘り込まれている。主軸方向は南北を示す。



出土遺物（第334図）

遺構内からは古代の土器片と中世の土器片が混在した状況で出土している。969は内外面とも赤色顔料が塗彩された土師器杯で、調整は内外面ヨコナデである。970は細片であるが蓮弁をもつ龍泉窯系の青磁碗である。その他、須恵器片・土師質土器杯・擂鉢・鍋・丸瓦片が出土している。遺構の時期は13世紀から14世紀頃と考えられる。

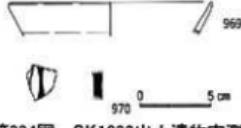


1 黄褐色2.5Y5/4砂質土
2 オリーブ褐色2.5Y4/6砂質土

第333図 SK1030実測図

土坑46（SK1046）（第335図）

1号屋敷地（P-21グリッド）において土坑47と切りあつた状況で検出した長方形土坑である。規模



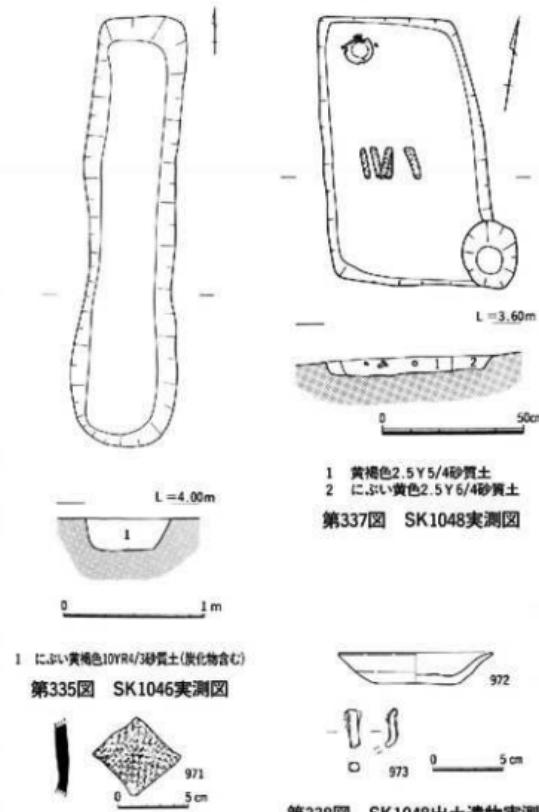
第334図 SK1030出土遺物実測図

は長軸3.08m、短軸0.76m、深さ0.24mを測る。掘り方の断面形状は逆台形状を呈し、遺構内埋土はにぶい黄褐色砂質土の一層のみで、少量の炭化物を含んでいる。主軸方向は南北を示す。

出土遺物

(第336図)

遺構内には9世紀から10世紀段階の土師器杯片・須恵器杯蓋片・須恵器壺片とともに瓦器挽片が少量含まれている。図示できたのは体部外面に格子状タタキをもつ須恵器片971のみである。遺構の時期は13世紀代と捉えておく。



1 にぶい黄褐色10YR4/3砂質土(炭化物含む)

第335図 SK1046実測図



第336図 SK1046出土遺物実測図

土坑48 (SK1048) (第337図)

3号屋敷地(F-8グリッド)において検出した土壙墓である。平面プランは長方形を呈し、長軸0.98m、短軸0.60m、深さ0.09mを測る。掘り方断面形状は浅い逆台形状を示すが、遺構検出時には既に人骨が露呈していたことから本来はもうすこし深い土坑であったものと考えられる。遺構内の埋土の状況は黄色系統の砂質土で充填されているが、第1層が垂直気味に底面に達しておりその内部に大型骨と思われる人骨が見られることから第1層は棺内の埋土と考えられる。主軸方向は真北より16°西偏している。



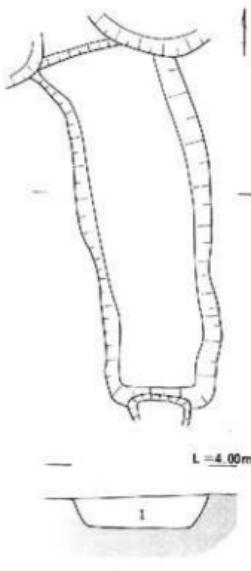
第337図 SK1048実測図

出土遺物（第338図）

土壤内での副葬遺物は北側小口部で、底部の切り離しが静止糸切りの土師質土器皿972が完形で1点出土している。形態的には口縁部が外上方に立ち上がり、中位から外反し端部はやや尖り気味におさめている。遺構は時期的に15世紀代と考えられる。また、鉄釘973が1点ではあるが出土しており、木棺の存在を示唆するものと考えられる。

土坑63（SK1063）（第339図）

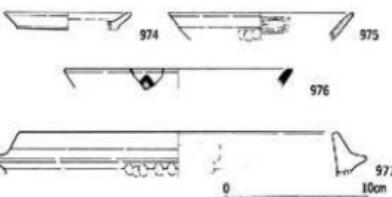
1号屋敷地（P-18グリッド）において検出した不定形な長方形土坑である。土坑64（SK1064）、土坑66（SK1066）と切り合っており、長軸2.26m、短軸0.56m、深さ0.22mを測る。掘り方は遺構面からやや斜めに掘り込まれており、断面形状は逆台形状を呈している。遺構内埋土は黄褐色砂質土1層である。主軸方向はほぼ南北を示す。



第339図 SK1063実測図

出土遺物（第340図）

遺構内からは土師器片・須恵器瓦片等も出土しており中世遺物と混在している。974

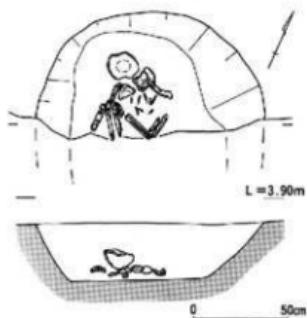


第340図 SK1063出土遺物実測図

は土師質土器皿で底部の切り離しは糸切りになるものと考えられる。975は和泉型瓦器碗で尾上編年Ⅲ期に属し、外面はユビオサエとヨコナデ、内面はヨコ方向のミガキ調整である。976は龍泉窯系青磁碗である。細片であるが外面に蓮弁が観取される。977は土師質釜土器である。鉗は断面三角形状で、口縁部はやや高く立ち上がり端部は方形状におさめている。内面調整は板状工具によるヨコナデである。出土遺物などから遺構の時期は13世紀代と考えられる。

土坑64（SK1064）（第341図）

1号屋敷地（P-18グリッド）において検出した径約1.20m前後を測る円形の土壤基であ



第341図 SK1064実測図



第342図 SK1064出土遺物実測図

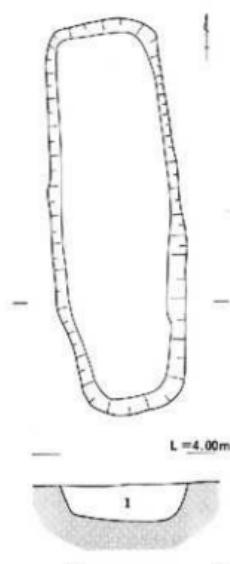
る。土壤は溝17 (SD1017) 及び土坑63 (SK1063) と切り合っており、墓壙南半分は完掘できなかった。土壤内からは頭骨など人骨片が多量に出土したが埋葬形態は下半分が遺存しないため不明である。埋葬頭位は真北からやや西寄りである。

出土遺物（第342図）

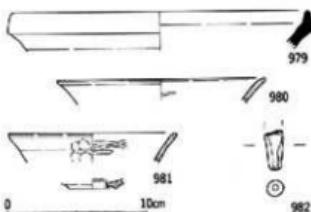
墓壙内からは人骨の他、副葬遺物は確認されなかった。978は製塙土器であるが混入遺物である。口縁端部を内向させ尖り気味におさめている。内面調整はナデである。時期は遺物がほとんど出土していないため確定できないが、切り合いなどから13世紀以前と捉えておく。

土坑65 (SK1065) (第343図)

1号屋敷地 (P-18グリッド) において検出された長方形土坑で、土坑256 (SK1256)・土坑258 (SK1258) と切り合っている。規模は長軸2.84m、短軸0.96m、深さ0.26mを測り、遺構内埋土は1層である。主軸方向は南北を示す。



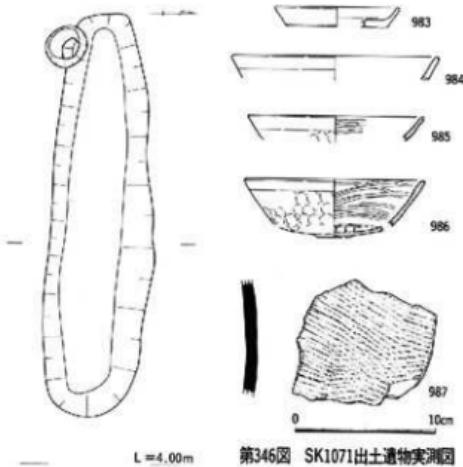
1 に bei 黄褐色10YR5/4砂質土
第343図 SK1065実測図



第344図 SK1065出土遺物実測図

出土遺物（第344図）

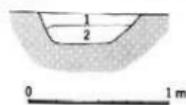
遺構内からは古代の土器片と中世の土器片が混在した状況で出土している。979は軟質であるが東播系こね鉢と考えられる。口縁端部を上方に拡張しやや尖り気味におさめ、下端部の拡張は小さい。口縁部外面に重ね焼き時に生じた黒帯が巡る。980・981はⅢ期の和泉型瓦器碗である。外面はユビオサエ、口縁部ヨコナデ、内面はヨコ方向のミガキ調整である。982は上師質の管状土錐である。遺構の時期は13世紀代と考えられる。



第344図 SK1071出土遺物実測図

土坑71（SK1071）（第345図）

1号屋敷地南西隅（Q-16グリッド）において検出した長楕円形の土坑である。規模は長軸2.86m、短軸0.76m、深さ0.22mを測る。掘り方は検出面からやや斜め方向に掘り込まれ断面形状は逆台形状を呈している。遺構内埋土は黄褐色砂質土が2層に分層され、遺物は主に第1層から出土している。主軸方向は東西を示す。

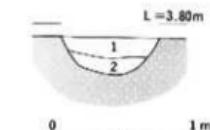
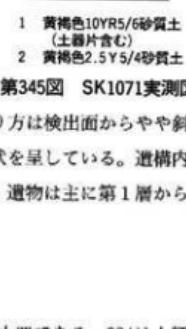


第345図 SK1071実測図

出土遺物（第346図）

983は底部回転糸切りの土師質土器小皿である。984は上師質土器杯の口縁部である。内外面ともヨコナデ調整である。985・986はⅢ-Ⅳ期の和泉型瓦器碗である。内底面には平行ミガキが認められる。

987はやや軟質で外面が黒色を呈するものであるが、須恵器壺体部と考えられる。外面は平行タキ、内面はヘラケズリの調整がみられる。その他の遺物として鉄滓が1点出土している。遺構の時期は遺物などから13世紀代と考えられる。

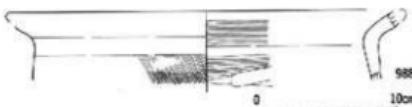


1 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土
2 黄褐色10YR5/6砂質土

第347図 SK1076実測図

土坑76 (SK1076) (第347図)

1号屋敷地 (O・P-17グリッド下)において検出した土坑で、平面プランは長方形を呈し、土坑77 (SK1077) を切っている。規模は長軸2.82m、短軸0.82m、深さ0.26mを測る。掘り方断面形状はU字状を呈し、遺構内埋土は褐色系統の砂質土で2層に分層される。出土した遺物は主に第1層からである。主軸方向は南北を示す。



第348図 SK1076出土遺物実測図

出土遺物 (第348図)

遺構内からは土師器杯片・束縛系こね鉢・瓦器碗片等が細片となって出土している。図示できたのは土師質土器鍋の口縁部988のみである。口縁端部を欠損するものであるが、内外面ともハケによる調整が認められる。出土遺物から古代の遺物も混在するが、遺構の切り合いなどから概ね13世紀代の年代が考えられる。

土坑77 (SK1077) (第349図)

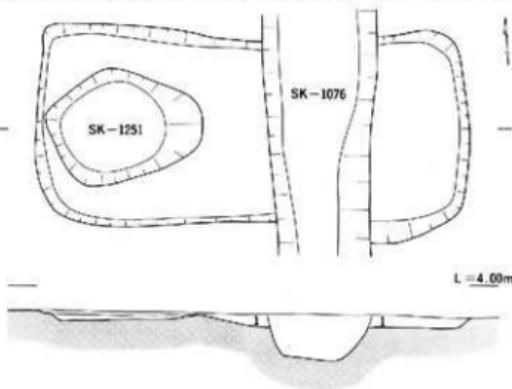
1号屋敷地 (O・P-17グリッド)において検出した比較的大きなプランをもつ長方形土坑で、土坑76 (SK1076) に切られている。また土坑251 (SK1251) は遺構内底面で検出されたものであるが、掘り方が浅く本遺構に伴うものか不明である。

規模は長軸3.10m、短軸1.43m、深さ0.09mの非常に浅い土坑であり、遺構内埋土は1層で黄褐色砂質土である。

主軸方向は東西を示す。

出土遺物 (第350図)

989は土師質土器杯の口縁部である。内外面ヨコナデ調整である。990～992はⅢ期の和泉型瓦器碗であるが、細片のため調整は不明である。このうち991は2次的焼成により炭素の付着は認められず、土師質を呈している。

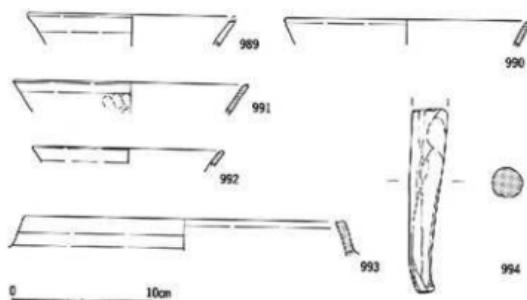


1 黄褐色2.5Y5/4砂質土

第349図 SK1077実測図

993は瓦質土器の釜口縁部、994は瓦質土器釜の脚部である。この他に青磁碗の細片が1点出土している。出土遺物および遺構の切り合ひなどから時期は13世紀代と考えられる。

土坑86 (SK1086)



(第351図)

第350図 SK1077出土遺物実測図

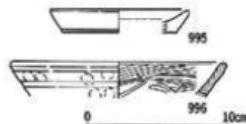
1号屋敷地南西端 (S-17グリッド)において検出した長方形土坑である。土坑87 (SK1087)・土坑247 (SK1247)と切り合う。規模は長軸3.30m、短軸1.08m、深さ0.26mで、土坑の掘り方および断面形状は逆台形状を呈し、遺構内埋土はにぶい黄褐色砂質土である。主軸方向は南北を示す。

出土遺物 (第352図)

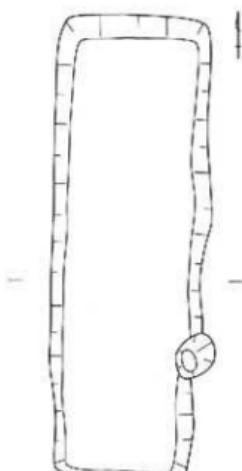
遺構内からは9世紀代の須恵器などと共に中世遺物が混在した状況で出土している。995は土師質土器の小皿である。内外面ヨコナデで底部糸切りと考えられる。996はⅢ期の和泉型瓦器椀口縁部である。外面はユビオサエ後口縁部弱いヨコナデ調整であるが、部分的にミガキ状の痕跡が認められる。内面はやや幅広のヨコヘラミガキ調整である。遺構の時期は13世紀代の年代が与えられる。

土坑87 (SK1087) (第353図)

1号屋敷地 (S-17グリッド)において検出した楕円形の土坑である。土坑86 (SK1086)に切られており、検



第352図 SK1086出土遺物実測図



1 にぶい黄褐色10YR5/4砂質土

第353図 SK1086実測図

外面は土坑86より若干深いが全形をとどめない。検出された規模は長軸1.20m、短軸0.56m、深さ0.15mを測り、断面形状は幅広のU字状を呈する。遺構内埋土は2層に分層されレンズ状堆積を示し、埋土には少量の炭化物を含んでいる。主軸方向は東西を示す。

出土遺物（第354図）

出土遺物は主に中世の土師質土器を主体とするが、若干の古代の土器片が混在する。997は土師器の皿口縁部、998は口縁端部内面に浅い沈線が巡るもので、9世紀代の年代が考えられる。999は土師質土器杯で口縁端部は外反し丸くおさめる。1000は和泉型瓦器楕口縁部で外面ヨコナデ、内面ヨコヘラミガキ調整である。この他に管状土錐、体部外面に格子状タタキをもつ瓦質の窓片が出土している。遺構の時期は概ね13世紀頃と考えられる。

土坑89（SK1089）（第355図）

1号屋敷地南西隅（T-17グリッド）において検出した隅丸の長方形土坑である。規模は長軸1.16m、短軸0.66m、深さ0.14mを測り、掘り方断面形状は浅い逆台形状を呈する。遺構内埋土には若干の炭化物を含んでいる。

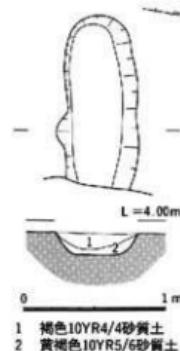
主軸方向は真北より68°西偏している。

出土遺物（第356図）

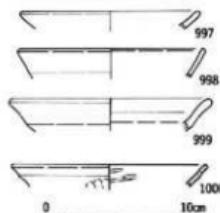
遺構内からは若干の土器片が出土している。1001・1002はⅢ期の和泉型瓦器楕で、外面ユビオサエ、口縁部ヨコナデ調整、内面横方向へのミガキが施されている。このうち1002は炭素の付着が見られない。1003は土師質の管状土錐である。遺構の時期は出土遺物などから13世紀代と考えられる。

土坑94（SK1094）（第357図）

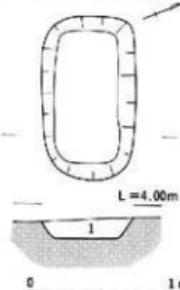
1号屋敷地（R-19グリッド）掘立柱建物1（SB1001）の東側に隣接して検出された方形土坑である。土坑の規



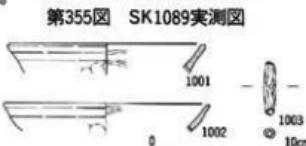
第353図 SK1087実測図



第354図 SK1087出土遺物実測図



第355図 SK1089実測図

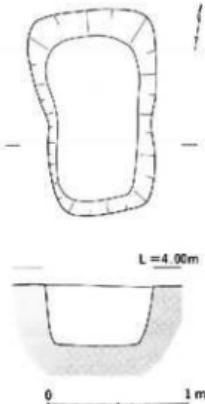


第356図 SK1089出土遺物実測図

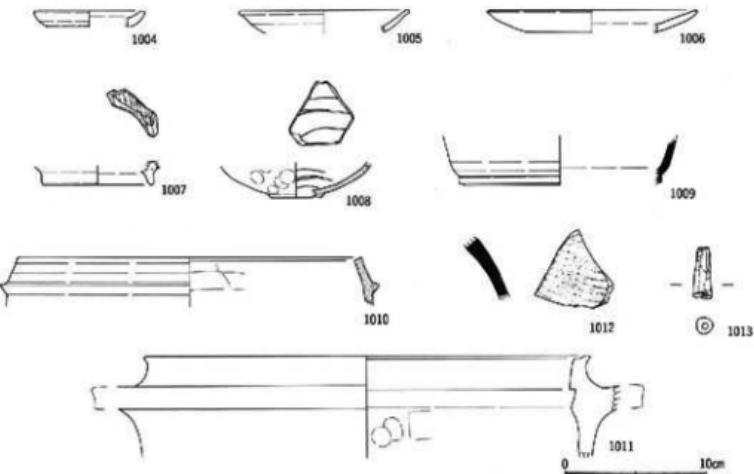
模は長軸1.48m、短軸0.90m、深さ0.42mを測る。掘り方は検出面からほぼ垂直気味に掘り込まれ、底面は平坦である。遺構内埋土は不明である。主軸方向はほぼ南北を示す。

出土遺物（第358図）

遺構内からは9世紀から10世紀段階の土器片と共に中世土器が混在した状況で出土している。1004は土師質土器小皿である。1005・1006は土師器の皿で1005は口縁端部が若干外反する。1007は黒色土器A類椀で、内面見込みには綿密な平行線状のミガキが施されている。高台は貼り付け高台である。1008はIV-1期と考えられる和泉型瓦器椀で外面はユビオサエ、内面は細身の圓線状のヘラミガキが施されている。高台の断面形状は退化が著しく平高台状である。1009は須恵器の高台付杯である。1010は瓦質土器の釜口縁部である。口縁部は若干内向し端部は方形状におきめ、鋤部は断面三角形状で短く張り出す。内外面ヨコナデ調整である。1011は土師器の釜で体部外面上位に太めの縁がつき、口縁部は体部から一連に形成し直立するもので口縁部から若干下がった位置に水平方向に延びる鋤が巡るものである。いわゆる摂津型釜Cと呼ばれるものである。体部は長胴タイプと考えられる。内面調



第357図 SK1094実測図

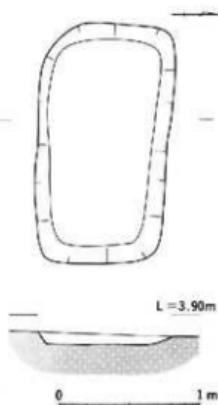


第358図 SK1094出土遺物実測図

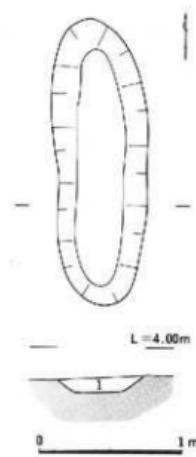
整はユビオサエ後ナデ、外面はナデ調整である。胎土から在地産と考えられる。1012は須恵器裏部片で、外面は格子状タタキ、内面はヨコナデ調整である。1013は土師質の管状土錘である。出土遺物から遺構の年代は13世紀代と捉えておく。

土坑111（SK1111）（第359図）

1号屋敷地中央部西端（N-16グリッド）において検出した浅い方形土坑である。土坑の

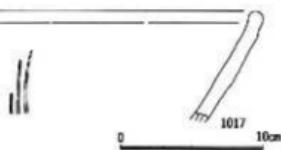
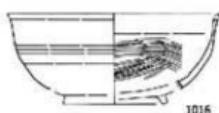


第359図 SK1111実測図

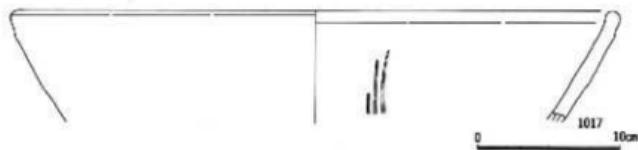


1 にじい黄褐色10YR5/4砂質土
第361図 SK1115実測図

第360図 SK1111出土遺物実測図



1016



第362図 SK1115出土遺物実測図

規模は長軸1.74m、短軸0.96m、深さ0.08mを測る。主軸方向は東西である。

出土遺物（第360図）

遺構内からは若干の土器片が出土している。小破片のみで図示できたのは和泉型瓦器椀でIII期に属すると考えられるもの1014の1点のみである。調整は外面ヨビオサエ後口縁部ヨコナデ、内面ヨコ方向へのミガキが施されている。遺物より13世紀代の時期が考えられる。

土坑115（SK1115）（第361図）

調査区中央南端部（P-14グリッド）、溝1（SD1001）と溝2（SD1002）の間において検出された。形状は長楕円形で掘り方断面形状はレンズ状を呈する。土坑の規模は長軸2.02m、短軸0.62m、深さ0.10mを測る。遺構内埋土は1層のみで、主軸方向は南北を示す。

出土遺物（第362図）

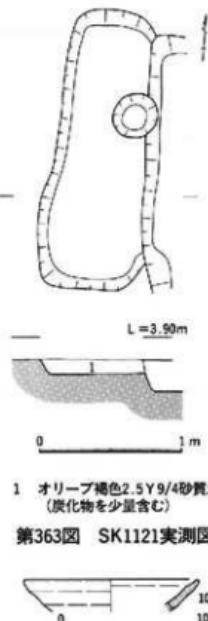
1015は土師質土器の杯口縁部である。1016は黒色土器B類椀である。調整は外面ヨコナデで口縁部には幅広の強いヨコナデが施されているが、ミガキについては明瞭ではない。内面はヨコ方向の分割ミガキが観察される。胎土などから在地産と考えられる。1017は復元口径42.5cmの大型の土師質土器壺鉢である。外面調整は剥離が著しく観察できない。内面は輪描による条線が3条認められる。

土坑121（SK1121）（第363図）

2号屋敷地南端（O-11グリッド）において検出された長方形土坑で、土坑122（SK1122）によって切られている。土坑の規模は長軸2.00m、短軸0.74m、深さ0.10mを測る浅い土坑である。遺構内の埋土はオリーブ褐色砂質土で若干の炭化物を含んでいる。主軸方向は南北を示す。

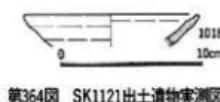
出土遺物（第364図）

遺構内からは少量の土器片しか出土していない。1018は瓦器椀口縁部である。器壁が厚く内外面ともヨコナデ調整であり、内面のミガキは認められない。炭素の付着は外面のみであり内面は白色を呈する。



1 オリーブ褐色2.5Y9/4砂質土
(炭化物を少量含む)

第363図 SK1121実測図



第364図 SK1121出土遺物実測図

その他に土師質土器杯・青磁碗片、および東播系こね鉢口縁部が出土している。遺物などから13世紀代と考えられる。

土坑124 (SK1124) (第365図)

2号屋敷地 (N-11グリッド)において検出した隅丸長方形の土坑である。土坑の規模は長軸1.34m、短軸0.80m、深さ0.18mを測る。掘り方断面形状は逆台形状を呈し、遺構内埋土は1層である。

出土遺物 (第366図)

遺構内からは土師質土器杯片・土師質土器鍋片・瓦器碗片が若干出土しているのみである。1019は土師質土器鍋で、復元口径26.2cmを測る。口縁部は外上方へ立ち上がり、中央部がやや肥厚し端部は上面に端面を形成するものでやや尖り気味におさまっている。調整は体部外面タテハケ、内面ヨコハケである。時期的には13世紀代と考えられる。

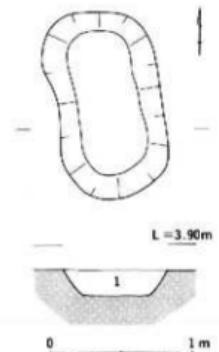
土坑125 (SK1125) (第367図)

2号屋敷地 (N-11グリッド)において検出した長梢円形の土坑である。土坑124(SK1124)によって切られている。土坑の規模は長軸2.16m、短軸0.80m、深さ0.30mを測り、断面形状は逆台形状を呈している。遺構内埋土は2層に分層され、第1層には炭化物が混入する。主軸方向は東西を示す。

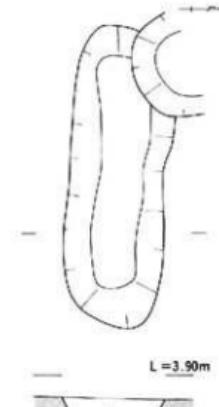
出土遺物 (第368図)

遺構内からは土師質土器片が若干出土している。図示できたのは土師質土器杯口縁部1020のみである。その他に、底部に格子状タキを施す土師質土器鍋片が出土している。

時期的には13世紀以降である。



1 黄褐色2.5Y5/3砂質土
第365図 SK1124実測図



1 黄褐色2.5Y5/3砂質土
(炭化物少量含C)
2 黄褐色2.5Y5/4砂質土
第367図 SK1125実測図



第366図 SK1124出土遺物実測図

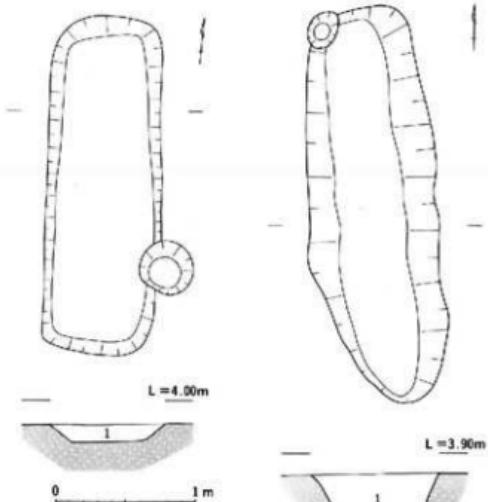


第368図 SK1125出土遺物実測図

土坑126 (SK1126)

(第369図)

2号屋敷地 (N-11グリッド)において検出した長方形土坑である。土坑の規模は長軸2.44m、短軸0.84m、深さ0.12mを測る浅い掘り方を持つ土坑である。土坑の断面形状は浅い逆台形状で遺構内の埋土は炭化物を含む黄褐色砂質土である。主軸方向は南北を示す。



出土遺物 (第370図)

1021は横田・森田分類I-1類の同安窯系青磁碗で断面形状の高台がつく。釉は体部下半まで高台まで及ばない。内面には櫛描きによるジグザグ文様、外面には櫛描きによる放射線状の縦線が施されている。

この他に、体部外面に蓮弁を施した龍泉窯系青磁碗片、土師質土器の杯片が出

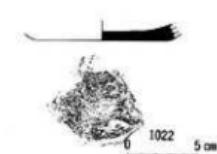
1 黄褐色2.5Y5/3砂質土(炭化物含む)
第369図 SK1126実測図



第370図 SK1126出土遺物実測図

- 1 にじい黄色2.5Y5/3砂質土(炭化物少量含む)
- 2 オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土
(炭化物少量含む)
- 3 黄灰色2.5Y5/4砂質土(粘性あり)

第371図 SK1127実測図



第372図 SK1127出土遺物実測図

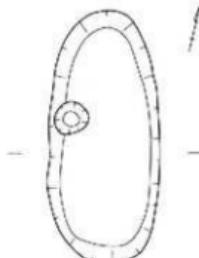
土坑127 (SK1127) (第371図)

2号屋敷地 (N-10グリッド)において検出した一端が尖り気味におさめる長方形土坑である。土坑の規模は長軸2.86m、短軸0.94m、深さ0.48mの掘り方のしっかりした土坑である。土坑の断面形状は逆台形状を呈し、遺構内の埋土は炭化物を包含する3層に分層される。主軸方向はほぼ南北を示す。

出土遺物（第372図）

1022は東播系こね鉢と考えられる底部片で外底面には回転糸切りの痕跡が残る。内底面はケズリ状の強いナデ調整である。色調は乳白色を呈するが二次焼成を受けたために一部ススの付着が認められる。

その他に、土師質土器杯片・瓦器楕片・瓦質土器鍋口縁部が出土している。

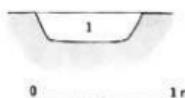


L = 3.80m

土坑132（SK1132）（第373図）

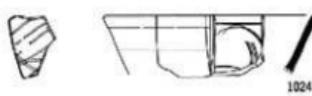
2号屋敷地中央部東寄り（M-12グリッド）

において検出した楕円形土坑である。溝16（SD1016）を切る形で検出された土坑で、規模は長軸1.82m、短軸0.78m、深さ0.22mを測る。土坑の断面形状は逆台形状を呈し、遺構内埋土はオリーブ褐色砂質土1層である。主軸方向は真北より若干西偏している。



0 1m

1 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(炭化物多く含む)
第373図 SK1132実測図

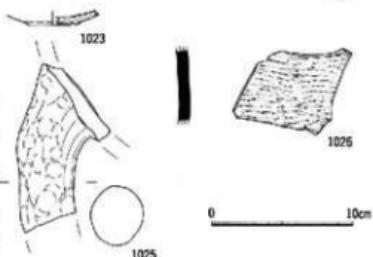


1024

出土遺物（第374図）

1023は瓦器楕底部片で、低い高台を貼り付けた。調整は外面ユビオサエ、内底面は平行ミガキの調整がみられる。1024は龍泉窯系の青磁碗口縁部で横田・森田分類の1-3類と思われる。口縁部は直線気味に外上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。内面にヘラ描き及び片彫りによる花文が描かれているものと考えられる。1025は土師質土器釜の脚で、釜体部に貼り付けた痕跡がみられる。調整はユビオサエ、縦方向の板ナデである。部分的にススの付着がみられる。胎土には石英粒・砂粒が多く含まれる。1026は須恵器壺体部片である。外面は平行状タタキ、内面はナデ調整である。

その他、土師質土器杯片が出土している。



第374図 SK1132出土遺物実測図

土坑134（SK1134）（第375図）

2号屋敷地（M-12グリッド）、土坑132（SK1132）に近接して検出した楕円形土坑である。

土坑の規模は長軸1.82m、短軸0.78m、深さ0.30mを測り、また土坑の断面形状もほぼ土坑132（SK1132）と同規模である。主軸方向は東西を示す。

出土遺物（第376図）

土坑内からは赤色塗彩された9～10世紀代の土師器杯片も出土しているが、概ね中世遺物で占められる。1027は土師質土器杯である。体部は底部から外上方に延び、口縁部は若干外反気味で端部は丸くおさめる。調整は内外面ヨコナデである。底部は回転糸切りになるものと考えられる。胎土には微細な結晶片岩が多く含まれている。1028は和泉型瓦器碗の口縁部である。外面ヨコナデ調整、内面はヨコ方向へのラミガキが施されている。時期は13世紀代と考えられる。

土坑137（SK1137）（第377図）

2号屋敷地ほぼ中央部（N-10グリッド）において検出した隅丸の方形土坑である。土坑の規模は長軸0.86m、短軸0.60m、深さ0.16mを測る。遺構内埋土は炭化物を含むオリーブ褐色砂質土である。主軸方向は東西を示す。

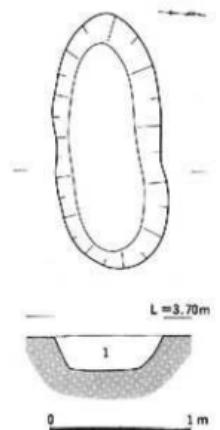
出土遺物（第378図）

遺構内からは僅かの遺物しか出土していない。

1029は和泉型瓦器碗の口縁部である。調整は外面ヨコナデ、内面ヨコ方向へのミガキが施されているものと考えられる。

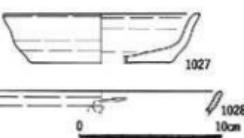
土坑138（SK1138）（第379図）

2号屋敷地（M-10グリッド）において検出した長方形土坑である。土坑は別の長方形土坑と重複しており検出時では切り合ひ関係が確認できなかったため、遺物については2基の遺物を一括して取り上げている。このうち切り合ひの新しい土坑の規模については長軸1.90m、短軸0.70m、深さ0.36mを測る。遺構内埋土は2層に分層されオリーブ褐色砂質土で第1層には炭化物を含んでいる。主軸方向はほぼ南北を示す。

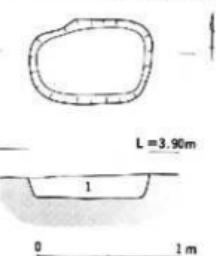


1 黄色2.5Y5/1砂質土(炭化物多量に含む、黄褐色2.5Y5/1砂質土をブロック状に含む)

第375図 SK1134実測図

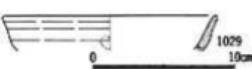


第376図 SK1134出土遺物実測図



1 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土
(炭化物少量含む)

第377図 SK1137実測図



第378図 SK1137出土遺物実測図

出土遺物（第380図）

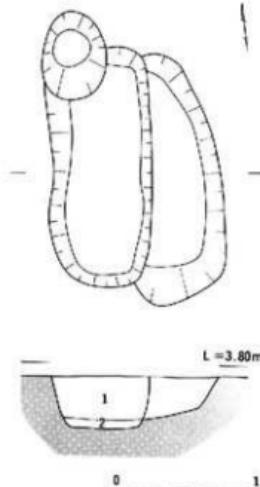
1030は土師質土器小皿で、口縁部は短く立ち上がり、端部は丸くおさめる。調整は内外面ヨコナデで、底部は回転ヘラ切りである。1031は土師質土器杯口縁部である。口縁部は若干外反し端部は丸くおさめる。調整は内外面ヨコナデである。胎土には石英・砂粒を多く含む。1032は和泉型瓦器椀の口縁部である。口縁部外面ヨコナデ、体部はユビオサエの痕跡が明瞭に残る。内面はヨコ方向のヘラミガキが認められる。1033は白磁皿で口禿げの口縁部である。口縁端部は方形状におさめる。森田分類のA群で13~14世紀代と考えられる。1034は龍泉窯系青磁碗で、横田・森田分類I-4類にあたる。体部内面には内面を分割する2本の沈線が見られ、飛雲文が片影りされているものと考えられる。1035は土師質土器釜の脚部である。1036は常滑窯の墊体部と考えられるもので、上部が内側に屈曲することから肩部と考えられる。肩部には緑色の釉がかかる。調整は外面に荒いタテハケの痕跡が残り、内面はケズリ状の強いヨコナデが施されている。

土坑140（SK1140）（第381図）

2号屋敷地中央部（N-9グリッド）において検出した不整形な長方形土坑である。土坑の規模は長軸0.96m、短軸0.72m、深さ0.36mを測る。掘り方は検出面より垂直気味に掘り込まれ、底面は平坦面を呈している。遺構内埋土は1層のみで、若干の炭化物を含むオリーブ褐色砂質上である。主軸方向は東西を示す。

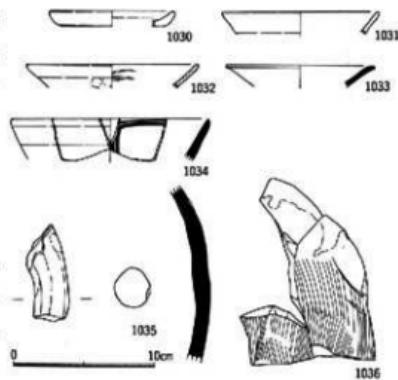
出土遺物（第382図）

遺構内からは若干の遺物しか出土していない。



1 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(炭化物少量含む)
2 オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土

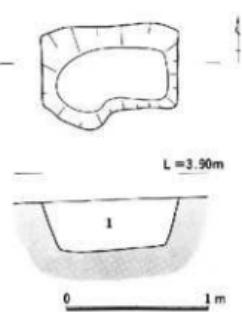
第379図 SK1138実測図



第380図 SK1138出土遺物実測図

1037は土師質土器釜口縁部である。口縁部は内端部を内上方に拡張し、段を形成する。調整は体部外面ヨコナデで、ユビオサエの痕跡が残る。内面は板状のヨコナデ調整である。胎土には石英粒が多く、また雲母が比較的多く含まれることから、搬入品の可能性が考えられる。

その他、土師質土器小皿片が出土している。



1 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(炭化物少量含む)

第381図 SK1140実測図

土坑148 (SK1148) (第383図)

2号屋敷地(M-9グリッド)において検出した楕円形土坑である。

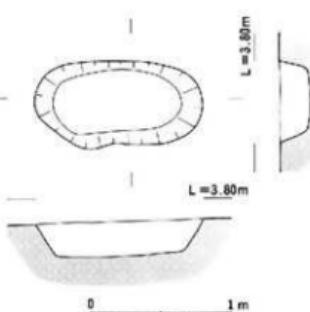
土坑148は土坑147(SK1147)を切る形で検出されており、土坑の規模は長軸1.20m、短軸0.60m、深さ0.24mを測る小規模な土坑である。土坑の断面形状は逆台形状を呈する。主軸方向は東西を示す。



第382図 SK1140出土遺物実測図

出土遺物 (第384図)

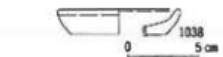
遺構内からは土師質土器杯・壺・瓦質土器片が出土している。1038は土師質土器小皿で、調整は内外面ヨコナデである。



第383図 SK1148実測図

土坑149 (SK1149) (第385図)

2号屋敷地(M-9グリッド)において検出した土坑で、土坑147(SK1147)・土坑150(SK1150)と切り合う。土坑の規模は長軸2.40m、短軸0.61m、深さ0.10mを測る長楕円形の浅い土坑である。土坑の断面形状は浅い逆台形状を呈し、遺構内埋土は炭化物を含む黄褐色砂質土である。主軸方向は南北を示す。



第384図 SK1148出土遺物実測図

出土遺物（第386図）

1039は和泉型瓦器椀底部片で、低い断面三角形状の高台が付く。調整は内面見込みに数状の平行ミガキが施され、外面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。時期は尾上編年Ⅲ-3期頃と考えられる。

その他、土師質土器杯・小皿片が出土している。

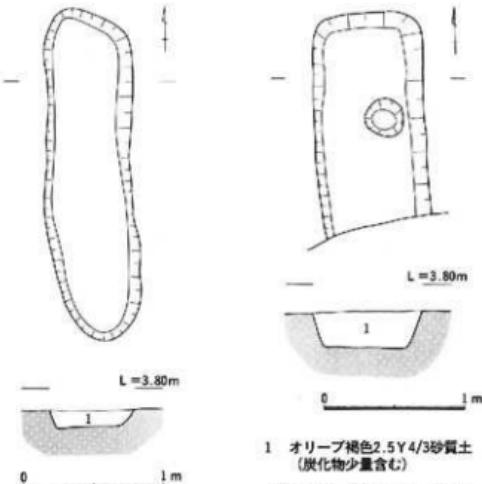
土坑162（SK1162）

（第387図）

2号屋敷地中央部（N-8グリッド）において検出した長方形土坑であるが、南端部は土坑142（SK1142）によって切られている。

土坑の規模は検出長1.56m、短軸0.80m、深さ0.26mを測る。断面形状は逆台形状で、底面は平坦面を呈する。

遺構内埋土は炭化物を含むオリーブ褐色の砂質土である。主軸方向は南北を示す。

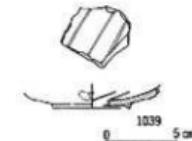


1 オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土
(炭化物少量含む)

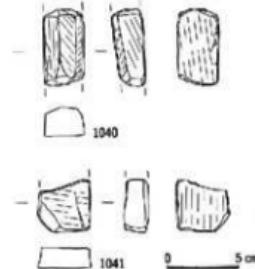
第387図 SK1162実測図

1 黄褐色2.5Y5/3砂質土
(炭化物を少量含む)

第385図 SK1149実測図



第386図 SK1149出土遺物実測図



第388図 SK1162出土遺物実測図

出土遺物（第388図）

遺構内からは土師質土器片・瓦質土器片等が出土しているが、図示できたのは凝灰岩製砥石2点のみである。

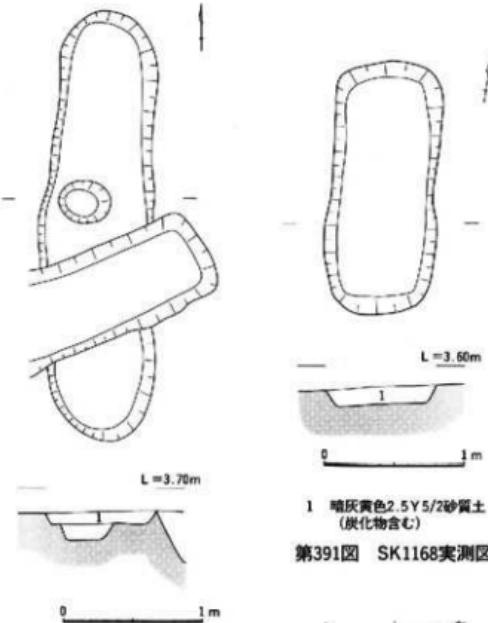
1040は断面6角形状で、柱状の砥石である。各面とも使用痕が見られ、両端とも欠損している。1041は偏平なもので3面に使用痕がみられる。

その他、鉄製刀子片・鉄滓が出土している。

土坑166 (SK1166)

(第389図)

2号屋敷地中央部(M-8グリッド)において検出した長椭円形の土坑であり、中央部に径0.30m、深さ0.10mのピットを伴っている。土坑はほぼ中央部を土坑167(SK1167)によって切られている。土坑の規模は長軸3.10m、短軸0.82m、深さ0.10mを測る。土坑の断面形状は浅い皿状を呈し、遺構内埋土は炭化物を非常に多く含む砂質土である。主軸方向は南北を示す。



第389図 SK1166実測図

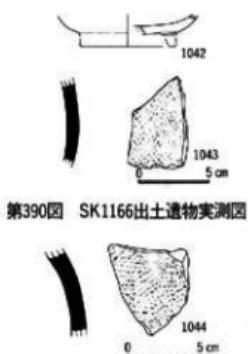
出土遺物 (第390図)

1042は土師質土器の高台付杯底部である。高台は貼り付け高台で、底部には回転糸切り時に生じたと思われる痕跡が残る。調整は内外面ヨコナデである。

1043は東播系壺である。焼成は須恵質で、外面に綾杉状のタキキの痕跡がみられる。内面はナデ調整である。

その他、土師質土器杯片・土師質土器蓋片が出土している。

1. 雷灰黄色2.5Y5/2砂質土(炭化物含む)
第391図 SK1168実測図



第392図 SK1168出土遺物実測図

土坑168 (SK1168) (第391図)

2号屋敷地西端 (M-7グリッド) において検出した長方形土坑である。土坑の規模は長軸1.82m、短軸0.80m、深さ0.12mを測り、断面形状は浅い逆台形状を呈する。

遺構内埋土は炭化物を多量に含む砂質土である。主軸方向は真北よりやや西偏する。

出土遺物（第392図）

1044は東播系壺で、焼成は須恵質である。体部外面は綾杉状のタタキの痕跡がみられ、内面はヨコナデ調整が施されている。

その他、東播系こね鉢・土師質土器杯片が出土している。

土坑169（SK1169）（第393図）

2号屋敷地西端（M-7グリッド）において検出した土坑であるが上部の土坑状の長方形の落ち込みの中で検出したものである。土坑の規模は長軸1.80m、短軸0.76m、深さ0.20mを測る。土坑の掘り方は東側面がほぼ直角に掘り込まれている。遺構内埋土は2層に分層され、2層とも炭化物あるいは鉄分を多量に含む砂質土である。主軸方向は真北よりやや西偏する。

出土遺物（第394図）

遺構内からは古代の須恵器も若干出土しているが、概ね13世紀以降の遺物が主体を占める。1045は土師質土器杯底部片で、外底面に回転糸切りの痕跡をとどめる。1046は先端部を欠損するが、頭部はL字状を呈し鉄釘と考えられる。

1047は明鏡の「洪武通寶」（1368年初鋤）で、背面上には「一錢」の文字が見られる。直径2.1cm、厚さ1.5mmを測る。

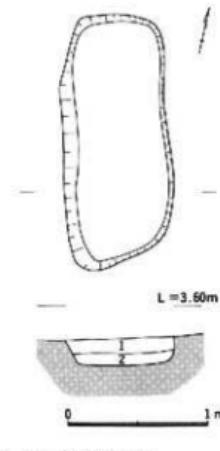
その他、瓦器挽片・土師質土器壺片・備前窯産と考えられる陶器片が出土している。

土坑175（SK1175）（第395図）

2号屋敷地中央部やや北寄り（L-8グリッド）で検出した長楕円形の土坑である。土坑の規模は長軸3.52m、短軸0.92m、深さ0.23mを測る。掘り方、断面形状は浅い逆台形状を呈し、遺構内埋土は黄褐色砂質土1層である。主軸方向は東西方向を示す。

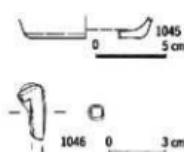
出土遺物（第396図）

1048・1049は土師質土器杯である。底部は回転糸切りと考えられる。調整は内外面ともヨ

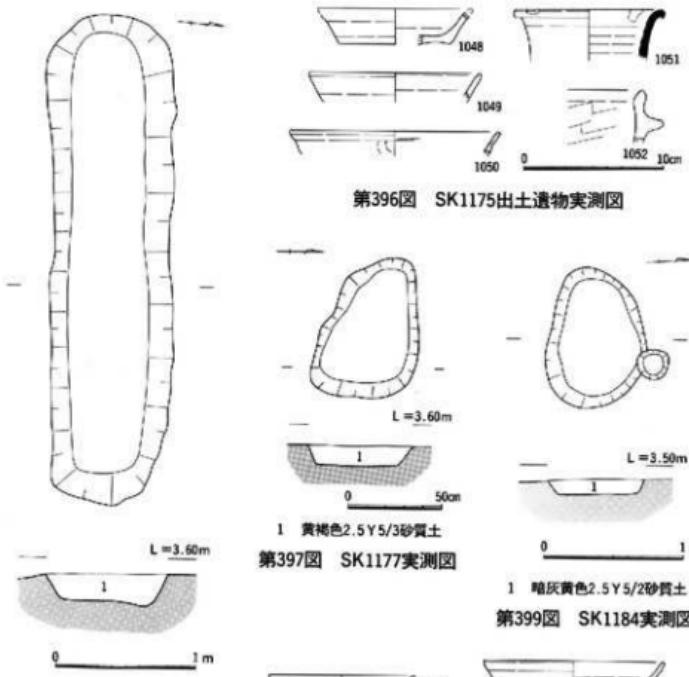


- 1 噴灰黃色2.5Y5/2砂質土
(炭化物小量マンガン鉄分や多(含む))
2 黃褐色2.5Y5/4砂質土
(マンガン鉄分多(含む粘性))

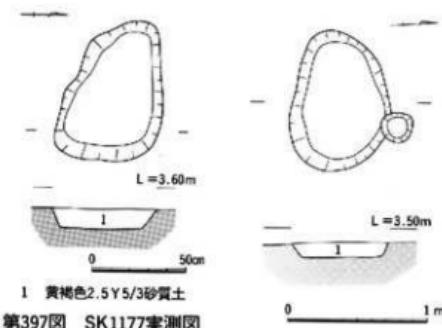
第393図 SK1169出土実測図



1047 (1/1)



第396図 SK1175出土遺物実測図



第397図 SK1177実測図
1 黄褐色2.5Y5/3砂質土



第398図 SK1175実測図
1 喧灰黄色2.5Y5/2砂質土

第399図 SK1184実測図
1 喧灰黄色2.5Y5/2砂質土

第395図 SK1175実測図

第398図 SK1177出土遺物実測図

第400図 SK1184出土遺物実測図

コナデである。1050は和泉型瓦器楕口縁部である。口縁外面ヨコナデ調整、内面には横方向のミガキが施されている。1051は白磁水注の頸部から口縁部である。口縁端部は下方に拡張し、外端面を形成する。釉は厚いが部分的に釉の剥落が見られる。1052は土師質土器釜口縁部で、口縁よりやや下がった位置に水平方向に延びる鈎が付く。口縁端部は若干外反する。調整は内面横方向のナデ、外面はヨコナデである。時期的には13世紀代と考えられる。その他、土師質土器鍋片・鉄釘片が出土している。

土坑177 (SK1177) (第397図)

2号屋敷地 (L-9グリッド)、土坑175 (SK1175) の北側に隣接して検出した不整形な土坑である。土坑の規模は長軸0.74m、短軸0.56m、深さ0.10mを測る。断面形状は浅い逆台形状を呈し、遺構内埋土は土坑175 (SK1175) と同様、黄褐色砂質土1層である。主軸方向は

東西方向を示す。

出土遺物（第398図）

1053は土師質土器杯口縁部である。内外面ヨコナデ調整で、端部は丸くおさめる。その他、瓦器腕片・鉄釘片が出土している。

土坑184（SK1184）（第399図）

2号屋敷地北西隅（K-7グリッド）において検出した円形に近い梢円形の土坑である。土坑の規模は長軸1.00m、短軸0.74m、深さ0.11mを測る。断面形状は浅い逆台形状を呈し、底面は平坦面である。主軸方向はほぼ東西方向を示す。

出土遺物（第400図）

造構内からは僅かの遺物しか出土していない。1054は土師質土器杯片である。体部は外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。調整は外面、幅の狭いナデが数段施されている。

その他、土師質土器鍋体部片が1点出土しているのみである。

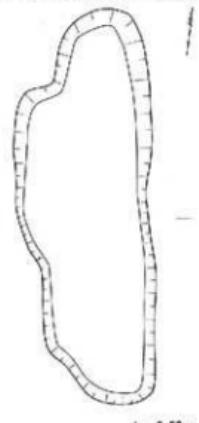
土坑186（SK1186）（第401図）

2号屋敷地北西コーナー部（K-6グリッド）において検出した長梢円形土坑であるが、検出プランから2基の土坑の切り合いが考えられる。土坑の規模は長軸2.28m、短軸（断面位置）0.98m、深さ約0.08mを測る。断面形状および埋土は検出面が自然流路1（SR1001）に向かって傾斜しているため西側の掘り方は浅い。

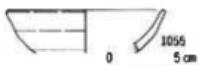
出土遺物（第402図）

1055は土師質土器杯口縁部である。口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。調整は内外面ともヨコナデである。

その他、青磁碗片が1点出土している。



第401図 SK1186実測図



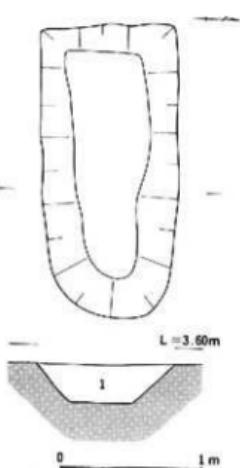
第402図 SK1186出土遺物実測図

土坑187 (SK1187) (第403図)

2号屋敷地中央西側隅 (L - 7 グリッド)において検出した方形状の土坑であるが、短辺の一方が丸くおさめている。土坑の規模は長軸2.07m、短軸0.97m、深さ0.28mを測り、断面形状は逆台形状を呈する。遺構内埋土は炭化物を含むオリーブ褐色砂質土である。主軸方向は東西方向を示す。

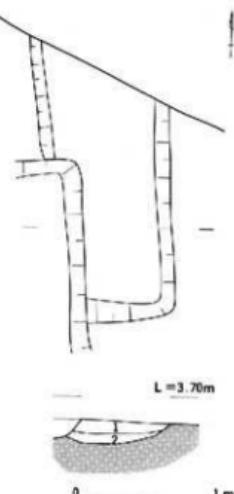
出土遺物 (第404図)

土坑内からは数点のみの遺物しか出土していない。1056は土師質土器杯口縁部である。調整は内外面ヨコナデで、端部は丸くおさめる。1057は土師質土器釜口縁部である。口縁部は直立気味で、外面には端部から若干下がった位置に外方に張りだした短い鈎が巡る。調整は内外面ヨコナデである。



1 オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(炭化物少量含む)

第403図 SK1187実測図



1 嗜灰黄色2.5Y5/2砂質土
2 黄灰色2.5Y5/1砂質土

第405図 SK1190実測図



第404図 SK1187出土遺物実測図



第406図 SK1190出土遺物実測図

土坑190 (SK1190) (第405図)

3号屋敷地東側(F-11グリッド)において検出した長方形土坑であり、土坑191(SK1191)に切られている。土坑の規模は北側が調査区外に延びるため不明であるが検出長は1.80m、短軸0.92m、深さ0.16mを測る。断面形状はレンズ状を呈し、遺構内の埋土には2層の砂質土が確認される。主軸方向はほぼ南北を示す。

出土遺物 (第406図)

1058は土師質土器杯口縁部である。内外面ヨコナデ調整であるが、内面はやや幅の狭いヨコナデが施されている。口縁端部は丸くおさめる。

その他、中世陶器片・ふいご羽口片と思われるものが出土している。

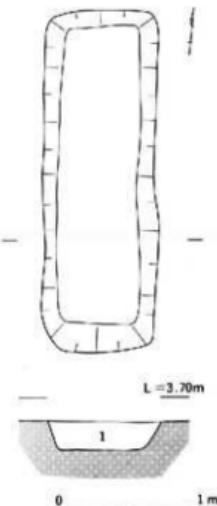
土坑191 (SK1191) (第407図)

3号屋敷地東側(F-11グリッド)において検出した長方形土坑で、土坑190(SK1190)を切っている。土坑の規模は長軸2.44m、短軸0.82m、深さ0.20mを測る。断面形状は逆台形状を呈し、遺構内埋土は炭化物を多量に含む砂質土1層である。主軸方向は南北を示す。

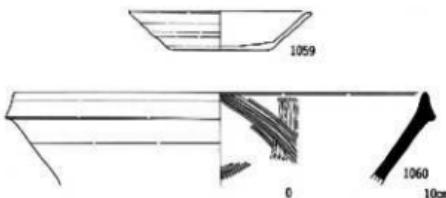
出土遺物 (第408図)

遺構内からは古代の土器も若干出土しているが主体は中世である。1059は内外面とも赤色塗彩された土師器杯で、口縁部が大きく開く浅いタイプである。体部は底部から外上方に直線的に延び口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面ヨコナデ、外底面は回転ヘラ切りのち弱いナデ調整である。

1060は備前窯の擂鉢である。口縁部は上下に拡張するもので、内面には斜め方向の摺り目が8条施され、若干新しい様相を呈するが概ね備前窯Ⅳ期後半の時期が考えられる。



第407図 SK1191実測図



第408図 SK1191出土遺物実測図

その他、土師質土器
鍋片・須恵器甕片が出
土している。

土坑194 (SK1194)

(第409図)

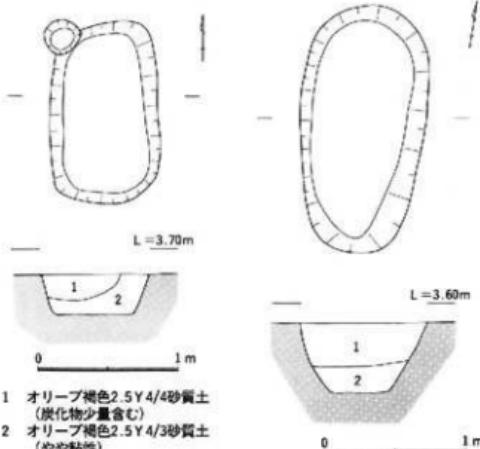
3号屋敷地 (G-9
グリッド)において検
出した隅丸の方形状土
坑であり、北側一角を
柱穴によって切られて
いる。土坑の規模は長
軸1.30m、短軸0.78m、
深さ0.28mを測る。掘
り方は検出面より垂直
気味に掘り込まれており、底面は平坦面を呈している。
遺構内埋土は2層に分層される。土質は2層ともオリ
ーブ褐色砂質土で第1層には炭化物を少量含んでいる。主
軸方向は南北を示す。

出土遺物 (第410図)

1061は断面三角形状の高台が付く和泉型瓦器碗底部片で
ある。調整は内底面に連結輪状のミガキが施されている。
その他、土師質土器杯片・土師質土器甕片が出土してい
る。

土坑199 (SK1199) (第411図)

3号屋敷地 (G-8グリッド)において検出した梢円形
の土坑である。土坑の規模は長軸1.76m、短軸0.90m、深
さ0.50mを測る。断面形状は逆台形状を呈し、遺構内の埋
土は2層に分層され第1層には炭化物を含んでいる。主軸
方向はほぼ南北を示す。



第409図 SK1194実測図

1 噴灰黄色2.5Y5/2砂質土
(炭化物を少量含む)
2 黄褐色2.5Y5/4砂質土(やや粘性)

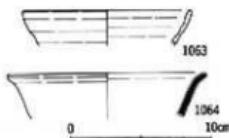
第411図 SK1199実測図



第410図 SK1194出土遺物実測図



第412図 SK1199出土遺物実測図



第413図 SK1205出土遺物実測図

出土遺物（第412図）

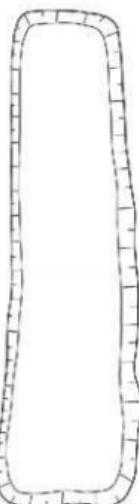
遺構内からは備前窯小壺口縁部1062と土師質土器釜が僅かに出土しているのみである。

土坑205（SK1205）（第413図）

P-18グリッドにおいて検出した掘り方の浅い土坑で、また重複する切り合いにより平面プランは確認できない。土坑内からは若干の遺物が出土している。

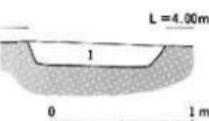
1063は土師質土器杯口縁部である。内外面とも幅の狭いヨコナブ調整で、口縁部は内嚢気味に立ち上がり端部は丸くおさめる。1064は口縁部が外反する青磁碗で、口縁端部を丸くおさめる。上田分類のD-2類にあたる。釉は比較的厚く、貫入が入る。

その他、土師質土器鍋体部片が出土している。



土坑212（SK1212）（第414図）

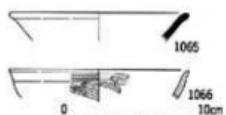
1号屋敷地ほぼ中央部（P-20グリッド）において検出した長方形土坑で、土坑46（SK1046）と並行する。土坑の規模は長軸3.54m、短軸0.98m、深さ0.16mを測る。掘り方の断面形状は浅い逆台形状を呈し、遺構内埋土は黄褐色砂質土1層である。主軸方向は南北を示す。



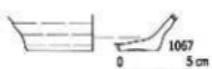
第414図 SK1212実測図

出土遺物（第415図）

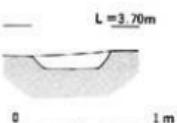
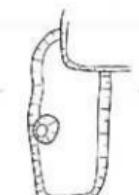
遺構内からは古代の土器も若干出土しているが、中世



第415図 SK1212出土遺物実測図



第417図 SK1224出土遺物実測図



第416図 SK1224実測図

遺物が主体を占める。1065は青磁碗口縁部で、端部が外反するタイプである。1066は和泉型瓦器碗口縁部で内外面とも横方向のミガキが施されている。

その他、赤色塗彩された土師器杯底部片・土師質土器鍋体部片・須恵器壺体部片が出土している。

土坑224（SK1224）（第416図）

2号屋敷地中央部（N-8グリッド）において検出した長方形土坑である。北端を土坑223（SK1223）によって切られている。土坑の規模は長軸1.24m、短軸0.56m、深さ0.10mを測る。造構掘り方の断面形状は浅い逆台形状を呈する。遺構内埋土は不明である。主軸方向は南北を示す。

出土遺物（第417図）

1067は土師質土器杯である。調整は内外面ヨコナデ、外底面は板ナデ状圧痕が見られる。

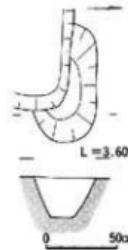
その他、土師質土器釜片が出土している。

土坑226（SK1226）（第418図）

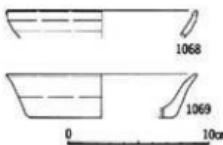
2号屋敷地中央北寄り（L-8グリッド）において検出した楕円形状の土坑で、土坑172（SK1172）によって切られている。土坑の規模は長軸0.84m、短軸0.44m、深さ0.28mを測る。断面形状は深い逆台形状を呈する。主軸方向は東西を示す。

出土遺物（第419図）

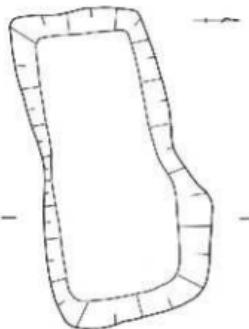
1068・1069は土師質土器杯である。1068は口縁部が内凹



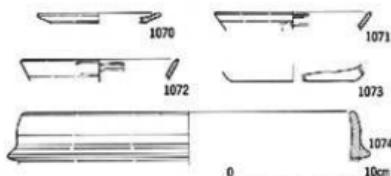
第418図 SK1226実測図



第419図 SK1226出土遺物実測図



第420図 SK1233実測図



第421図 SK1233出土遺物実測図

気味に立ち上がるるもので、端部は尖り気味におさめる。調整は内外面ヨコナデである。1069は体部が外反気味に外上方に立ち上がるタイプのもので、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面ヨコナデで、外底面は回転糸切りになるものと考えられる。

その他、須恵器甕体部片・土師質土器甕体部片が出土している。

土坑233（SK1233）（第420図）

1号屋敷地中央部（R-20グリッド）において検出した長方形土坑で、西側半分は試掘により若干削平されている。土坑の規模は長軸2.24m、短軸1.20m、深さ0.30mを測る。断面形状は浅い逆台形状を呈し、遺構内埋土は褐色砂質土である。主軸方向は東西を示す。

出土遺物（第421図）

遺構内からは9世紀代の須恵器杯蓋片なども出土しているが、概ね中世の遺物が主体を占める。1070は瓦器小皿で、口縁部外面ヨコナデ、底部ユビオサエである。1071・1072は和泉型瓦器挽口縁部である。調整は口縁部外面ヨコナデ、内面には横方向のミガキが施されている。1072には僅かに口縁部外面にミガキが見られる。1073は土師質土器杯底部片で、外面には回転糸切りの痕跡がみられる。1074は瓦質土器釜で、口縁部からやや下がった位置に短い鋒が付くものである。口縁部は若干内彎気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。

その他、須恵器甕片・土師質土器鍋と思われる体部片が出土している。時期的には13世紀代と考えられる。

土坑234（SK1234）（第422図）

1号屋敷地中央やや北寄り（O-20グリッド）において検出した長椭円形の土坑で、不明遺構5（SX1005）を切っている。土坑の規模は長軸2.52m、短軸0.92m、深さ0.10mを測る浅いものである。断面形状は皿状を呈し、遺構内埋土は1層のみである。主軸方向はほぼ南北を示す。

出土遺物（第423図）

1075は白磁碗底部片で、削り出しによる低い高台が付 第423図 SK1234出土遺物実測図



1 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土
第422図 SK1234実測図



く。高台の外面は直に、内面は斜め方向に削り込まれたもので厚みがある。釉は若干黄色を呈する白色である。

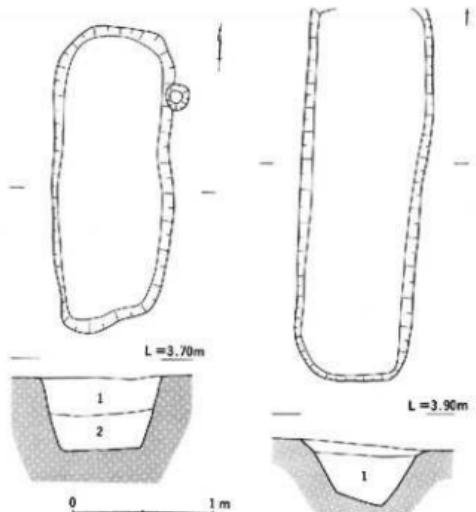
その他に、土師質土器杯口縁部・瓦器碗片・土師質土器鍋口縁部が出土している。時期的には概ね13世紀代と考えられる。

土坑272 (SK1272)

(第424図)

2号屋敷地中央やや西寄り(M-9グリッド)において検出した隅丸の長方形土坑である。土坑の規模は長軸2.20m、短軸0.88m、深さ0.52mを測るやや深い土坑である。

断面形状は検出面よりやや垂直気味に掘り込まれ逆台形状を呈する。遺構内埋土は2層に分層され、ほぼ水平堆積を



第424図 SK1272実測図

1 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土
(炭化物少)

第426図 SK1277実測図



示す。第1層は暗灰黄色の砂質土で少量の炭化物を含み、第2層も同じく炭化物を含むオリーブ褐色砂質土である。主軸方向は南北を示す。

出土遺物 (第425図)

遺構内からは僅かの遺物しか出土していない。1076は土師質土器小皿で、口縁部は底部から短く内側気味に立ち上がるるものである。調整は内外面ヨコナデで口縁端部は尖り気味におさめる。外表面は回転糸切りになるものと考えられる。1077は和泉型瓦器碗口縁部と考えられるものであるが、二次焼成を受けたためか炭素の付着は認められない。調整は口縁部外面はやや幅広のヨコナデ、中位から下半部はユビオサエの痕跡、内面は横方向へのヘラミガキの痕跡が認められる。胎土には比較的多くの砂粒・石英粒が含まれている。

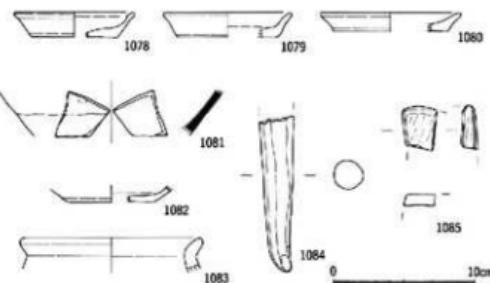
その他、土師質土器杯片・土師質土器鍋体部片と思われるものが出土している。

土坑277 (SK1277) (第426図)

2号屋敷地ほぼ中央部 (M-10)

グリッド)において不明遺構2 (SX1002)と重複した形で検出した長方形土坑である。土坑の規模は長軸2.74m、短軸0.90m、深さ0.42mを測る。掘り方は2段状で検出面より浅く斜め方向に掘り込まれ、2段目は急角度で底面に達

している。断面形状は逆台形状を呈するが底面は若干傾斜している。遺構内埋土は2層に分層され、下層部には炭化物を少量含む砂質土が堆積している。主軸方向は南北を示す。



第427図 SK1277出土遺物実測図

出土遺物 (第427図)

遺構内からは古代の須恵器甕片も出土しているが、概ね中世遺物が主体を占める。1078~1080は土師質土器小皿である。1078・1079は口縁部が外方に外反しながら立ち上がるものの、1080は底部から口縁部をひねりだした程度である。1078の外底面には回転糸切りの痕跡が残る。1081は白磁碗体部片である。釉は白色で外面には貫入があり、体部外面下半部は施釉されていない。1082は内面のみ黒色処理されている黒色土器杯底部片である。時期的には9世紀代のものと考えられる。1083は土師質土器甕口縁部と考えられるもので、口縁部は厚身で丸くおさめている。1084は土師質土器釜の脚部である。脚端部は外方にひねり出している。調整は継方向への板ナデである。1085は凝灰岩性の砥石で片面のみ残存する。

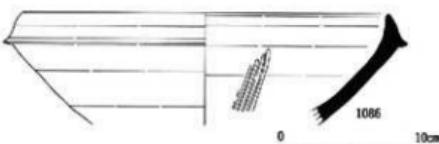
その他、瓦器挽片・土師質土器片・土師質の瓦片が出土している。

土坑296 (SK1296) (第428図)

3号屋敷地、調査区西端 (R・S-26グリッド)において検出し



第428図 SK1296実測図



第429図 SK1296出土遺物実測図

た土坑で平面形は橢円形になるものと考えられる。土坑の規模は長軸1.76m、短軸は検出長0.54m、深さは0.36mを測る。掘り方は逆台形状を示し底面は平坦面を形成するが、土層の堆積状況から2度の掘削が考えられる。遺構内埋土は褐色系統の砂質土で5層に分層され、遺物は主に第1層から第4層に含まれる。1層及び5層は柱穴の可能性が考えられる。主軸方向は南北を示す。

出土遺物（第429図）

1086は備前焼IV期の擂鉢である。口縁部は上下に拡張し下端部は尖り氣味におさめる。内面は放射状に割り目が入るものである。

その他、土師質土器杯底部片・土師質土器鍋体部片が出土している。

土坑307（SK1307）（第430図）

3号屋敷地（S-28グリッド）において検出した長方形土坑である。土坑の規模は長軸1.60m、短軸0.56m、深さ0.12mを測る。断面形状は浅い逆台形状を呈し、遺構内埋土は褐色系統の砂質土で、炭化物および鉄分を含んでいる。主軸方向はほぼ南北を示す。

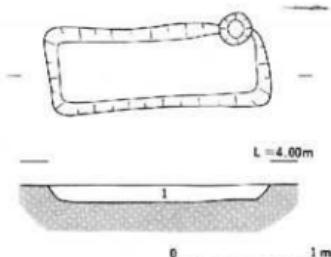
出土遺物（第431図）

遺構内からは若干の遺物しか出土していない。1087は土師質土器杯である。口縁部は底部から緩やかに外上方に立ち上がり端部は尖り氣味におさめる。外底面の切り離しは回転系切によるものである。

その他、土師質土器釜の脚部片が出土している。

土坑310（SK1310）（第432図）

3号屋敷地（S-31グリッド）において検出した長方形土坑で北隅を掘立柱建物の柱穴5によって切

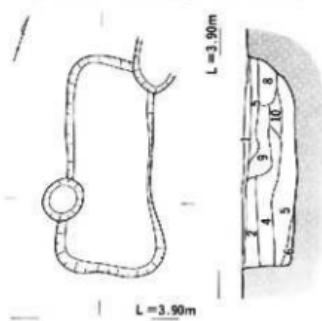


1 オリーブ褐色2.5Y4/5砂質土
(暗灰褐色2.5Y5/2砂質土を含む、炭化物含む)

第430図 SK1307実測図



第431図 SK1307出土遺物実測図



- 1 褐色10YR4/4砂質土
- 2 黄褐色10YR5/6砂質土(遺物を含む)
- 3 灰褐色7.5YR4/2砂質土
- 4 褐色7.5YR4/4砂質土(炭化物含む)
- 5 褐色7.5YR4/3砂質土(遺物、炭化物含む)
- 6 にじみ黄褐色10YR5/4砂質土
- 7 喙褐色10YR3/4砂質土
- 8 にじみ褐色7.5YR5/3砂質土
- 9 喙褐色7.5YR3/4砂質土(遺物を含む)

第432図 SK1310実測図

られている。土坑の規模は長軸1.54m、短軸0.78m、深さ0.43mを測る。掘り方はほぼ垂直気味に掘り込まれているが、北側は斜めの掘り方を呈している。底面は平坦面を形成している。

遺構内埋土は10層に分層され、褐色

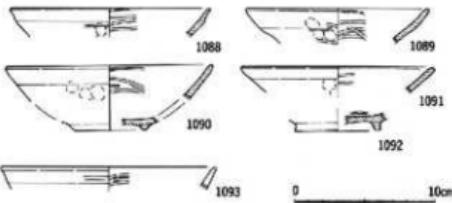
系統の砂質土によって充填されてい

る。埋土の状況はほぼ水平堆積を示すものの、北側掘り方よりほぼ中央部において別の遺構の切り合が認められ、土層の堆積に乱れが見られる。遺物は主に第9層、第10層に包含されている。主軸方向は真北よりやや西偏している。

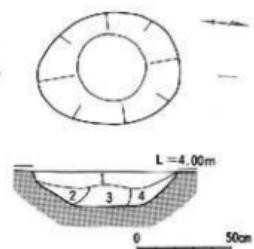
出土遺物（第433図）

遺構内からは黒色土器A類碗も出土しているが、13世紀代以降の遺物が主体を占める。1088～1092は和泉型瓦器碗で、外面に僅かに横方向へのミガキが認められるものも見られるが、概ね尾上編年のIII-2期段階頃と考えられる。体部外面は口縁部ココナズ、下半部にはユビオサエの痕跡がみられる。内面は横方向へのヘラミガキである。1093は黒色土器B類碗の口縁部である。口縁端部は丸くおさめ、調整は外面横方向のヘラミガキ、内面は綿密な横方向へのヘラミガキ調整である。

その他、土師質土器鍋体部片・須恵器片が出土している。



第433図 SK1310出土遺物実測図

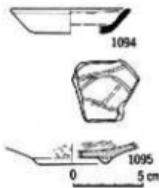


- 1 褐色10YR4/6砂質土
- 2 に赤褐色10YR6/4砂質土(炭化物含む)
- 3 に赤褐色10YR4/3砂質土(炭化物含む)
- 4 黄褐色10YR5/6砂質土(炭化物含む)

第434図 SK1312実測図

土坑312（SK1312）（第434図）

3号屋敷地（R-28グリッド）において検出したほぼ円形に近い土坑である。土坑の規模は長軸0.78m、短軸0.60m、深さ0.25mを測る。掘り方の断面形状はレンズ状を呈する。遺構内埋土は4層に分層され、褐色系統の砂質土で、第2層から第3層には炭化物が含まれている。主軸方向はほぼ南北方向である。



第435図 SK1312出土遺物実測図

出土遺物（第435図）

1094は口禿げの白磁皿で横田・森田分類のⅩ類に相当するもので、釉はやや厚く全面に施

されている。口縁端部は方形状におさめる。1095は和泉型瓦器碗底部片と考えられるが器壁は厚く調整も荒いものである。内底面には不整方向への荒いヘラミガキが施されている。

その他、底部回転ヘラ切りの土師質土器杯片・土師質土器釜体部片が出土している。

土坑315 (SK1315) (第436図)

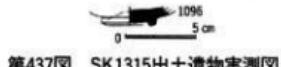
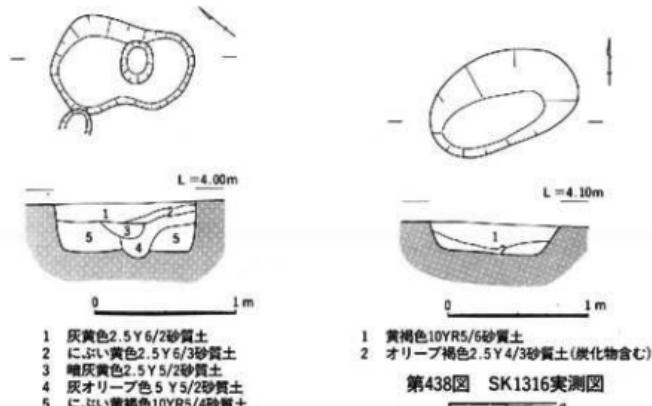
3号屋敷地 (S-30グリッド)において検出した不整形な土坑である。土坑の規模は長軸1.02m、短軸0.70m、深さ0.38mを測る。掘り方は検出面より垂直に掘り込まれ底面は平坦面を形成しているが、ほぼ中央部に浅いピット状の落ち込みが見られる。遺構内埋土は5層に分層され、褐色系統の砂質土である。主軸方向は真北よりやや西偏している。

出土遺物 (第437図)

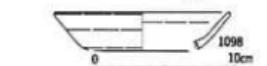
1096は白磁皿底部片である。高台は削り出しで、高台見込みにはヘラ状工具による胎土の切り離しがみられる。釉は白色で細かい貫入が入るもので、外面高台部には施釉されない。

土坑316 (SK1316) (第438図)

3号屋敷地 (S-27・28グリッド)において検出した楕円形の土坑である。土坑の規模は長軸1.02m、短軸0.70m、深さ0.36mを測る。断面形状は深い逆台形状を示し、遺構内埋土



第437図 SK1315出土遺物実測図



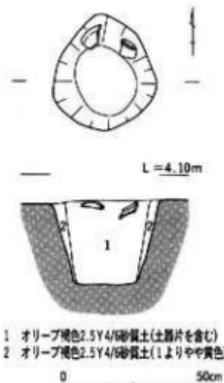
第439図 SK1316出土遺物実測図

は褐色系統で2層に分層され、第2層には炭化物が含まれている。主軸はほぼ東西に近い方向を示す。

出土遺物（第439図）

遺構に伴う遺物はごく僅かである。1097は和泉型瓦器皿と考えられるもので、口縁部外面は強いヨコナデにより若干外反し、端部は尖り気味におさめる。底部にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。内面は横方向へのミガキが施されている。時期的には尾上編年Ⅲ期におさまるものと考えられる。1098は土師質土器杯口縁部で、口縁部は体部から外上方に立ち上がり端部は丸くおさめる。調整は内外面ともヨコナデである。

その他、瓦器挽片・土師質土器鍋体部片が出土している。

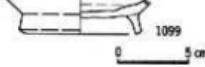


1 オリーブ褐色2.5Y4/6砂質土(土器片を含む)
2 オリーブ褐色2.5Y4/6砂質土(よりやや黄色)

柱穴

第1遺構面から検出した柱穴状遺構は総数2,608ヵ所を数え、その内掘立柱建物および柵列遺構に伴わないピットで遺構内から出土した遺物についてI期・II期を併せて掲載した。

第440図 SP11152実測図・出土遺物実測図



柱穴2152 (SP11152) (第440図)

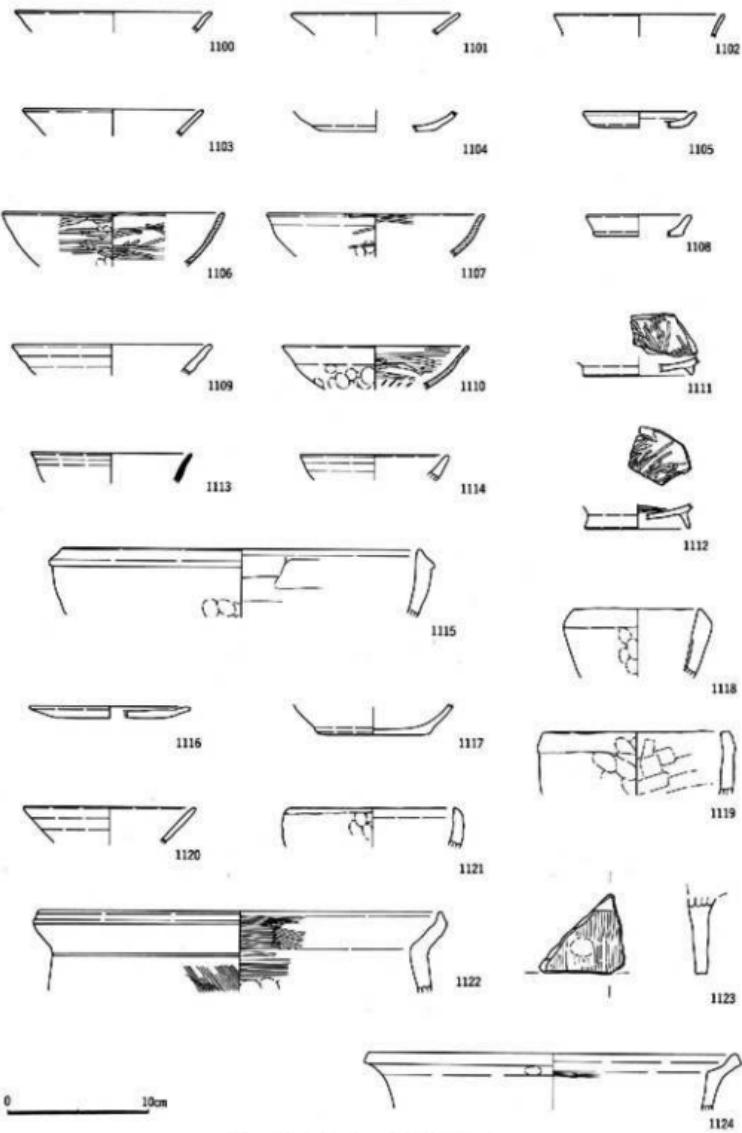
3号屋敷地、調査区北西隅において検出した柱穴である。建物との関連は認められず西側調査区外に延びる建物に伴うものと考えられる。柱穴の規模は径0.40m、深さ0.30mを測るしっかりとした掘り方をもつ。柱穴内の埋土は2層に分層され、遺物は第1層上層から出土している。

1099は土師器の高台付杯の底部片である。高台は断面U字状で、高く外にふんばるものである。杯底部外面は回転ヘラ切り未調整である。

その他、直立気味の口縁と口縁直下に短い飼をもつ土師器釜片・黒色土器A類挽片が出土している。

柱穴出土遺物(1) (第441図)

1100～1102はQ-19グリッド、柱穴1777 (SP10777) から出土した土師器杯口縁部である。



第441図 柱穴出土遺物実測図 (1)

調整は内外面ヨコナデで、1100には両面に赤色塗彩が施されている。この他、須恵器片・製塩土器片が出土している。1103・1104はQ-27グリッド、柱穴2193(SP11193)から出土した土師器片である。1103は口縁部で外上方に直線的に延び端部は丸くおさめる。1104は底部片で外底面は回転ヘラ切り後丁寧なナデが施されている。また、外面には赤色塗彩の痕跡が残る。1105～1107は第3分割のT-32グリッド、柱穴2592(SP11592)より出土した遺物である。1105は土師質土器小皿で、口縁部は底部より短く外上方に立ち上がる。1106・1107は和泉型瓦器碗と考えられるが、1107の口縁部内面には弱い沈線が巡り若干様相が異なる。1106の口縁部は内彌氣味に立ち上がり端部を丸くおさめ、ミガキ調整は体部外面中位まで及ぶ。1107は口縁端部を外面のナデにより若干外反させるもので、外面には部分的にミガキ調整が施されている。時期的には1106が若干古相を示すものの概ね尾上編年のII-3期からIII-1期にあたるものと考えられる。1108～1110はL-10グリッド、柱穴917(SP1917)より出土したもので、1108は土師質土器小皿、1109は土師質土器杯、1110は和泉型瓦器碗で内面は横向方向へのヘラミガキと見込みに平行ミガキが施され、尾上編年のIII-3期にあたるものである。

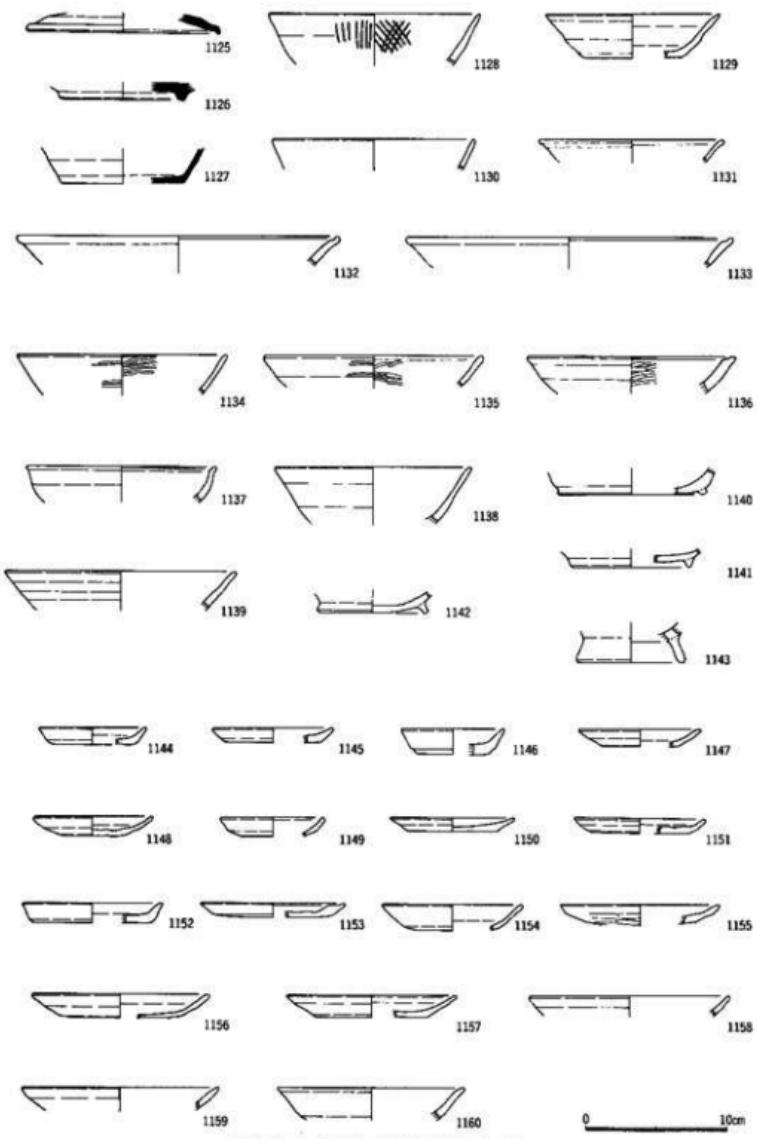
1111・1112はL-9グリッド、柱穴845(SP1845)より出土した黒色土器A類碗の高台部である。高台は太身で低い1111と、細身で比較的高い1112の2種類が認められる。1113～1115はN-11グリッド、柱穴1405(SP10405)より出土したもので、1113は白磁碗と考えられる小片で口縁端部は若干外反させ尖り気味におさめる。1114は土師質土器口縁部片、1115は土師質土器蓋で低く立ち上がる口縁部直下に短い鉗状の凸帯を巡らす。1116・1117はR-23グリッド、柱穴1974(SP10974)より出土したもので、1116は口径11cm前後を測る土瓶器皿、1117は土師器杯で底部は若干突出し外底面は丁寧なナデが施され、また全面には赤色塗彩されている。

1118・1119はP-19グリッド、柱穴1699(SP10699)より出土した製塩土器で、1118は断面三角形状の口縁部を有し内面に布目痕をとどめ、1119は断面方形形状を呈し内面には板ナデ状の調整が施されている。1119は1118よりも硬質で多量の石英粒・長石を含んでいる。1120～1122はR-30グリッド、柱穴2392(SP11392)より出土したもので1120は口縁部が直線的に外上方に延びる土師器杯、1121は製塩土器口縁部、1122は土師器甕口縁部で上端部を上方に拡張するもので、胎土から搬入品と考えられる。1123・1124はF-6グリッドより出土したもので、1123は竈片と考えられるもの、1124は土師質土器の鍋口縁部で、口縁部は短く屈曲し端部は若干肥厚する。この他、瓦器碗片・不明鉄製品が出土している。

柱穴出土遺物(2)(第442図)

1125～1213までの遺物は第1遺構面で検出した遺構で、掘立柱建物および柵列として捉えられなかった柱穴状遺構より出土した遺物である。各遺物の遺構番号は観察表に表記している。

1125は須恵器杯蓋で端部は下方に拡張する。1126は須恵器高台付杯で、高台は断面方形状



第442図 柱穴出土遺物実測図 (2)

で体部との屈曲部に貼り付けている。1127は須恵器杯で体部は外上方に直線的に立ち上がる。外面に火拂の痕跡が残る。1128は土師器杯口縁部で口縁部は外上方に立ち上がり端部は尖り気味におさめる。調整は内外面ヨコナデで、外面には放射状の暗文、内面には格子状を見した暗文が施されている。また内外面とも赤色塗彩されている。1129～1131は土師器杯口縁部で内外面とも赤色塗彩が施されている。1132・1133は土師器皿口縁部で口縁端部は上方に僅かに拡張し、内面に沈線が巡る。調整は内外面ともヨコナデで1132は内外面とも赤色塗彩されている。

1134・1135は黒色土器A類椀の口縁部で、ミガキ調整は外面の一部にも認められる。1136は内面黒色処理した鉢と考えられる口縁部で口縁端面は平坦部を形成する。内面には綿密なミガキが施されている。1137は土師器杯口縁部で口縁端部は外反し、内面には細い沈線が巡る。1138・1139は土師器椀（杯）口縁部で内彌氣味に立ち上がり端部は尖り気味におさめる。1140・1141は土師器の高台付杯で高台は1140が断面方形状、1141が断面U字状を呈する。1142は土師器椀の底部片で、断面J字状の高台が付く。1143は土師器杯の高台部と考えられるもので、断面U字状の比較的高い高台である。

1144～1153は土師質土器の小皿で、1144～1146・1148・1152の底部には回転糸切りの痕跡が残る。また、1147・1149・1151・1153には回転ヘラ切り痕が認められる。1154～1160は土師質土器皿で、比較的口縁部の立ち上がりが高く口係の大きいものである。底部の切り離しは1156が回転ヘラ切り後ナデ、1157は回転糸切りである。

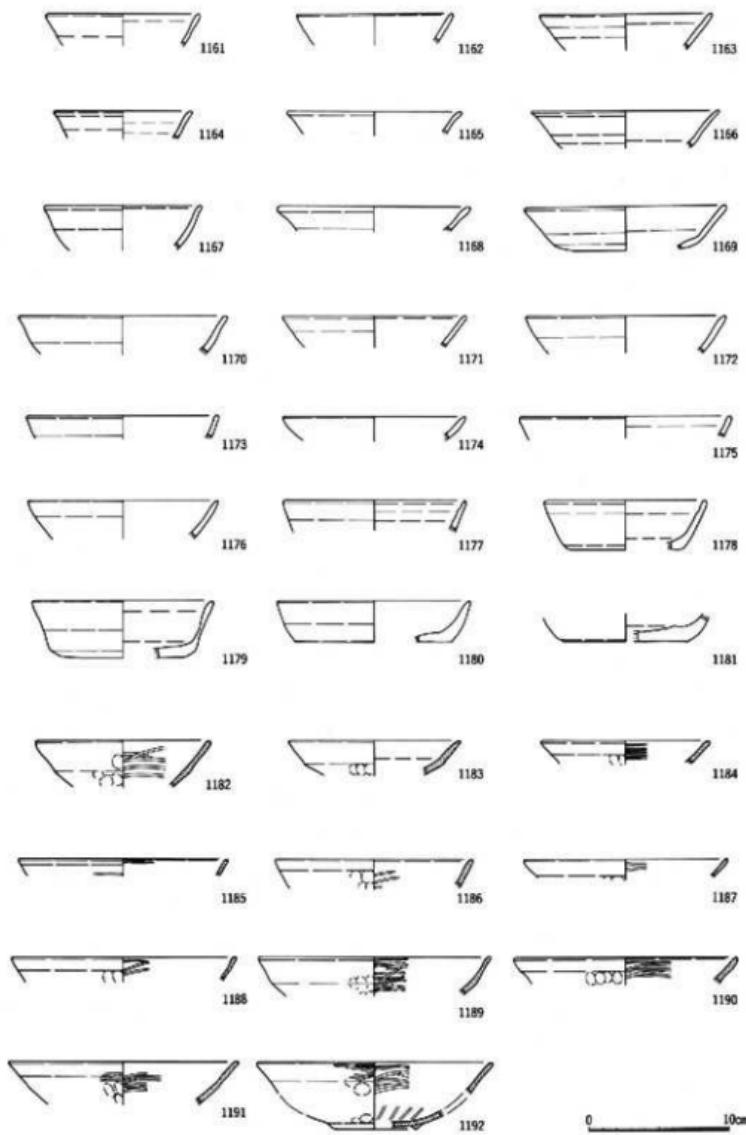
柱穴出土遺物(3) (第443図)

1161～1181は土師器・土師質土器の杯である。口縁部の形態から口縁部を直線的におさめるもの1161～1163、口縁部を若干外反させるもの1164～1171・1179、口縁部が内彌氣味に立ち上るもの1172～1178・1180・1181に分けられる。このうち1163には内面に赤色塗彩されており、1175は内外面とも赤色塗彩が施されている。調整は全て内外面ヨコナデで、外底面の切り離しは1179が回転ヘラ切り後ナデ調整、1180・1181が回転糸切りである。

1182～1192は和泉型瓦器椀である。1182～1184は口径12cm前後を測るもので外面にはユビオサエ後口縁部に強いヨコナデが施され、口縁部は若干外反する。1185～1192は口径14cmから16cm前後を測るもので外面はユビオサエ後口縁部ヨコナデが施されるが、1185・1191・1192には部分的に横方向へのミガキが施されている。内面調整は横方向へのヘラミガキで、1192の内面見込みには平行ミガキが施されている。時期的には口径および調整などから1182～1184が尾上編年のⅣ期、1185～1192がⅢ期にあたるものと考えられる。

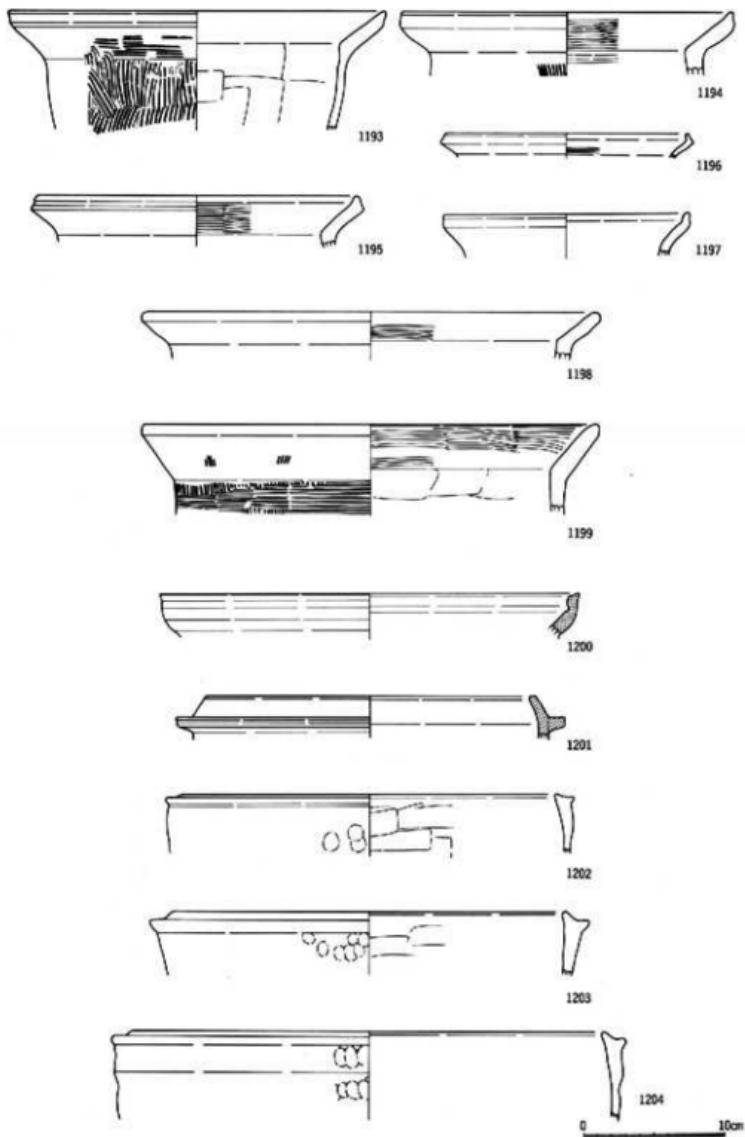
柱穴出土遺物(4) (第444図)

1193～1199は土師器壺・鍋である。1193・1194は口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部の



第443図 柱穴出土遺物実測図 (3)

0 10cm



第444図 柱穴出土遺物実測図 (4)

断面形状は三角形状を呈する。調整は外側荒いハケ、内面は1193がナデ、1194が横ハケ調整である。1195～1197は口縁端部を上方に拡張するものである。1195は製塩土器片が共作している。1198・1199は口縁端部を丸くおさめるもので、内面調整はヨコハケである。1194・1195・1198は石英粒・長石・雲母・角閃石を含むことから搬入品の可能性が考えられる。

1200は瓦質土器の鍋口縁部で口縁端部を上方に大きく拡張し上端面を形成し、受け口状を呈する。形態からは、畿内産の可能性が考えられる。⁽²³⁾ 1201は瓦質土器釜で口縁部は若干内向気味に立ち上がり端部を方形状におきめ、やや下がった位置に断面方形状の鋸を巡らす。1202～1204は土師質土器の鍋で、口縁部は短く立ち上がり外面直下に外方に張り出す小さい鋸状の凸帯を巡らせるものである。

柱穴出土遺物(5) (第445図)

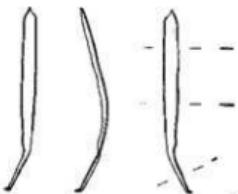
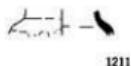
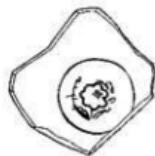
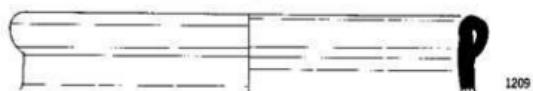
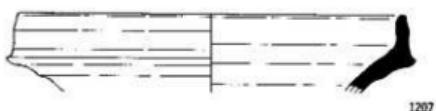
1205・1206は束播系こね鉢の口縁部である。1205は口縁部を上方に拡張し、端部は尖り気味におさめ断面三角形状を呈する。1206の口縁端部は屈曲をもたず体部からそのまま口縁部にいたるもので、端部をナデにより丸みをもった方形状に形成する。

1207は備前窯壺鉢である。口縁部は直立気味に大きく立ち上がり、端部は方形状におさめる。外端面には凹線は形成されていない。時期的には口縁部の形状から備前焼Ⅴ期前半、16世紀前半頃と考えられる。1208は土師質土器壺鉢の体部片である。調整は内面ヨコハケの後に摺り目がほどこされている。外面はユビオサエ後荒いタテハケ調整である。1209は備前窯壺の口縁部で、直立する頸部に粘土帶を貼付け玉縁状に成形する。時期的には備前焼Ⅴ期前半頃と考えられる。

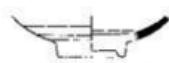
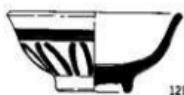
1210は青磁碗である。口縁部は底部から内側気味に外上方に立ち上がり、端部は若干肥厚させ丸くおさめる。高台部は下部外面を斜めに面取りしている。体部外面には幅広の蓮弁文と上部に3条の沈線文が丸彫りされており、内面見込みには花文がスタンプされている。施釉は体部全面と、高台部は外面から疊付を越えて内面にいたる。上田分類のB-II類に相当し時期的には14世紀後半から15世紀前半頃と考えられる。1211は鉄釉の施された小壺片で、丸みをもつて体部に直立する短い口縁部が付くものと考えられる。胎土は暗灰色を呈する。1212は白磁碗の体部片で、外面にはケズリの痕跡が明瞭に残る。1213は銅製の笄である。長さ13.1cm、幅0.9cmを測り、先端部は折り曲げている。

積石墓 (ST1001) (第446図)

1号屋敷地中央部やや西寄り (P-17・18グリッド) において検出した積み石を伴う石組墓である。調査時には耕作土により盛り土が見られたが、塚としての標石等は確認されなかった。積石は人頭大の砂岩礫も含まれるが、主体は拳大の砂岩礫が中心である。積石は主体



1213



0 16cm

第445図 柱穴出土遺物実測図 (5)

部上面に被覆する形で積まれており、範囲は径3.0m前後、高さは0.30m前後を測る。積石自体は若干の攪乱を受けているものと思われ、本来は半円形を呈したものであったと考えられる。積石中には多量の土器が破碎した状況で散乱しており、凝灰岩製の石塔と思われる破片も出土している。また、若干ではあるが人骨片と思われる骨片が出土している。

石室の検出時には蓋石として0.60m~0.80mの砂岩礫が4枚短軸方向に架けられており、間を人頭大砂岩礫で充填していた。石室自体攪乱は受けていない状況である。

墓壇の平面形は長方形を呈し、掘り方の規模は長軸2.18m、短軸1.46m、深さ0.46mを測る。

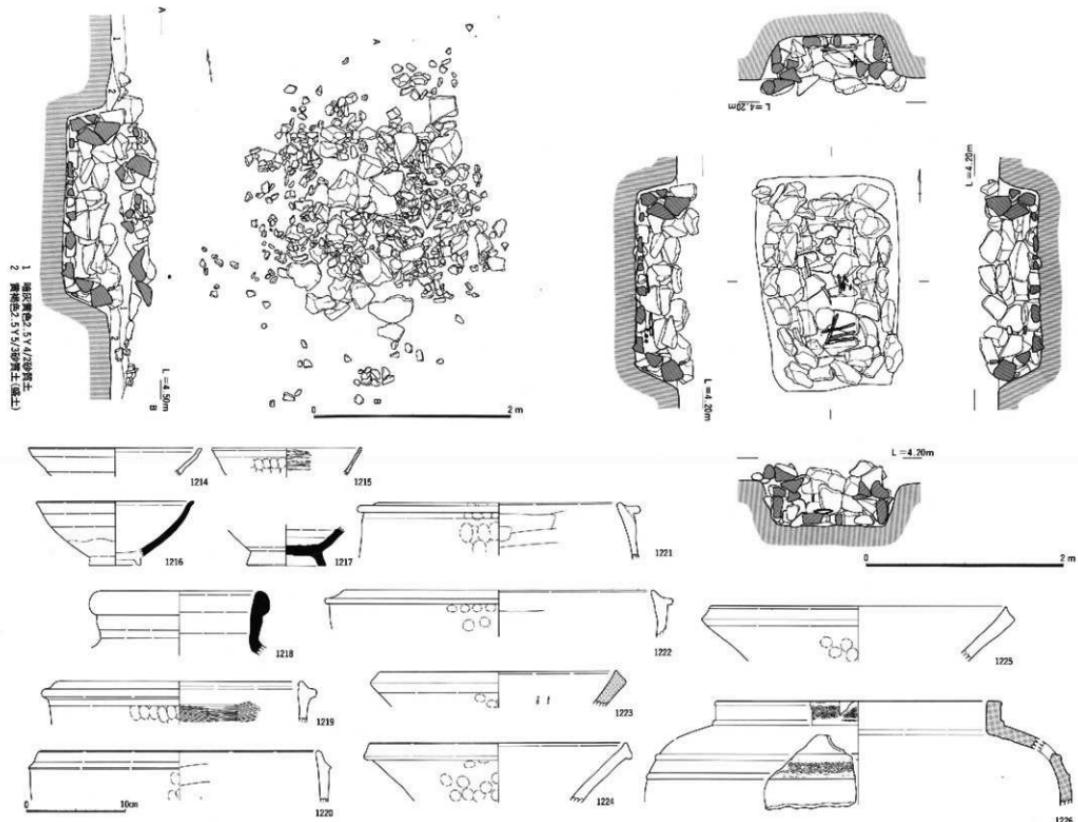
石室は0.30m前後の砂岩礫を平積で2段ないし3段に積み上げている。内法は小口部で0.60m、長軸1.40mを測る。高さは0.60mを測り墓壇天場より約0.15m、1段分高く積み上げている。床面にも同規模程度の砂岩礫が敷かれているが、石材の配置は疎らで、石材間は充填されていない。石室の主軸方向はN 6°Wを測る。

石室内からは鉄釘が小口部四隅において集中して出土し、また調壁側においても点在する事から木棺が置かれていたものと考えられる。木棺の規模は長辺1.30m、短辺0.40mと推定される。推定される木棺の北側から頭骨片、南側から大腿骨・脛骨が折り重なった状態で検出されている事から埋葬状態は頭部を北に向けた横臥屈葬であったと推定される。

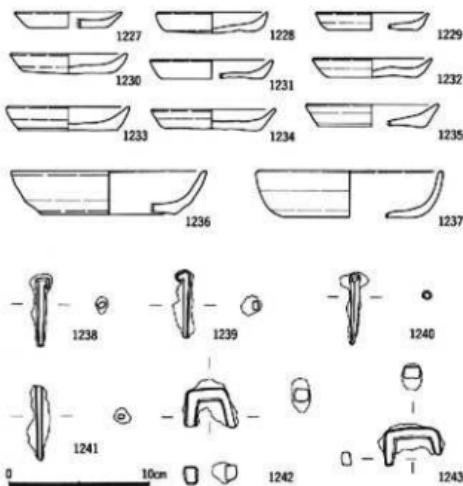
時期は石室内に副葬された遺物から13世紀代と考えられる。

出土遺物

積石内からは多量の遺物が出土している。1214は土師質土器杯で、外方に立ち上がる口縁端部を若干内向させる。1215は和泉型瓦器椀口縁部片で、外面ユビオサエ後口縁部ヨコナデ、内面横方向へのヘラミガキ調整である。尾上編年のIII-2段階と考えられる。1126は瀬戸・美濃系の平碗体部片である。体部は内彌氣味に立ち上がり、口縁部は外面の強いヨコナデにより若干外反させ端部は尖り気味におさめる。釉は薄緑色の灰釉で内面全面と外面は中位下半まで施釉する。時期的には14世紀代と考えられる。1217は須恵器壺の高台部である。高台は高く、「ハ」の字状にふんぼり断面形状は方形を呈する。1218は備前窯壺の口縁部である。頸部は直立し口縁部は肥厚させ玉縁状におさめる。時期的には備前焼Ⅳ期にあたる。1219~1222は土師質土器釜である。1220は比較的高い口縁部を有し断面三角形状の鈞状の凸帯を巡らすもので、その他は短く立ち上がる口縁部直下に断面方形形状を呈した細身の鈞が巡るものである。1223は瓦質土器の擂鉢で口縁部上端部を僅かにつま出し尖り気味におさめる。1224・1225は土師質の擂鉢で、1224は口縁端部を若干上下に拡張し丸くおさめ、1225は口縁上端部を僅かに上方へつまみだし尖り気味におさめるものである。調整は外面ユビオサエ後ナデ、内面ヨコナデ調整である。1226は瓦質土器の風炉で、部分的に炭素の付着が失われ赤褐色



第446図 ST1001実測図（左、集石・右、石室）集石内出土遺物実測図

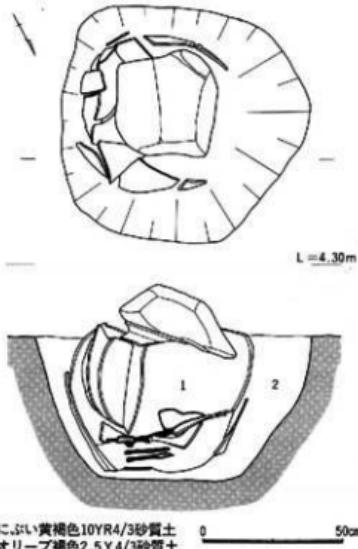


第447図 ST1001石室内出土遺物実測図

を呈する。口縁部は直立し方形状におさめ、外面部には花菱文スタンプが押捺されている。また同様に体部の肩部にも2条の凸帯間に花菱文がスタンプされている。菅原分類のA型にあたり、15世紀代の年代が考えられる。

石室内出土遺物（第447図）

石室内からは北側、頭部周辺から集中して土器片が出土したが、全て破碎されており完形は1点もない。1227～1235は土師質土器小皿で、口縁部は底部から外上方に短く立ち上がり尖り気味におさめる。底部の切り離しは全て回転糸切りである。1236・1237は土師質土器杯で、口縁部は底部から若干内寄気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。底部の切



第448図 ST1002実測図

り離しは回転糸切りである。

1238～1241は鉄釘で、断面方形状を呈し頭部は逆L字状に折り曲げている。1242・1243は「コ」の字状に折り曲げた鉄製品で、断面方形形状を呈することから鍼と考えられる。

甕棺墓（ST1002）（第448・449図）

1号屋敷地、調査区南東隅において検出した甕棺で、備前甕を棺材に転用したものである。

棺を埋納する墓壙の掘り方の平面プランは不整円形で、断面形状は幅広のU字状を呈する。

墓壙の規模は検出径約0.88m、

深さ0.50mを測る。

甕の埋納および埋葬状況は、棺の上部に一辺46cm前後の砂岩砾が置かれており、棺の安置時には第2層のオリーブ褐色砂質土によって裏込めされている。

棺自体は破碎しているが、上部の砂岩砾が内部に落ち込む事、及び甕の破碎状況から人为的に破碎されたものではなく上圧によって破碎しているものと考えられる。

棺内では底部において人骨を検出した。人骨は折り重なっており座位屈葬であったと考えられる。人骨自体は腐食が進み保存状態が極めて悪く形状及び部位は確認し得ないが、臼歯についての依存状態が良好である。

鑑定の結果、埋葬された人骨は女性ないしは若年層の可能性が示されている。

備前甕1244は完形で器高67.2cm、体部最大径59.2cm、口径36.4cmを測る。頸部が短く立ち上がり口縁部は小さい玉縁状を呈する。調整は体部外面上半部板状工具によるヨコナデ、下半部は縱方向の板ナデでハケ状の痕跡が残る。内面は横方向の板ナデ調整でハケ状の痕跡が確認される。時期的には備前焼Ⅲ期、14世紀代と考えられる。その他、副葬遺物は出土していない。

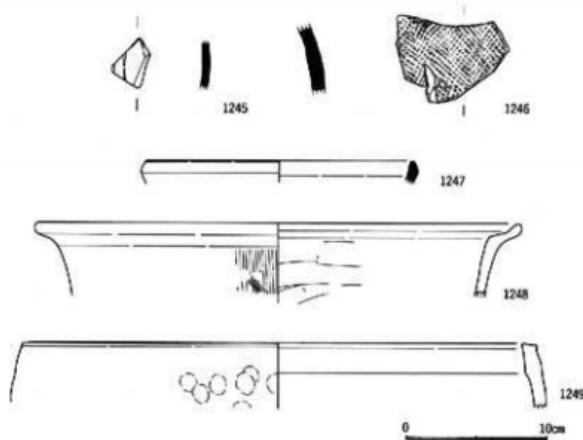
埋葬時の状況については棺自体が墓壙の深さより大きく検出面より上部に突出する事になるため、本来の掘り方は上層部にあったものと考えられる。

上部構造については土盛り等の痕跡は認められなかったが、砂岩砾が墓標として置かれていた可能性は考えられる。

不明遺構 4

(SX1004) (第450図)

2号屋敷地中央部西端 (L・M-7グリッド) において検出した長方形形状を呈した浅い落ち込みで、規模は長軸1.80m、短軸1.80m、深さ0.05m前後を測る。



出土遺物

1245は龍泉窯系

青磁碗の体部片

第450図 SX1004出土遺物実測図

で、外面には錦蓮弁が片彫りされている。

1246は須恵質の甕体部片で、外面は綾杉状のタタキ、内面は板ナデ状の調整が施されており束縛系（魚住窓）と考えられる。1247は束縛系こね鉢と考えられる口縁部片である。

1248は土師質土器鍋口縁部片で口縁部は体部より「く」の字状に屈曲し、端部は若干肥厚し丸くおさめる。

1249は土師質土器鍋口縁部で内面に段を有する。立ち上がりは内向気味に復元されるが、本来は外反する可能性を考えられる。

遺構に伴わない遺物

(第1期)

W-30グリッド土層断面図 (第451図)

第3分割、南側傾斜部の土層断面図である。基本的にはグリッドVライン以南は自然流路2 (SR1002) に向かって落ちており、古代に比定される遺構面は2段の平坦面を形成している。中世(13世紀代)の遺物を含む溝20 (SD1020) までは褐色系統の遺物を包含する砂質土が約1.0m堆積しており、その間第6層上面において2枚目の遺構面が認められる。また、V-35・36グリッドにおいては第4層と第5層間に炭化物を多量に含んだ灰色(5Y6/1)砂質土が

認められ、多量の遺物が出土した。第2次機械掘削中に検出したため遺構の確認はできなかったが、遺物としては一括性の高いものと考えられる。

V-35・36グリッド出土遺物（第452図）

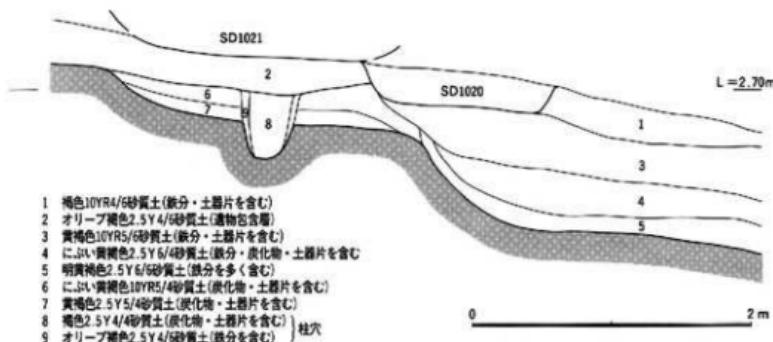
1250は土師器小皿で、口縁部は底部から強く外反し、端部は尖り気味におさめる。底部調整は回転ヘラ切りである。1251は土師器碗底部片で白色を呈する。高台部は貼り付けで、丸みをもち端部を外方に張りだした低い形態をしめす。底部調整は回転ヘラ切り未調整である。1252・1253は黒色土器A類椀の底部片で、高台形状は土師器碗と同様に「ハ」の字状にふんばる低い形態をもつ。1254は土師器杯底部片で高台端部を肥厚した高い高台をもつものである。1255は土師器杯口縁部で、口縁部は直線的に外上方に延び、端部を尖り気味におさめる。

1256は白磁碗高台部で、高台部の削り出しが弱いが底部厚は比較的薄い。釉は若干黄色を帯びた白色で施釉は内面は全面、外面は部分的に高台部付近まで施されており、貫入が入る。胎土には微細な黒色粒が含まれている。1257は白磁皿である。口縁部は外上方に低く立ち上がり、端部は外反させ尖り気味におさめる。高台部の削り出しが小さいが方形状でシャープなものである。内面口縁端部より若干下がった位置に細い沈線が巡り、底部は厚く内面見込み部は段をもち盛り上がる。釉は白色で透明感が強く、施釉は内面は全面、外面口縁部は全面であるが高台部には至らない。

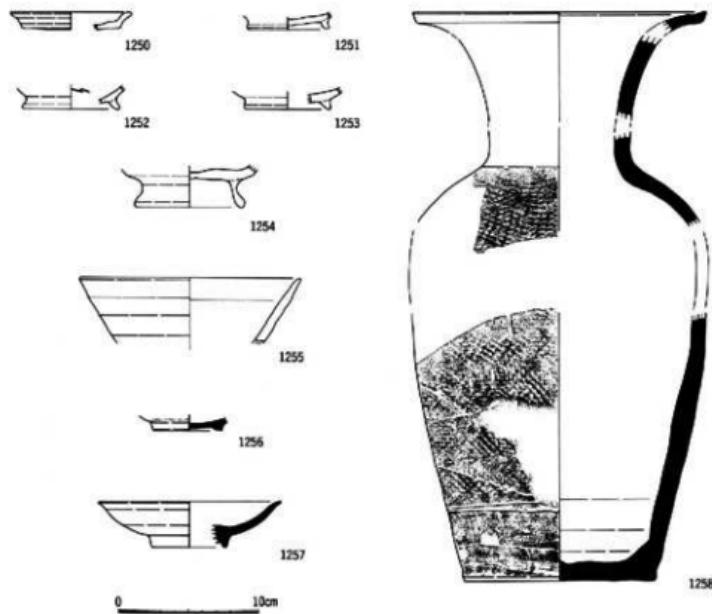
1258は須恵器の広口壺である。底部は平底で、体部下半部は直線的に立ち上がり上半部は丸く内向し頸部にいたる。頸部は若干開き気味に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口縁端部は外上方に小さくつまみ上げ、断面形状は三角形状を呈する。調整は体部外面には目の細かい格子状タタキがほどこされ、下位部は強い横ナデによりナデ消されている。内面にはヨコナデ調整が施されているが、部分的に粘土紐痕が認められる。頸部から口縁端部にかけては内外面とも丁寧なヨコナデが施されているが、口縁部外面には若干タタキの痕跡が残る。

1259～1263は須恵器壺の口縁部および体部片である。1259は口縁部が外反気味に立ち上がり体部上位部はやや水平方向に広がる。調整は体部外面は板状の強いヨコナデで、平行タタキの痕跡が僅かに残り、内面は斜め方向へのケズリである。1260は外反する口縁部で端部下端は若干下方につまみ出し方形状におさめる。1261は口縁部が外上方に直線的に延びるもので、端部は方形状におさめ下端部は若干つまみ出す。体部外面には幅広の平行タタキが認められ、内面は横方向へのケズリ調整である。1262は体部より強く屈曲し、ほぼ直線的に外上方に立ち上がる口縁部を有するもので、端部は内外面に施された強いヨコナデにより方形状におさめている。体部外面には幅広の弱い平行タタキが施され、内面は横方向への板ナデ状のケズリ調整である。

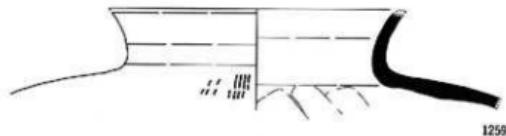
1263は底部から体部片で、体部は若干突出する底部から外上方に内彎気味に立ち上がり、



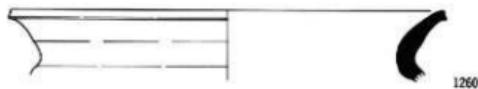
第451図 W-30グリッド土層断面実測図



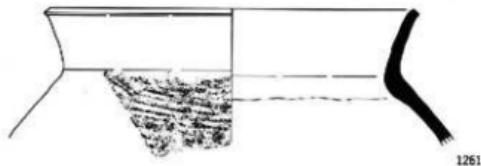
第452図 V-35・36グリッド（下層灰色砂質土）出土遺物実測図（1）



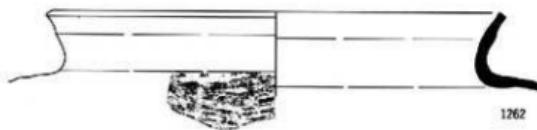
1259



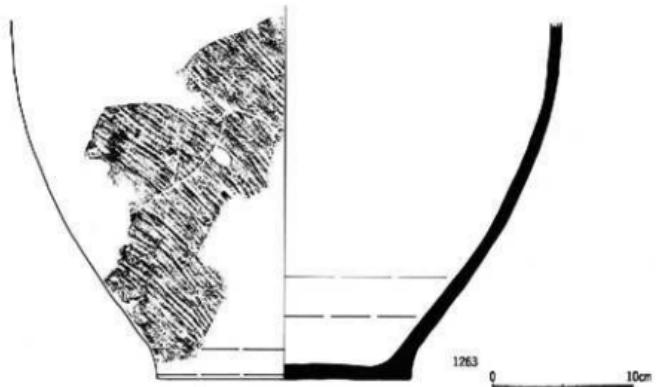
1260



1261



1262



1263

0

10cm

第453図 V-35・36グリッド（下層灰色砂質土）出土遺物実測図（2）

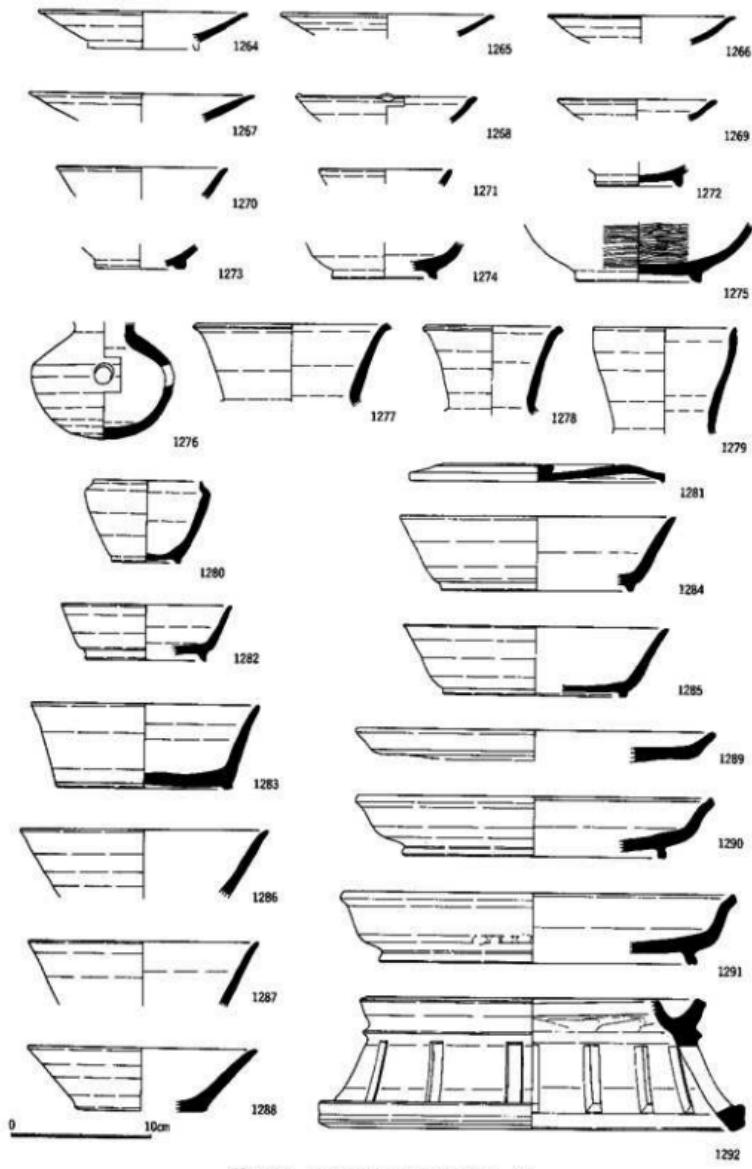
倒卵形を呈する形態を示すものと考えられる。調整は外面は斜方向の平行タタキ、内面はケズリ状の強いヨコナデ調整が施されている。

1258の広口壺は香川県の十瓶山窯産の製品と考えられ、西村1号窯跡灰原出土の壺Dに類似する。時期的には十瓶山窯での須恵器編年から⁽¹⁵⁾IV-①期、11世紀末から12世紀前半頃と考えられる。

包含層出土遺物(1) (第454図)

1264・1265は灰釉陶器皿で、口縁部は外上方に直線的に延び端部は僅かに外反させ丸くおさめる。施釉は1264が内外面、1265は外面のみで発色悪く白色を呈する。1264には重ね焼きの痕跡が残る。時期的には黒雀90号窯段階と考えられる。1266～1275は京都系・近江系縦縫陶器である。1266は皿で、口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部は外反させ尖り気味におさめる。釉は薄い黄緑色を呈する。胎土焼成は軟質である。1267は皿で口縁部は直線的に外上方に延び端部は尖り気味におさめる。施釉は薄い緑色釉が全面に施される。胎土焼成は須恵質である。1268は輪花皿で口縁部は浅く開き、端部は若干外反する。釉は暗緑色を呈し胎土焼成は須恵質である。1269は皿で口縁部は浅く開く。口縁部は中位部で若干屈曲し外面上方に弱い棱をもつて端部は外反し丸くおさめる。釉は光沢のある黄緑色で、胎土焼成は須恵質である。1270は杯で、口縁部は若干内彎気味に立ち上がり端部は外反する。釉は薄い黄緑色で、胎土焼成は須恵質である。1271は濃い緑色の釉が施された杯口縁部で、端部は丸くおさめる。胎土焼成は須恵質である。1272は高台部で外面上半部を斜めに面取りしている。釉は薄い緑色で施釉は外而高台部まで施される。胎土焼成は硬質である。1273は断面方形状の低い高台を削り出したもので、内面に重ね焼きの痕跡が残る。釉は薄い黄緑色を呈し、胎土焼成は須恵質である。1274は杯高台部である。高台には段をもち、口縁部は底部から緩やかに屈曲する。釉は濃い緑色を呈し胎土焼成は須恵質である。近江系産と考えられる。1275は椀底部から体部片で、底部は断面方形状の高台を削り出している。体部は内彎気味に立ち上がり、薄い黄緑色の釉が全面に刷毛塗りされている。胎土焼成はやや軟質である。洛西産と考えられる。

1276～1292は須恵器である。1276は甌で体部外面の削りは肩部まで施され、削りの方向は逆時計回りである。1277・1278は壺・平瓶の口縁部で、口縁部は若干外反気味に外上方に立ち上がり端部を外方につまみ出す。1279は内向する口縁部を有し端部は尖り気味におさめる。1280は壺で外上方に立ち上がる体部に内方につまみ出す短い口縁部をもつ。1281は杯蓋で低い天井部に偏平なつまみをもつ。口縁端部は下方につまみだし丸くおさめる。1282～1288は杯で口縁部は外上方に直線的に立ち上がり端部を尖り気味におさめる。1282～1285は断面方形状の高台を底部から口縁部の屈曲部に張り付ける。1288は底部平底をもち口縁部は大きく外上方に開く。口径は1284・1285が19cm前後、1286・1287が17cm前後を測る。1289は口径25.2



第454図 包含層出土遺物実測図 (1)

cm、器高2.2cmを測る皿で、口縁端部は外上方に外反気味に短く立ち上がり、端部を丸くおさめる。1290・1291は大型の高台付皿で、口縁部は上方に僅かに拡張し尖り気味におさめる。口径は1290が25.2cm、1291が27.8cmを測る。1292は上部径23.4cm、脚台部径28.2cm、器高9.4cmを測る脚台付円面硯である。硯部上面は欠損するがほぼ平坦面を呈するものと考えられる。外堤部は陸上部側面から外上方に立ち上がり方形状におさめU字状の海を作っている。圓台は「ハ」の字状に広がり、端部は方形状におさめ上端部と下端部には断面三角形状の凸帯を巡らす。透しは長方形状で12ヶ所もつものと考えられる。横田分類のI-C-b類に相当し、時期的にはほぼ8世紀代が与えられる。

包含層出土遺物(2) (第455図)

1293～1326は赤色塗彩土器である。1293～1295は皿で口縁端部を外反させるタイプである。赤彩は1293が内外面、1294が外面、1295が内面に施されている。調整は内外面ヨコナデで、外底面は1295が回転ヘラ切り以外はナデ調整である。

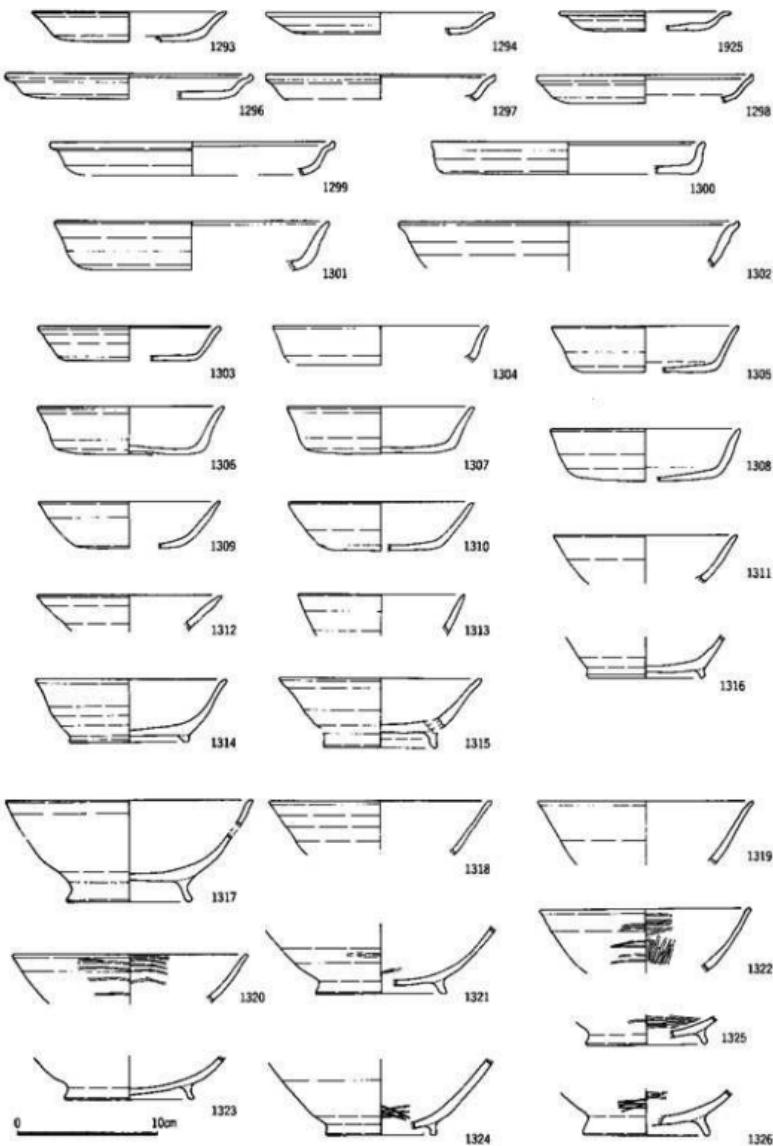
1296～1300は底部から外上方に外反気味に立ち上がる口縁端部を上方に拡張した皿である。赤彩は1297が剥落しているものの全て内外面施されている。調整は内外面ともヨコナデで、外底面はナデ調整である。

1301・1302は口径20cm前後を測る杯で、外反気味に立ち上がる口縁端部を上方に拡張するものである。赤彩は1301が内外面に、1302は剥落して確認できないが本来内外面とも赤色塗彩されていたものと考えられる。1303～1315は口径13cm前後を測る杯で、1314～1316には断面方形状の高台が付く。

1303は外反気味に立ち上がる口縁端部を小さく上方に拡張するもので赤彩は内外面とも施されている。調整は内外面ともヨコナデで、外底面はナデ調整である。1304～1308は若干外反気味に立ち上がる口縁部で端部は丸くおさめる。赤彩は内外面とも施されている。調整は内外面ヨコナデで、外底面は1305・1308はナデ、1306・1307は回転ヘラ切り後ナデ調整である。

1309・1311は内彎気味に立ち上がる口縁部を有するもので1310・1311・1313は直線的に立ち上がる口縁部をもつものである。赤彩は全て内外面とも施されている。1314の口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部を若干外反させる。高台部は断面方形状を呈し、体部との屈曲部に貼り付ける。赤彩は高台部内面以外全面に施される。1315は口縁部と高台部とは別個体である。口縁部内面に部分的に赤色塗彩が残る。1316は杯高台部で内彎気味に立ち上がる体部との屈曲部に断面方形状の高台を貼り付ける。赤彩は高台部内面以外全面に施される。

1317～1326は碗である。1317は内彎気味に立ち上がる口縁端部を若干外反させるもので、「ハ」の字状に開く細身の高台が付く。赤彩は高台部内面以外全面に施されている。1318・1319は口縁端部を若干外反させ丸くおさめたもので、赤彩は内外面に施されている。1320～1322・

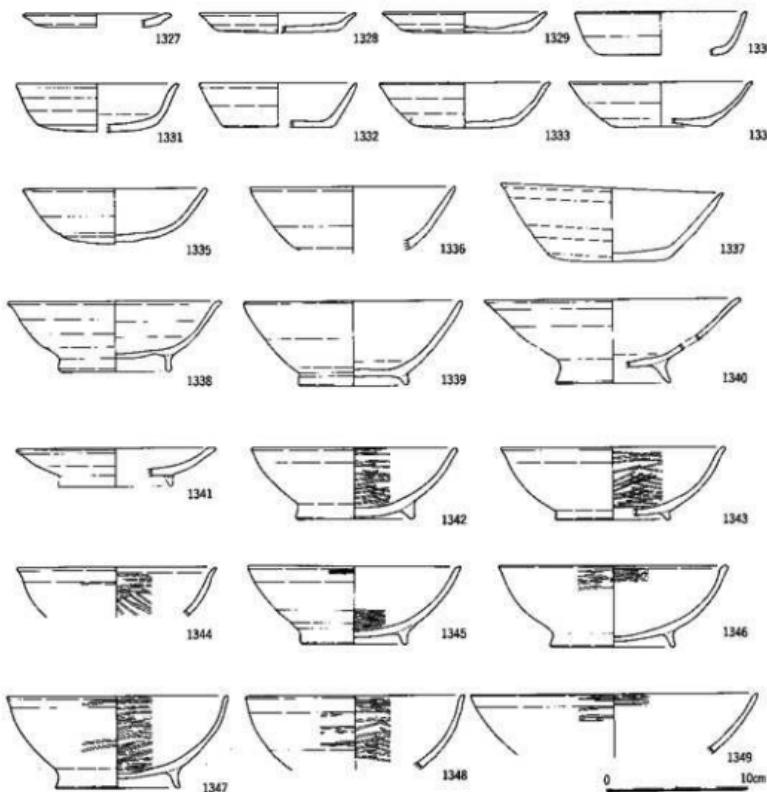


第455図 包含層出土遺物実測図 (2)

1324～1326は内外面の調整にヘラミガキが施されたものである。基本的には横方向へのヘラミガキであるが、1322の内面には縦方向へのミガキが認められる。赤彩は内外面とも高台内以外に全面施されている。1323は細身の「ハ」の字状に開く高台を有するもので、赤彩は高台には施されていない。

包含層出土遺物(3) (第456図)

1327～1340は土師器、1341～1349は黒色土器である。1327～1329は土師器皿で、口縁部は短く外上方に立ち上がり、1327は端部を外反させる。底部の調整は回転ヘラ切り後ナデである。

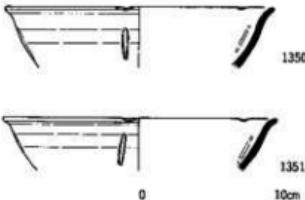


第456図 包含層出土遺物実測図 (3)

1330～1332は口縁部が底部より比較的直立気味に立ち上がるもので、端部は丸くおさめる。底部は回転ヘラ切り後ナデである。1333～1335は口縁部が内彎気味に浅く立ち上がるもので、1333・1334は端部を尖り気味におさめる。底部は回転ヘラ切り後、丁寧なナデ調整である。1336・1337は口縁部が比較的高く立ち上がるもので、口縁端部は尖り気味におさめる。

1338は高台付杯で、口縁部は内彎気味に立ち上がり端部は外反させ丸くおさめる。高台部は断面U字状で直立気味に貼り付ける。1339はやや深めの高台付杯で口縁部は若干内彎気味に立ち上がり端部は尖り気味におさめる。高台部は低く断面U字状を呈する。1340は外方に低く立ち上がる口縁部を有するもので、端部は若干外反させる。高台は「ハ」の字状に開く比較的高い高台である。

1341は高台部を欠損するが高台付皿で、内面のみ黒色処理する。口縁部は浅く立ち上がり、端部は若干外反する。1342～1349は黒色土器A類碗である。1342・1343はミガキ調整が内面のみ施されたもので、外面調整はヨコナデである。高台は1342が断面三角形状の太めのもの、1343は断面U字状の低い高台である。1344～1349は内面全面と外面の一部にヨコ方向へのミガキを施すものである。1344～1346は内彎する口縁端部を若干外反させるタイプ、1347・1348は体部をやや深く成形したタイプで、端部は丸くおさめる。1349は口縁部が浅目に外方に開くもので、端部は尖り気味におさめる。外面のミガキは口縁部のみで下半部にはヨコ方向へのケズリ状の強いナデが認められる。



包含層出土遺物(4) (第457図)

1350・1351は越州窯系青磁碗で釉は灰オリーブ色を呈し、本遺跡からは3片出土している。体部は内彎気味に立ち上がり口縁端部は外反し丸くおさめる。口縁部には広いV字状の切り込みを入れ、5輪花を呈すると考えられる。また、体部外面には同位置に縦方向のヘラ押さえによる割花が施されている。高台部は欠損するが、輪高台になるものと考えられ越州窯系青磁碗I-2類である。時期的には10世紀前後が考えられる。

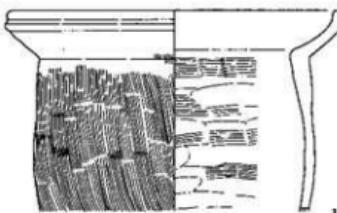
第457図 包含層出土遺物実測図 (4)

包含層出土遺物(5) (第458図)

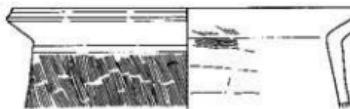
1352～1357は土師器壺・釜である。1352は口縁部が体部より短く外反するもので、短部は上方につまみ上げる。体部は球形状を呈するものと考えられ、調整は外面は荒いタテハケ、内面ヨコ方向へのヘラケズリである。1354～1356は「く」の字状に屈曲する口縁部を有し、



1352



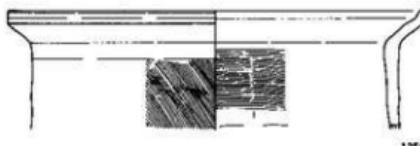
1353



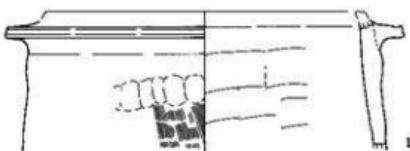
1354



1355



1356



0 10cm

第458図 包含層出土遺物実測図 (5)

口線上端部を上方に拡張し端面には凹線を形成する。口縁端部は丸くおさめるもの1353、尖り気味におさめ断面三角形状を呈するもの1354～1356がある。体部はやや長胴形をもつものと考えられ、調整はいずれも体部外面タテハケ、内面ヨコハケおよびヨコ方向への板ナデである。胎土には多量の砂粒・石英粒を含み1353～1355は同胎土であるが、1356は雲母を多く含み色調もチョコレート色を呈することから輸入品と考えられる。1357は土師器皿で、口縁部を欠損するが口縁直下に水平方向に延びる断面方形形状の鉢を巡らすもので、鉢端面には弱い凹線が形成されている。体部は長胴形を呈するものと考えられ、調整は外面タテハケ、内面ヨコ方向への板ナデである。

(第II期)

包含層出土遺物(6) (第459図)

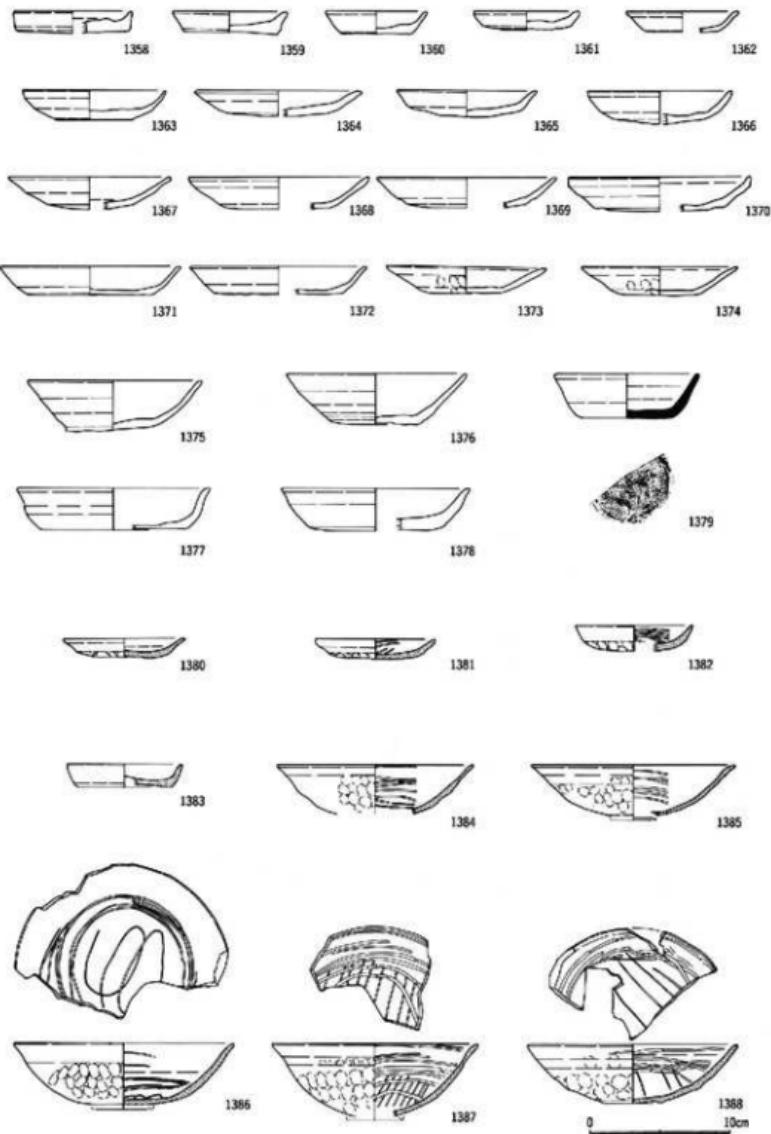
1358～1378は土師質土器である。1358～1362は小皿で、1358は口縁部が短く直立し端部を尖り気味におさめたもの、1359～1362は口縁部が外上方に短く立ち上がり、1359・1362は端部を若干外反させる。底部は1358・1359が回転糸切り、1360～1362が回転ヘラ切りである。皿1363～1366は口径10cm前後を測るもので、口縁部が内輪気味に立ち上がるるもの1363・1366と若干外反するもの1364・1365がある。底部は1363が回転糸切り、1364～1366が回転ヘラ切りであるが、1364は10世紀代の土師器皿の可能性がある。皿1367～1372は口径12cm前後から13cmにおさまるもので、1371・1372は同形態である。口縁部は、1370が端部を上方に屈曲させ端面を有する以外は口縁端部を僅かに外反させ丸くおさめるものである。底部は1367・1368が回転糸切り、1369～1372が回転ヘラ切りである。1373・1374は京都系土師器皿と考えられるもので、小さい底部から低く外上方に立ち上がる口縁部をもち、内面ヨコナデ、外面ユビオサエの調整が見られる。

1375・1376は同一地点からの出土で、小さい底部から外上方に直線的に大きく立ち上がる口縁部をもつもので、ほぼ同形態・同法糸をもつ杯である。底部は回転ヘラ切り未調整である。1377・1378は同形態の杯で口縁部は強く立ち上がり端部を外反させる。底部調整は回転糸切りである。

土師質土器杯・皿の時期的な分類は明確にしがたいが底部調整および形態的特徴から1377・1378が13世紀代、1375・1376が14世紀～15世紀、1371・1372および1362が15世紀末頃、1373・1374が京都系土師器皿で15世紀～16世紀と捉えておく。

1379は備前窯産と考えられる杯である。口縁部は直線的に外上方に立ち上がり、端部を丸くおさめる。底部は回転糸切りである。

1380～1388は瓦器碗・小皿である。1380～1382は和泉型瓦器小皿で外底面ユビオサエ、口



第459図 包含層出土遺物実測図 (6)

縁部ヨコナデ調整で、内面には平行線・螺旋状ミガキが施されている。1383は底部に回転糸切り痕をとどめる小皿で、口縁部は若干内彎気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。底部は上げ底気味である。底部糸切り小皿は在地産と考えられる。⁽¹⁶⁾

1384～1388は和泉型瓦器碗である。調整は外面にユビオサエの痕跡をとどめ、口縁部はやや幅広にヨコナデを施すもの1387と、2段に施すもの1385・1386・1388がある。内面は見込みに平行線状ミガキを施すもの1387・1388と連結輪状風を呈するもの1386がある。時期的には尾上編年のIII期におさまるものと考えられる。

包含層出土遺物(7) (第460図)

1389～1393は青磁の皿・盤である。1389は皿口縁部で口縁部は外反し、端部は外端部を肥厚させ丸くおさめる。釉は透明感のある明緑灰色である。1390は稲花皿で、口縁部内面に草花文を配す。釉は暗緑色で貫入が入る。

1391・1392は同安窯系青磁皿で、内面には櫛によるジグザク文と片彫りによる文様を施している。森田・横田編年で1391はI-2類、1392はI-1類にあたる。1393は龍泉窯系青磁の盤で、口縁部は外方に屈曲し端部を上方に拡張する。内面には幅広の蓮弁文が施されている。

1394～1409は龍泉窯系青磁碗、1410は同安窯系青磁碗である。1394～1397は外面に片彫りによる蓮弁をもつもので、1394には弱い鏽が認められるが、他は鏽および開弁は見られない。上田分類のB-1類にあたるものと考えられる。1398は内彎気味に立ち上がる口縁部外面に雷文帯を施すもので、上田分類のC-II類と考えられる。

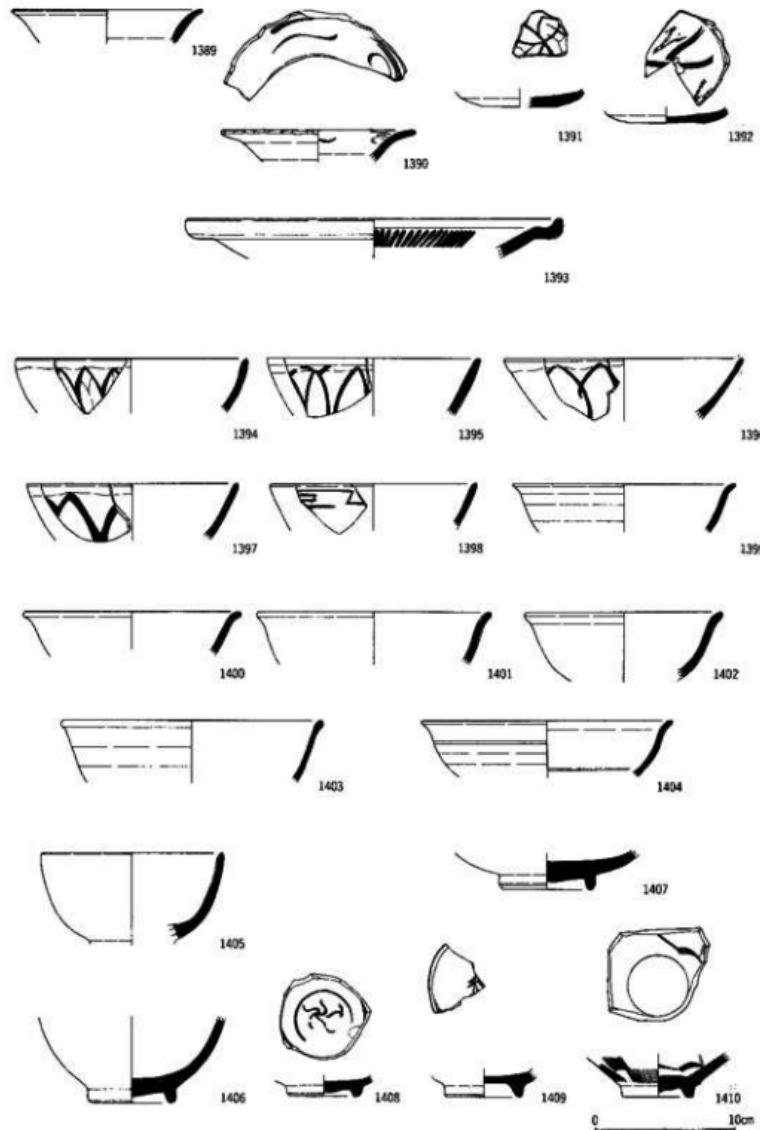
1399～1404は内彎気味に立ち上がる体部をもち、口縁端部を外反させるタイプのもので、1404の口縁部外面には沈線が一条巡る。上田分類のD類に相当する。1405・1406は口縁部を内彎気味に終わらせるタイプのもので上田分類のE類にあたる。1406は高台内部まで釉がかかる。

1407～1409は高台部で、施釉は1407が高台外面までかかり、1408は高台内までかかる釉をかき取っている。1409は全面施釉の後、豊付け部のみかき取っている。1408・1409の内面見込みにはスタンプ文が見られる。1410は横田・森田分類のI-1類に分類される同安窯系青磁碗で、高台は断面方形状を呈し体部外面には櫛目を入れるものである。

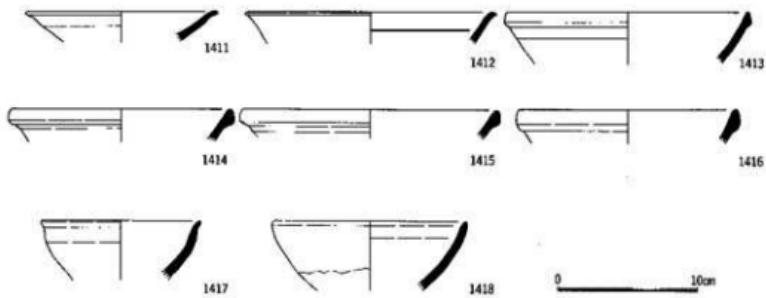
包含層出土遺物(8) (第461図)

1411は白磁皿で体部中位で若干屈曲し口縁部を外反させる。1412～1416は白磁碗である。1412は口縁端部を短く外反させ上端は平坦面を呈する。

1413～1416は口縁端部を玉縁状に成形するものである。横田・森田分類で1412はV類、1413～1416はIV類にあたるものと考えられる。



第460図 包含層出土遺物実測図 (7)



第461図 包含層出土遺物実測図 (8)

1417は瀬戸・美濃系の天目碗で、口縁部は外反し尖り気味におさめる。1418は天目碗で、口縁部は内彎気味に立ち上がり端部を尖り気味におさめる。胎土は黒灰色を見することから中國製（建窯産）と考えられる。

包含層出土遺物(9) (第462図)

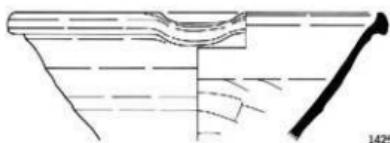
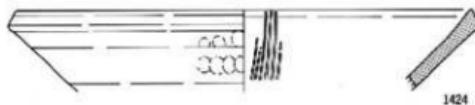
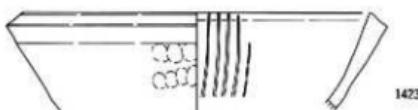
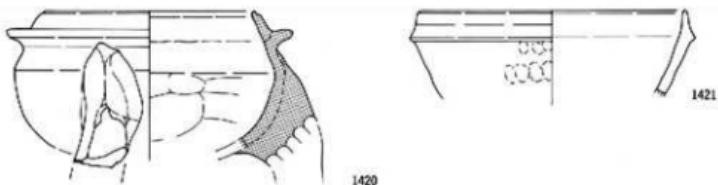
1419は瓦質土器鍋で口縁部は受け口状を呈し、上端面は平坦で外方に若干拡張する。口縁の形態からは畿内産の可能性が考えられる。1420は瓦質土器の釜で非常に硬質である。内向気味の口縁部よりやや下がった位置に断面U字状の細い鋸を巡らす。脚部はやや太く、鋸直下から張り付けられている。1421は土師質土器釜で、尖り気味におさめた口縁端部より若干下がった位置に断面三角形状の低い鋸状の凸帯を巡らす。1422は土師質土器釜で、端部を方形状におさめた口縁部直下に断面三角形状の鋸を巡らす。中島川遺跡分類の羽釜Aにあたる。

1423は土師質土器擂鉢で、口縁部は断面方形状におさめるもので、胎土は精良で焼成は堅致である。1424は瓦質土器擂鉢で口縁部は断面方形状におさめる。黒色処理は外面のみである。1425・1426は須恵質のこね鉢である。1425は東播系こね鉢で、片口を有し口縁部は上下に拡張するものである。時期的には東播系こね鉢編年のⅢ期の2段階におさまるものと考えられる。

包含層出土遺物(10) (第463図)

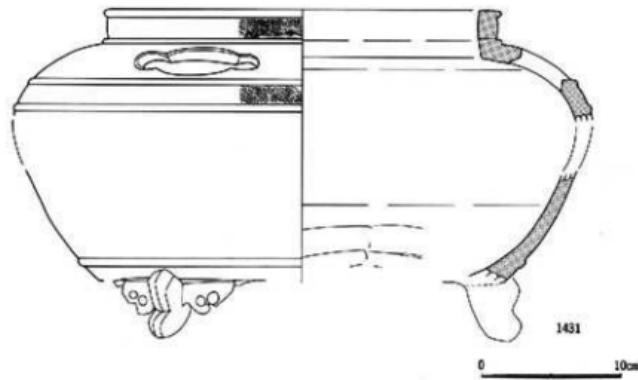
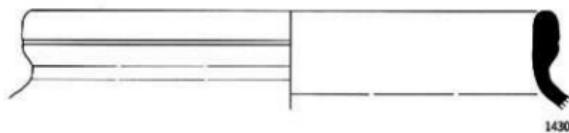
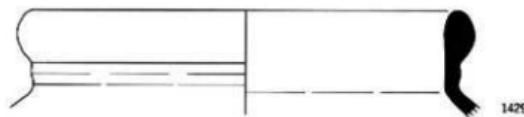
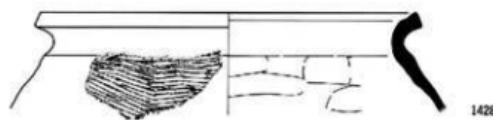
1427・1428は東播系の甕と考えられるもので焼成は須恵質である。口縁部は強く外反し、また1427は端部を若干上下に拡張し、1428は方形状におさめる。口唇部内面には凹線が巡る。調整は外面に平行タタキ、内面は横方向へのケズリが施されている。

1429・1430は備前窯産の壺口縁部で、口縁部は偏平気味の玉縁を呈し、1430には浅い凹線が一条めぐる。時期的には備前窯Ⅳ期におさまるものと考えられる。1431は瓦質と考えられる風炉であるが、色調はにぶい橙色を呈する。形態的には短頸壺型で脚部を欠損するもの



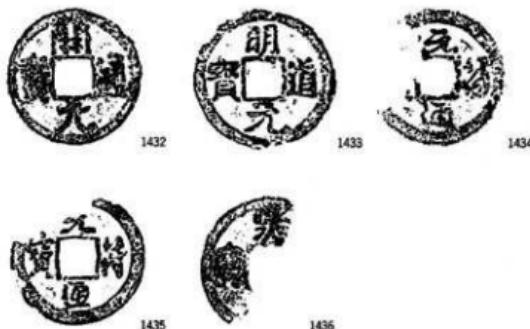
0 10cm

第462圖 包含層出土遺物實測圖 (9)



第463図 包含層出土遺物実測図 (10)

口縁部は直立し方形状におさめ、外面には花菱文をスタンプしている。また、体部の2条の凸帯の間にも花菱文スタンプを押捺しており、肩部には火窓が2ヶ所あくものである。時期的には15世紀代と考えられる。



第464図 包含層出土銭貨拓影

包含層出土遺物II (第464図)

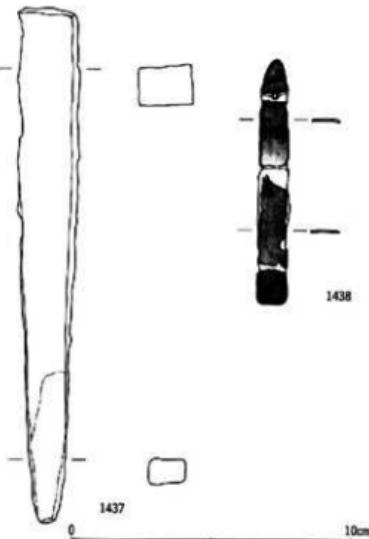
1432～1436は銅錢である。このうち1432と1433は鋳着していたものである。1432は「開元通宝」で621年初鋳、1433は「明道元宝」で1032年初鋳、1434・1435は「元符通宝」で1098年初鋳、1436は「熙〇〇宝」である。

包含層出土遺物II (第465図)

1437は鉄製の馬歛の歯と考えられるもので、L・M-10・11グリッドより出土したものである。出土時には7本が束になって出土している。長さ18.5cm、幅1.9cmを測り先端部は若干尖り気味である。

1438は銅製の飾板と考えられるもので、表面には金銅製の箔状のものが施されている。

長さ8.7cm、幅1.1cm、厚さ1mmを測る。



第465図 包含層出土金属製品実測図

② 自然流路の調査

調査区において検出した自然流路は微高地西側から微高地南側を東西方向に存在した河道で、現在の犬伏谷川沿いに埋没しているものである。

流路の規模については東西方向に延びる犬伏谷川から黒谷川の堆積土最下層部において遺物の包含層が確認されており、その流路の復元が可能である。また流路幅についても犬伏谷川を挟んで南側（古城遺跡）に広がる微高地において古代から中世の造構面が確認されており、その間約60mに及ぶ規模を本来有していたものと考えられる。

流路は本米調査区北西側から微高地南北隅を東方向に屈曲する同一の流れとして捉えられるが、本報告書では微高地西側（第1・2分割西側）で検出した南北方向の流路部を自然流路1（SR1001）と設定し、微高地南側の東西方向の流路部（第3分割南側半分・第4分割）を自然流路2（SR1002）と区分して報告する。

自然流路1（SR1001）（第466図）

微高地西側、2号屋敷地および3号屋敷地の西縁辺部を南北方向に流れる流路で、流路の西側一部を検出した。

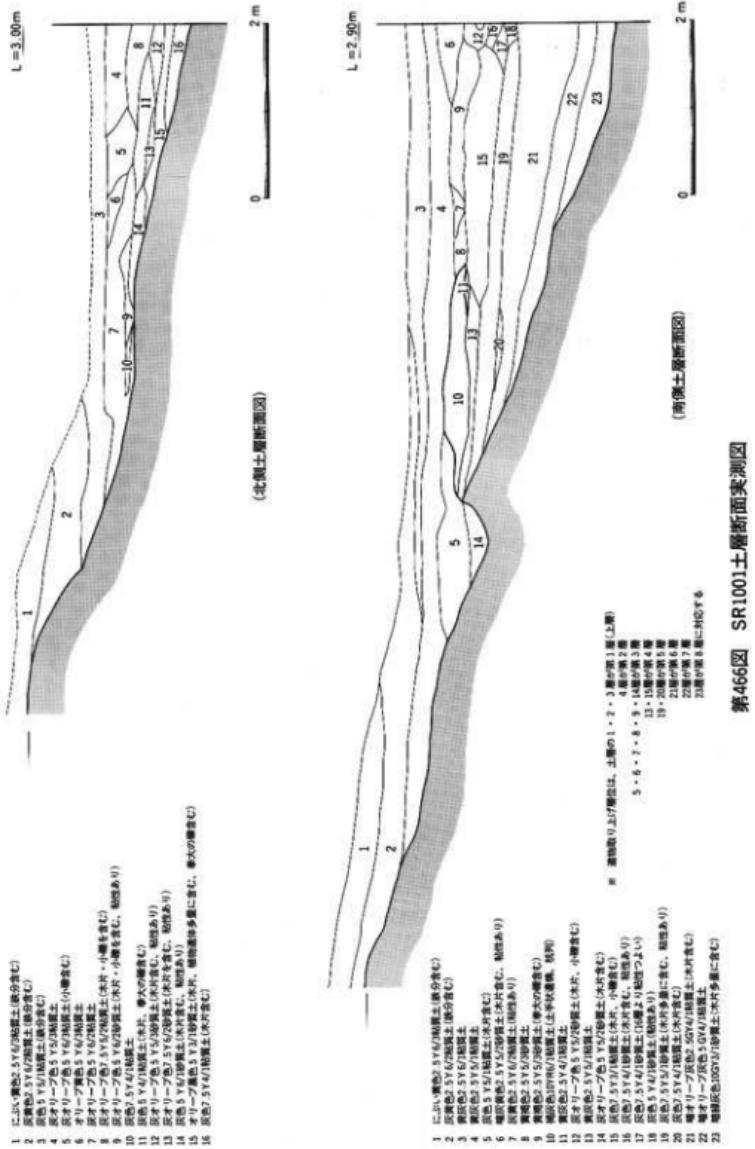
自然流路1の土層堆積状況は微高地上の造構面が西側縁辺から西に向かって落ち込んだ上部に堆積しており、最下層から造構面上部の堆積層まで23層に分層される。微高地上から最深部までは約2.80mを測る。

流路の断面は溝3（SD1003）との合流部より北側と南側に2ヵ所設定した。

基本的な土層堆積は1層～5層が灰色系統の粘質土、6層～9層が褐色系統の砂質土、10・11層が灰色系統の粘質土、12層が灰オリーブ色の砂質土、13層～15層が灰色系統の粘質土、16層～19層が灰色砂質土、20層～22層が暗灰色系統の粘質土、23層が暗緑灰色砂質土である。このうち5・6・12・14・15・19・20・21・23の各層には木片を含んでおり、また10・11層は人工的に盛土された状況が見られ、杭列および石列を伴っている。

遺物の取り上げ層位は1・2・3層を第1層（上層）として、4層を第2層として、5・6・7・8・9・14層を第3層として、13・15層を第4層として、19・20層を第5層として、21層が第6層に、22層が第7層に、23層が第8層にそれぞれ対応する。また杭列造構・石列造構および土手状造構に関しては別途に遺物の取り上げを行った。

出土遺物は9世紀代から16世紀まで多時期、多種多様にわたり、また特に木製遺物が多量に出土している。



第466図 SR1001土層断面実測図

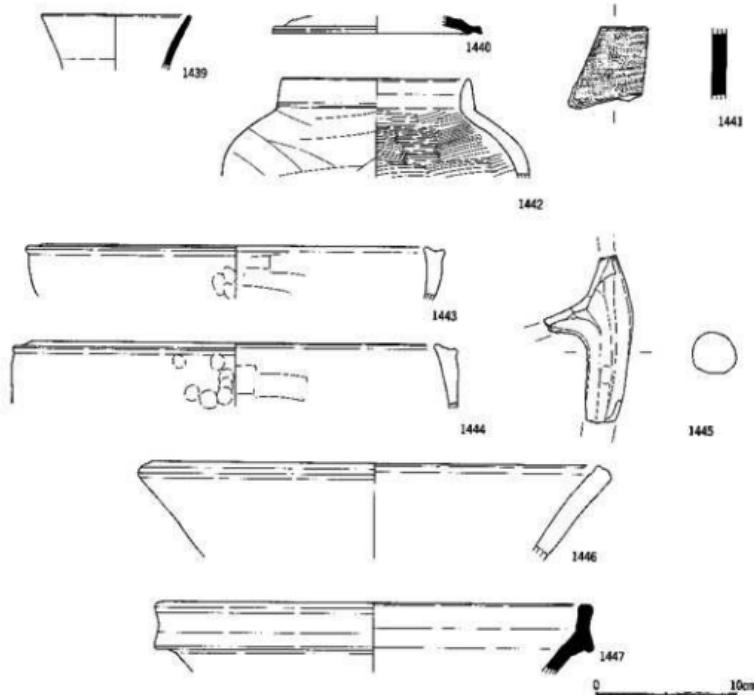
出土遺物(1) (第467図)

土層観察のセクション内から出土した遺物で各時期の遺物が混在している。

1439は須恵器壺の口縁部で、口縁端部は尖り気味におさめる。1440は須恵器杯蓋で口縁部は「S」字状に屈曲し、端部は尖り気味におさめる。1441は須恵器壺体部片で、調整は外面格子状タクキ、内面には同心円状の当て具の痕跡が残る。

1442は土師質土器釜で、球形状の体部に直立する短い口縁部が付く。1443～1445は土師質土器釜口縁部・脚部である。土師質土器釜の口縁部は短く立ち上がり、丸く成形した鉢状の凸沿が巡るものである。

1446は土師質土器こね鉢で、体部は外上方に直線的に立ち上がり、端部は方形状におさめる。1447は備前窯掘鉢で、口縁部は直立気味に大きく拡張し、端部は丸くおさめる。備前焼第V期（16世紀）にあたるものと考えられる。



第467図 SR1001出土遺物実測図

出土遺物(2) (第468図)

微高地西側斜面上から出土した遺物で層位的には各層の遺物が混在している。

1448は須恵器杯で、口縁部は直線的に外上方に立ち上がり端部は尖り気味におさめる。1449は土師器杯体部片で、口縁部は底部から外上方に屈曲する。内外面には赤色塗彩が施されている。1450は土師質土器杯口縁部である。1451・1452は和泉型瓦器椀口縁部である。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は若干外反する。調整は内面横方向へのヘラミガキ、外面ユビオサエ後口縁部ヨコナデで、1451には部分的に横方向へのミガキが施されている。時期的には尾上編年のⅢ期におさまるものである。

1453は土師質土器釜で、直立気味の短い口縁部がつく。1454～1456は土師質土器釜の体部および脚部片である。口縁部は短く立ち上がり丸くおさめ、外面には鉤状の小さくおさめた凸帯が巡る。1457は瓦質土器の搗鉢で口縁上端部は内方に若干つまみ出す。内面には弱い摺り目が施されている。1458・1459は土師質土器こね鉢である。口縁端部は1458が丸みをもった方形形状に、1459は若干上下に拡張し端面を形成し断面形状は三角形状を呈する。口縁部の形態は東播系こね鉢に類似する。1460は東播系こね鉢である。体部は外上方に直線的に延び口縁部は若干下方に拡張し、断面三角形状を呈する。1416は備前窯搗鉢の体部片で、内面に幅広の摺り目が施されている。

出土遺物(3) (第469～471図)

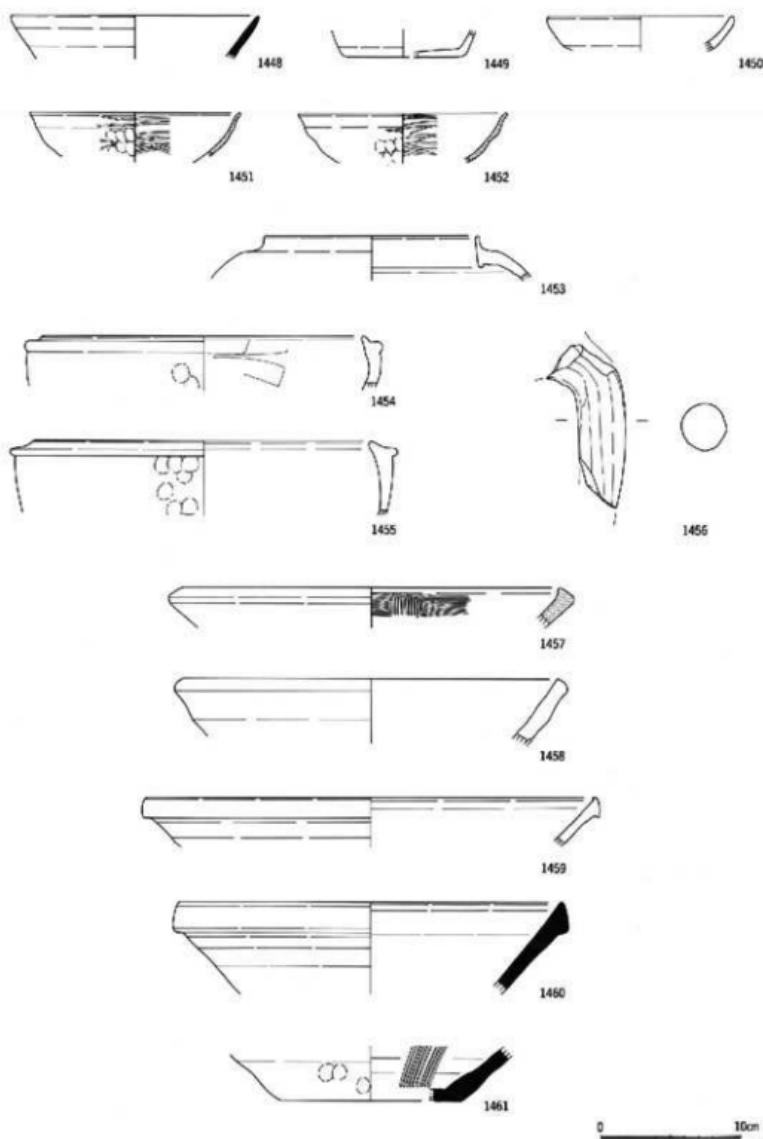
1462～1468は溝3 (SD1003) の合流地点より出土した遺物である。

1462は土師器皿で口縁部は僅かに立ち上げたもので、端部は尖り気味におさめる。また、一部を下方に折り返している。底部は回転ヘラ切りである。1463は黒色土器A類椀と考えられるが内面の炭素の吸着は悪い。ミガキ調整は内面は緻密に施され、外面口縁部にも部分的に横方向へ施されている。1464は土師質土器小皿である。口縁部は短く立ち上がり、端部は丸くおさめる。底部は回転糸切りである。1465は形態および調整からは和泉型瓦器椀と考えられるが内外面とも炭素は吸着しておらず、胎土も細かい石英粒・砂粒を多く含んでいる。1466は同安窯系青磁碗で、内面にはヘラ状工具による片彫り、外面には櫛描による条線が施されている。横田・森田分類のI-1類である。

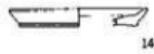
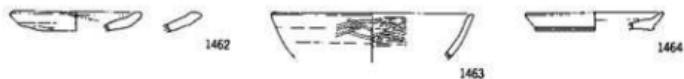
1467はいわゆる摺津型釜で、口縁部は短く直立し端部は方形状におさめ、外面直下に水平方向に延びる断面方形形状の鉤を巡らす。胎土などから搬入品の可能性が考えられる。1468は土師器甕である。口縁部は直立気味の体部から「く」の字状に屈曲し、端部は僅かに上方に拡張し丸くおさめる。調整は外面荒いタテハケ、内面荒いヨコハケである。

1469～1476は溝3 (SD1003) 合流部より北側において出土した遺物である。

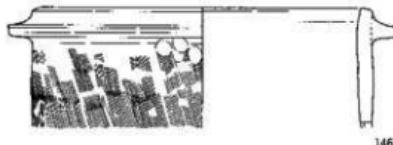
1469～1471は土師質土器小皿で、底部は回転糸切りである。1472は土師質土器杯で口縁部



第468図 SR1001東斜面出土遺物実測図



1466



0 10cm

第469図 SR1001出土遺物実測図（1）

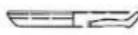
外上方に直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。底部回転糸切りである。1473は土師質土器杯口縁部で、内擣気味に立ち上がる口縁部の端部は尖り気味におさめる。1474～1476は和泉型瓦器椀で、口縁部は幅の広いヨコナデが施され若干外反する。内面調整は間隔の広い圓線状ミガキが施されている。尾上編年の中期とと考えられる。

1477～1486は土手状造構の西側斜面より出土した遺物である。

1477・1478は青磁碗である。1477は外面に鍋蓮弁をもつもので、横田・森田分類のI～5類である。1478は高台部外面を斜めに面取りしたもので、施釉は盤付を越えて一部内面に至る。1479は須恵器杯身で受部の立ち上がりはやや大きく、田辺昭三編年でMT85段階のものと考えられる。1480～1482は土師質土器巻の体部および脚部片である。1480は短く立ち上がる口縁部に外方へ小さな鉤状の凸帯を巡らせ受口状を呈するものである。1483は土師質の丸瓦片で、凹面には布目痕が残る。



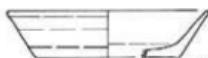
1469



1470



1471



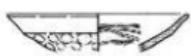
1472



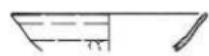
1473



1474



1475



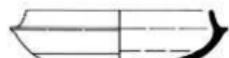
1476



1477



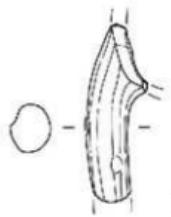
1478



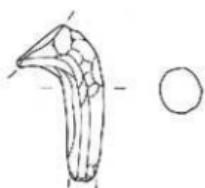
1479



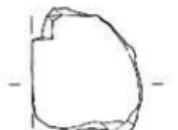
1480



1481



1482



1483

0 10cm



1484

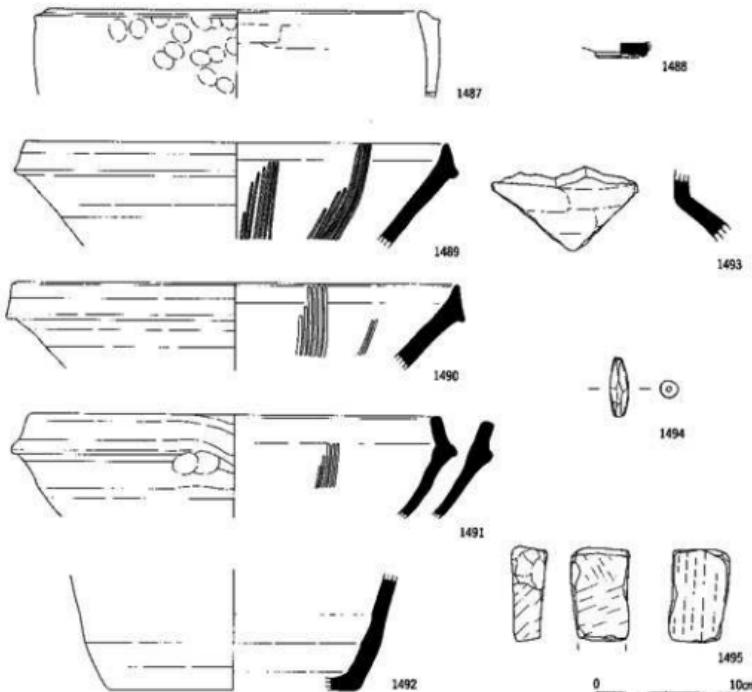


1485



1486

第470図 SR1001出土遺物実測図 (2)



第471図 SR1001出土遺物実測図 (3)

1484～1486は青灰色層の上位層からほぼ一括して出土した銅錢で、1484は「元祐通宝」で1086年初鋤、1485は「永樂通宝」で1408年初鋤、1486は不明である。

1487～1494は土手状遺構の東側の浅い落込みの5・14層内から出土した遺物である。

1487は土師質土器蓋の体部片で、口縁部の立ち上がりは低くまた鉄状の凸帯はほとんど突出しないものである。1488は白磁皿の高台部と考えられるもので、内面のみ施釉されており細かい貫入が入る。1489～1491は備前窑搗鉢で、時期的には1489・1490が口縁上端部の拡張が小さく尖り気味におさめるもので備前窑第IV期、1491は口縁端部を直立気味に上方に大きく拡張しており第V期におさまるものと考えられる。1492は須恵器壺の体部片で調整は外面下端部ヨコヘラケズリ、上部ヨコナデ、内面強いヨコナデである。胎土には砂粒を多量に含む。1493は備前窑壺の肩部片である。外面には板ナデ状の痕跡が見られる。1494は土師質の管状土錐である。1495は凝灰岩製の砥石で三面に使用痕が認められる。

土手状遺構（第472図）

2号屋敷地西側を区画する溝2（SD1002）の外堤部を隔てて、自然流路および外堤に平行して築かれた土手状（堤）遺構である。北側端は溝3（SD1003）の開口部南側から南端部は調査区外に延びるものと考えられるが、南端部は2号屋敷地でのほぼ中央部に築かれた流路部から屋敷地に向かって斜面上に築かれた右敷遺構に連続する。検出長は約12.0mを測るものである。

構造的には径10cm前後の杭を垂直気味に流路側に1列ないし2列にわたり打ち込み、杭列に沿って横木を渡し、その内側の基底部には拳大から人頭大の砂岩礫を敷いている。またその上に盛土を行って土手を構築している。杭列および横木で計測される土手状遺構の幅は約2.0mを測る。

土手状遺構出土遺物（第473図）

土手状遺構上面より出土した遺物である。

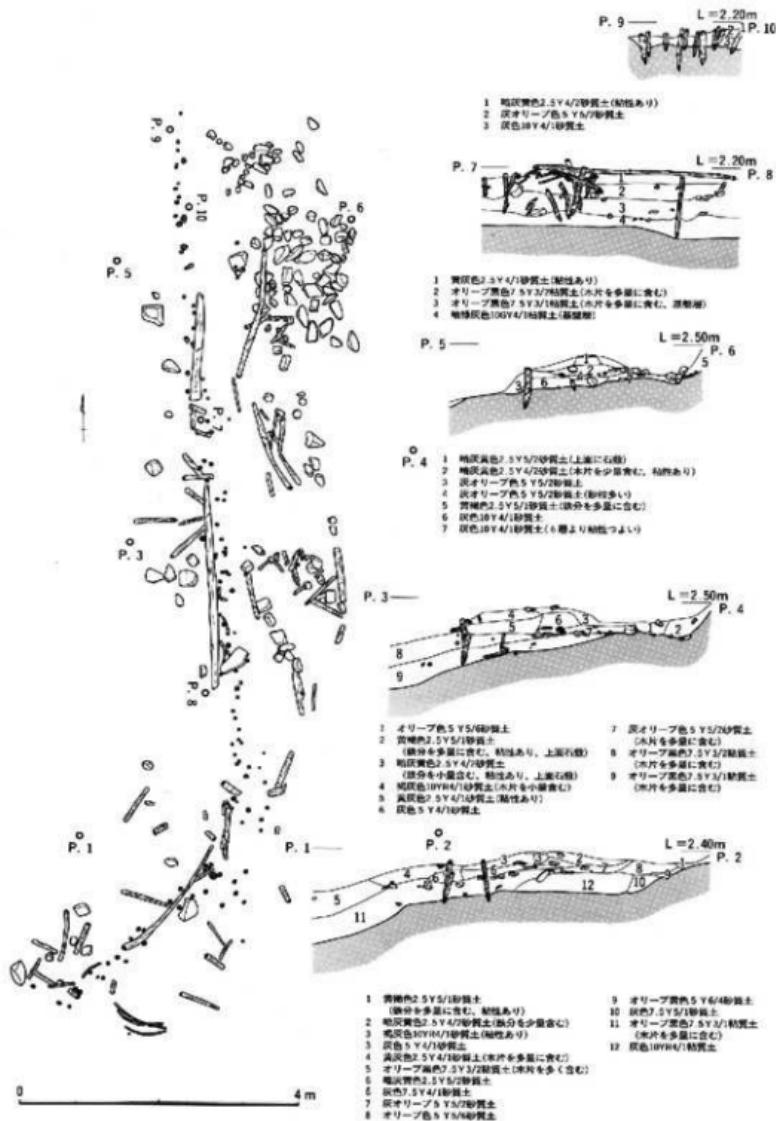
1496・1497は青磁碗で、1497は口縁部外面に雷文帯をもつもので、上田分類のC-II類にあたり、時期的には14世紀後半から15世紀前半代と考えられる。1498・1499は土師質土器釜で、1498は比較的しっかりした口縁部を有し、鉢状凸唇も断面三角形状を呈している。1499は口縁部の立ち上がり及び鉢状凸唇が非常に小さいものである。1500は備前窯掘鉢である。形態的に体部は底部より外上方に直線的に延び、口縁部は直立気味に大きく立ち上がるるものである。備前窯第V期にあたるものと考えられる。1501は土師質の管状土鉢である。1502は土師質土器釜の脚部、1503は瓦質土器釜の脚部で断面形状は円形を呈する。

杭列遺構出土遺物（第474図）

土手状遺構内の杭列に伴い出土した遺物で、時期的に古代の遺物も含まれている。

1504は土師器片で、口縁部は底部から直線的に外上方に延び、端部はやや方形状ぎみにおさめる。1505は白磁碗底部片で、内面に沈線状の段をもつものである。また高台の削り出しも小さく底部は厚く成形している。横田・森田分類のIV-1類である。1506は青磁碗底部片で施釉は高台部疊付を越えて一部高台内に達する。1507は同安窯系青磁皿で、内面に櫛によるジグザグ文様を施している。施釉は底部には至らない。

1508は内面黒色処理を施し、綿密なミガキ調整をしたもので、口縁部を欠損するものの変形タイプを呈するものと考えられる。1509は瓦質土器釜、1510～1512は土師質土器釜の口縁部で、口縁部および鉢状凸唇がしっかりしたもの1509・1510と、やや小さくおさめたもの1511・1512がある。1513は土師質、1514は瓦質土器釜の脚部である。1515は瓦質土器の掘鉢で体部は外上方に外反し、口縁部は下端部を若干拡張し断面方形状におさめる。内面には幅



第472図 SR1001杭列・土手状構造実測図

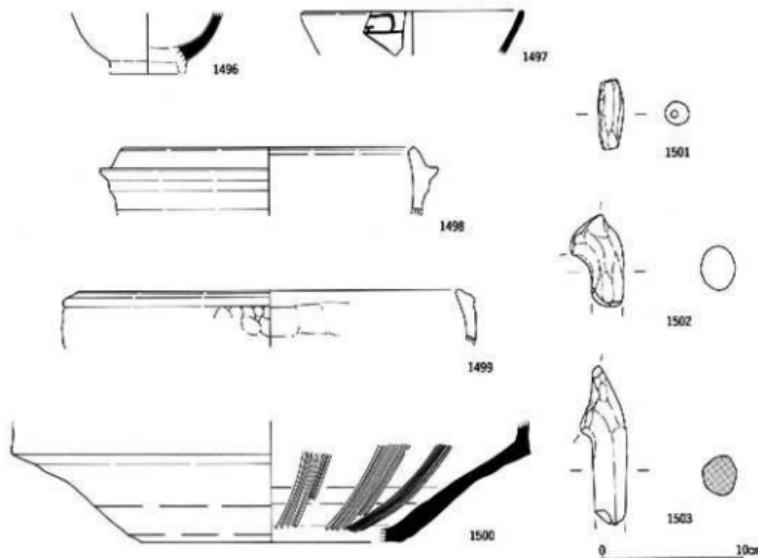
広の摺り目が施されている。1516・1517は備前窯搗鉢で口縁部は上方に大きく拡張する。備前焼第V期と考えられる。1518は須恵器喪体部片で、外面に綾杉状のタタキが施されている。1519は須恵質の丸瓦片で、凹面には布目痕が残る。

石列遺構出土遺物（第475・476図）

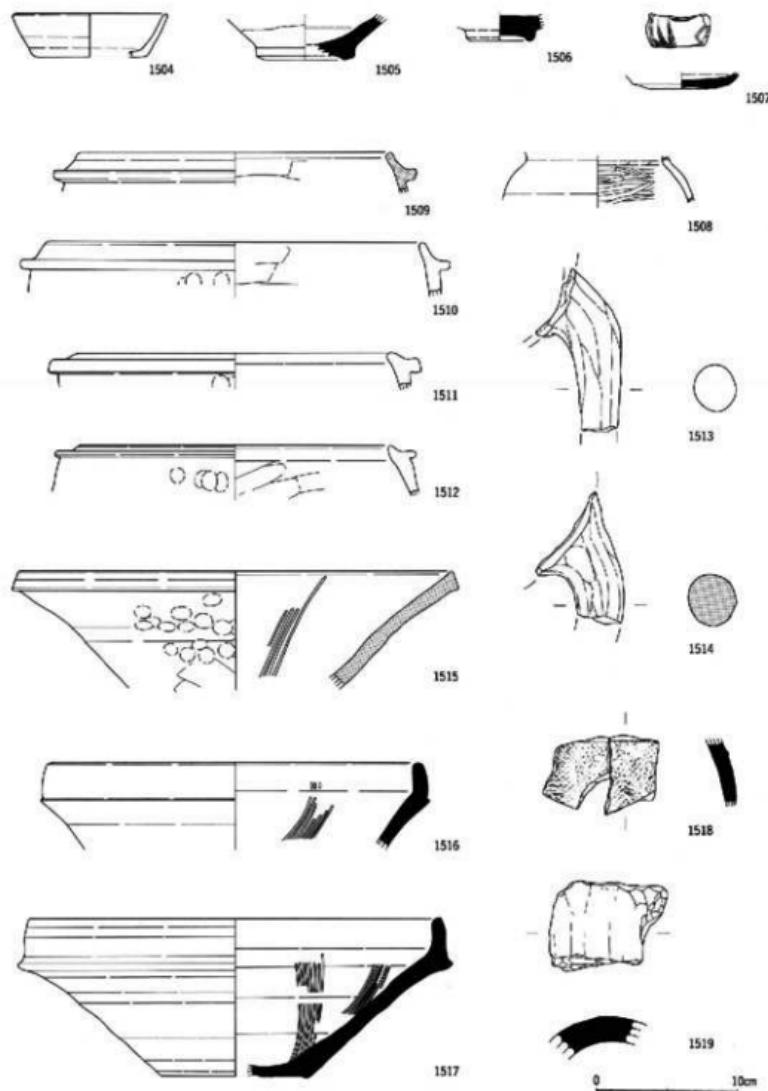
土手状遺構に伴う石列上面において出土した遺物である。

1520は白磁の小碗で口縁部は内側しながら立ち上がり、端部は尖り気味におさめる。高台は外面を斜めに面取りする。口縁下半部は回転ヘラケズリが顕著にみられる。1521は青磁碗で口縁部外面に雷文帯を有する。上田分類のC類である。1522は鶴蓮弁をもつ青磁碗、1523は見込みに花文をスタンプした青磁碗高台部である。釉は部分的に疊付を越えて高台内に達する。

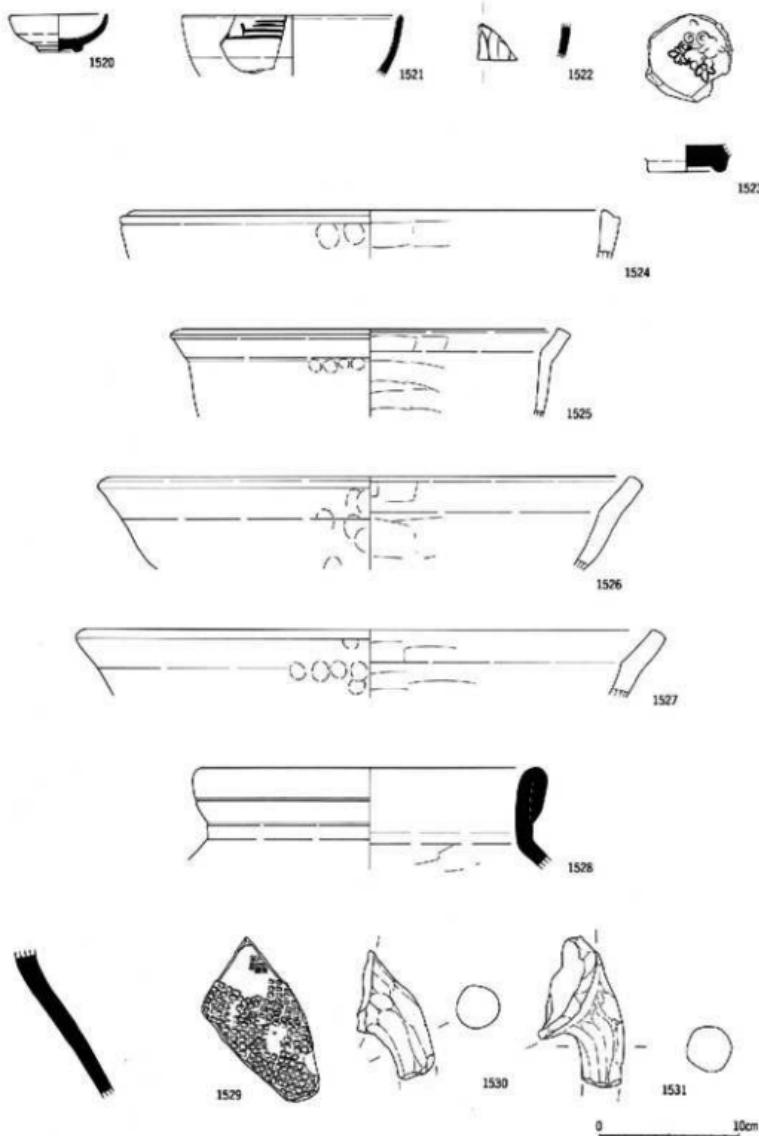
1524は土師質土器釜で、口縁部および鋸状凸帯は短く成形し丸くおさめる。1525～1527は土師質土器鍋である。口縁部は緩やかに屈曲し、端部は方形形状におさめる。口径は1525が27.0cm、1526・1527が40cm前後を測る。1528は備前窯壺の口縁部で直立する。口縁部は折り返して断面梢円形状に肥厚させ、外面ほぼ中央部に弱い凹線が1条巡る。備前焼第V期と考えら



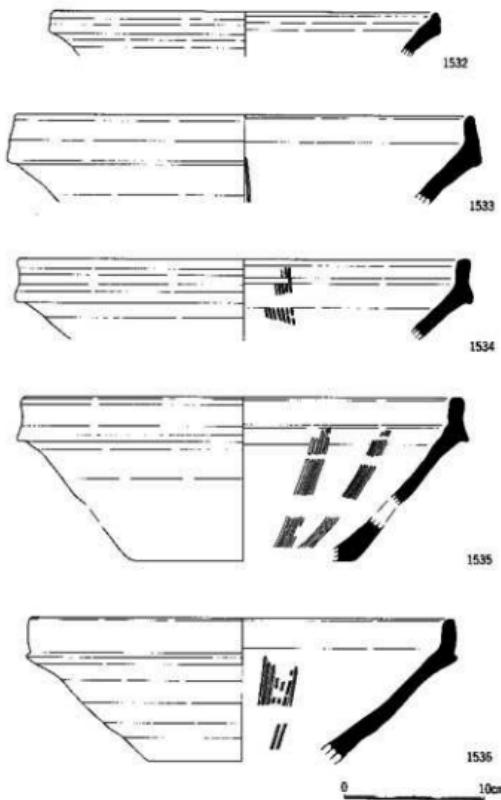
第473図 SR1001土手状遺構出土遺物実測図



第474図 SR1001杭列造構出土遺物実測図



第475図 SR1001石列造構出土遺物実測図 (1)



第476図 SR1001石列造構出土遺物実測図 (2)

れる。1529は須恵器壺の肩部で、外側は格子状タタキ、内側はヨコハケ調整である。1530・1531は土釜の脚部で1530は土師質、1531は瓦質である。

1532は東播系こね鉢の口縁部である。口縁端部は若干上下に拡張し、やや尖り気味におさめる。

1533～1536は備前窯搗鉢である。口縁部は上方に大きく拡張し、上端部を1533・1536は丸くおさめ端面はやや丸みをもつ。下端部は若干拡張させる。1534・1535はやや方形状におさめ外端面は幅広のナデにより下端部も若干拡張し、尖り気味におさめる。備前焼第V期におさまるものである。

上層出土遺物（第477～479図）

1537～1575は上層（第1層）において出土した遺物である。

1537は土師器小皿で、口縁部は浅く立ち上がり端部は若干尖り気味におさめる。1538～1539は土師器杯で、1538は緩やかに立ち上がる口縁部をもち端部は丸くおさめる。焼成はやや硬質である。

1541は和泉型瓦器椀口縁部で、口縁端部は若干外反し丸くおさめる。1542は黒色土器A類椀の口縁部で口縁部は内彎気味に立ち上がり端部は丸くおさめる。内面に横方向へのヘラミガキが施されている。

1543は青磁の稜花皿口縁部で口縁部は外反する。1544は同安窯系青磁皿で、内面は無文である。1545～1547は龍泉窯系青磁碗である。1545は口縁端部が外反し丸くおさめるもの、1546は外面に蓮弁を有するもの、1547は口縁部が外上方にやや直線的に延びるもので、内面に飛雲文を片彫りしたものである。1547は横田・森田分類のI～4類にあたる。

1548・1549は白磁碗高台部である。1549は見込みに目跡が残り、また高台部には抉り込みが施されている。森田分類のD群にあたる。

1550～1559・1560～1563は土師質土器釜の体部および脚部である。1550は球形状と考えられる体部上端に直立する口縁部を有するものである。1551～1555・1560は直立気味の浅い体部に短く立ち上がる口縁部と直下に僅かな鉗状の凸帯を巡らせたものである。1562・1563は口縁部を上方に拡張し尖り気味におさめるものであるが、外面に鉗状の凸帯が見られないものである。1556～1559は断面円形状を呈した土器釜の脚部と考えられるもので、このうち1557は瓦質土器釜、他は土師質土器釜の脚部である。

1564は土師質土器擂鉢で、体部は外上方に直線的に立ち上がり端部を方形状におさめる。

1565・1566は備前窯擂鉢で、1565は口縁端部を上下に拡張し上端部は尖り気味におさめるもの、1566は口縁部を上方に大きく拡張し上端部を方形気味におさめたものである。

1567は備前窯甕口縁部でやや高く直立する頸部上半を玉縁状に形成するものである。

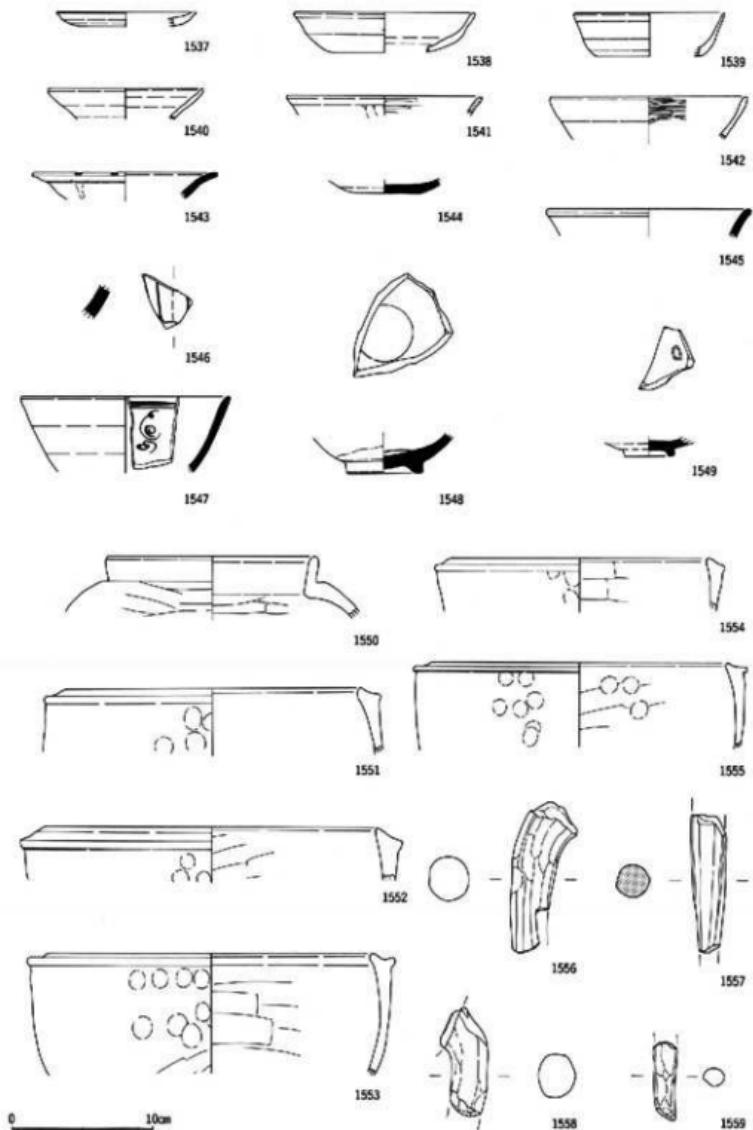
1568は瓦質土器の甕底部と考えられるもので、体部は平底の底部から外上方に立ち上がり外面には弱い格子状タタキ、内面には板状のナデが施されている。

1569は埴輪口縁部で口縁部は肥厚するものである。内面には赤色に熔融した萍の付着が見られる。

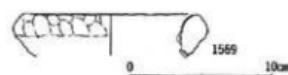
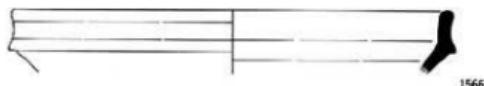
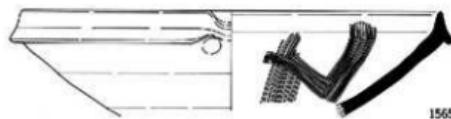
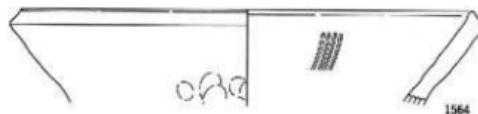
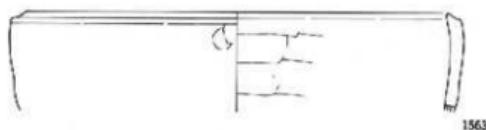
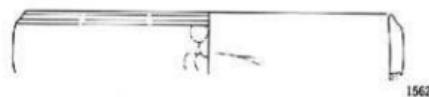
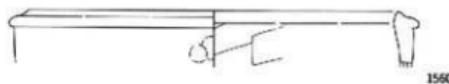
1570は瓦質の軒平瓦で、瓦当面には界区・珠文が見られる。また、凹面には布目痕が残る。1571は瓦質の丸瓦で、凹面に布目痕が残る。1572は須恵質の平瓦で、凹面には布目痕、凸面には繩麻文が残る。

1573は笄で長さ19.9cmを測り、片面に文様が施されている。

1574は土師質の管状土錐である。1575は砂岩製の球状石製品である。

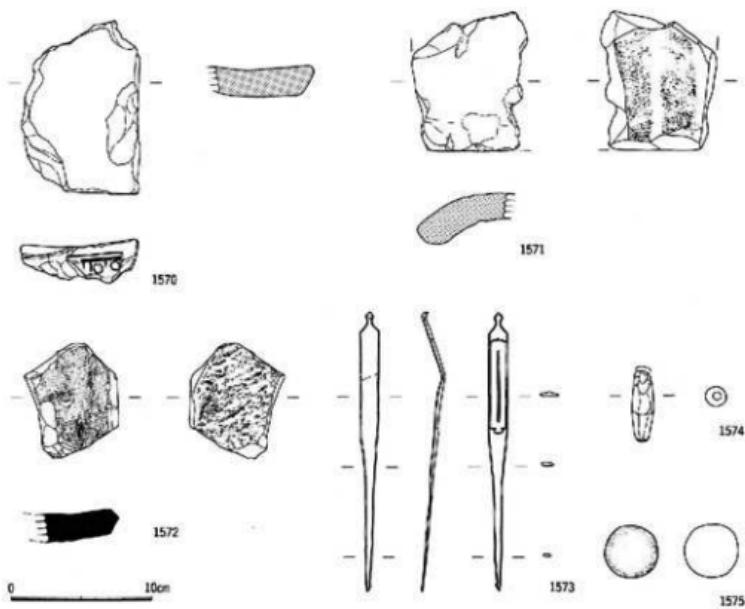


第477図 SR1001上層出土遺物実測図 (1)



10cm

第478図 SR1001上層出土遺物実測図 (2)



第479図 SR1001上層出土遺物実測図 (3)

第2層出土遺物 (第480図)

1576～1593は第2層において出土した遺物である。

1576～1578は土師質土器小皿で、口縁部は外上方に立ち上がり端部は尖り気味におさめる。底部は回転糸切りである。

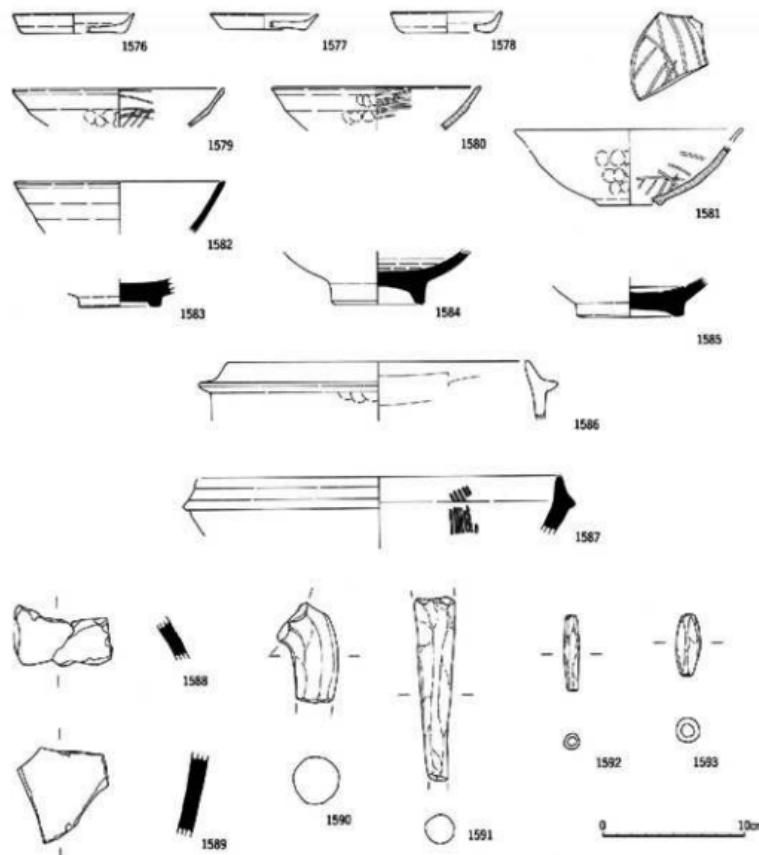
1579～1581は和泉型瓦器碗で、体部は内湾気味に立ち上がり口縁端部は若干外反する。内面のミガキ調整は側面が圓線状ミガキで、見込みには平行線状のヘラミガキが施される。尾上編年のⅢ期にあたるものである。

1582・1583は青磁碗である。1582は口縁部が外上方に立ち上がり端部は丸くおさめる。1583は高台部で、低い断面方形状を呈する。施釉は一部、高台疊付にかかる。1584・1585は白磁碗で1584は比較的高い高台を有し、高台部外面は僅かに斜め方向の面取が施されている。1585は断面方形状の低い高台をもつもので底部は厚く、内面見込みには沈線が巡る。施釉は体部外面中位までである。横田・森田編年のⅣ-1類にあたる。

1586は土師質土器釜の口縁部である。口縁部は内上方に立ち上がり、外面口縁直下に断面

三角形状の鋸が巡るものである。1587は備前焼鉢で、口縁部は上方に拡張し尖り気味におさめるものと考えられる。また、下端部の拡張は小さくやや尖り気味におさめている。

1588は東播系斐の体部片と考えられるもので須恵質である。体部外面には綾杉状のタタキが残る。1589は須恵器壺体部片で、体部外面には格子状タタキが施され、部分的にはナデ消されている。1590・1591は土師質土器蓋の脚部で断面形状は円形を呈する。1592・1593は土師質の管状土錐である。

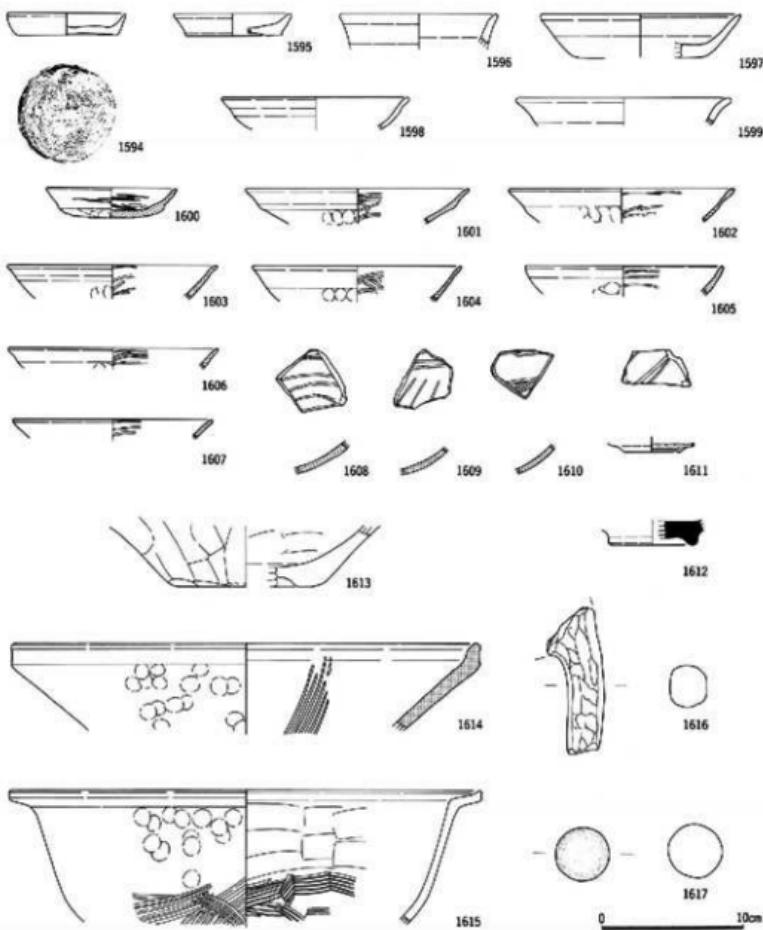


第480図 SR1001第2層出土遺物実測図

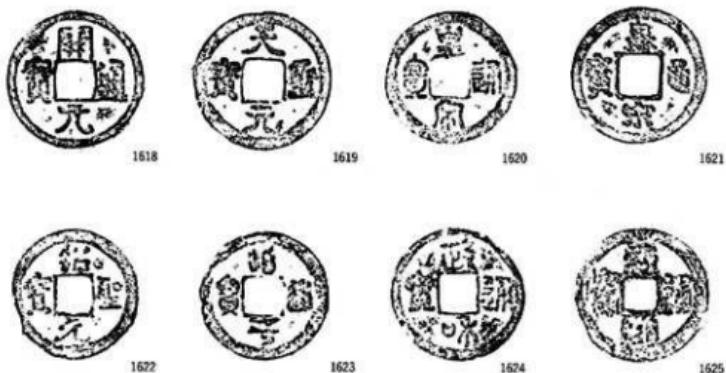
第3層出土遺物（第481・482図）

1594～1625は第3層において出土した遺物である。

1594・1595は土師質土器小皿で、短く立ち上がる口縁部を有し底部は回転糸切りである。
1596・1597・1599は土師質土器杯口縁部である。1598は土師器杯口縁部で内外面赤色塗彩されている。1600は瓦器小皿である。底部はやや平底を呈し、内外面には横向方向へのヘラミガ



第481図 SR1001第3層出土遺物実測図



第482図 SR1001第3層出土銭貨拓影

キが施されている。1601～1607は和泉型瓦器楕口縁部、1608～1611は体部および底部片である。調整は外面ユビオサエ後口縁部ヨコナデ、内面圓線状ミガキと平行線状ミガキが施されている。時期的には概ね尾上編年Ⅲ期におさまるものである。1612は青磁碗底部片で、高台部は断面方形状を呈する。施釉は外外面に施され、外面は高台部疊付を越えて内面に至るが疊付の釉はかき取っている。

1613は土師質土器こね鉢で外面調整はヘラケズリが顕著である。1614は瓦質の擂鉢で、口縁部は上方に拡張する。1615は土師質土器鍋である。口縁部はやや水平方向に屈曲し、端部は方形状におさめる。1616は土師質土器釜の脚部である。1617は砂岩製の球状石製品である。

1618～1625は銅銭である。1618は「開元通宝」で621年初鋤、1619は「天慶元年」で1023年初鋤、1620・1621は「皇宋通宝」で1039年初鋤、1622・1623は「紹聖通宝」で1094年初鋤、1624は「政和通宝」で1111年初鋤、1625は「○○通宝」である。

第4層出土遺物（第483図）

1626～1647は第4層において出土した遺物である。

1626・1627は土師質土器小皿で、底部回転糸切りである。1628～1631は土師質土器杯である。1628・1629は口縁部が内彎するタイプ、1630・1631は口縁部が外反するタイプで端部を丸くおさめ、底部は回転糸切りである。1632は円盤状高台の土師器杯で、口縁部は内彎気味に外上方に立ち上がる。底部は回転ヘラ切りである。1633～1636は和泉型瓦器楕口縁部で、内面には圓線状ミガキが施されている。尾上編年のⅢ期におさまるものである。

1637は龍泉窑系青磁碗で体部は若干内彫気味で外上方に立ち上がり、内面に草花文を片彫りする。横田・森田分類の1-2類である。

1638は瓦質の火鉢と考えられるもので、口縁部は内側に屈曲させ端部は尖り気味におさめる。菅原分類のI型にあたる。1639は瓦質土器鍋で体部は直線的に外上方に延び上端部内面には直立する断面方形形状の比較的高い凸帯を巡らせ口縁部を形成している。1640・1641は土師質土器釜である。1640の体部は直立気味に立ち上がり、また口縁部は小さく立ち上がり短い鶴状凸帯が巡る。1641はやや高い口縁部の立ち上がりを有するものである。1642は土師質土器擂鉢で、体部は外上方にやや外反気味に立ち上がる。口縁部は若干上下に拡張する。1643は瓦質土器擂鉢で口縁端部は若干内上方につまみ出す。1644は土師質土器の小壺で、口縁部を欠損する。外面調整には緻密なミガキが施されている。底部には回転糸切り痕が残る。また、内面および外面肩部には黒色を呈した漆状の付着が認められる。1645は須恵器壺の体部片で、外面には格子状タキの痕跡が残る。1646は口径6cm前後を測る壠壠である。1647は土師質土器釜の脚部で断面形状は円形を呈する。

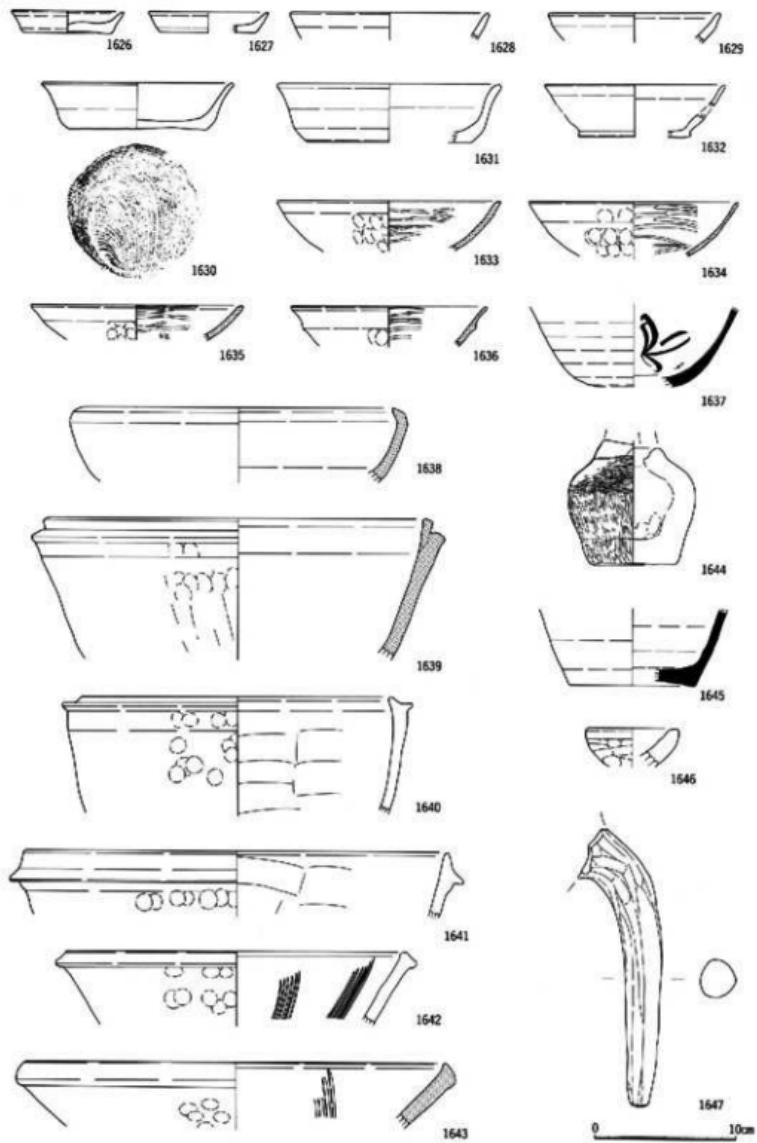
第4・5層出土遺物（第484・485図）

1648～1698は第4・5層において出土した遺物である。

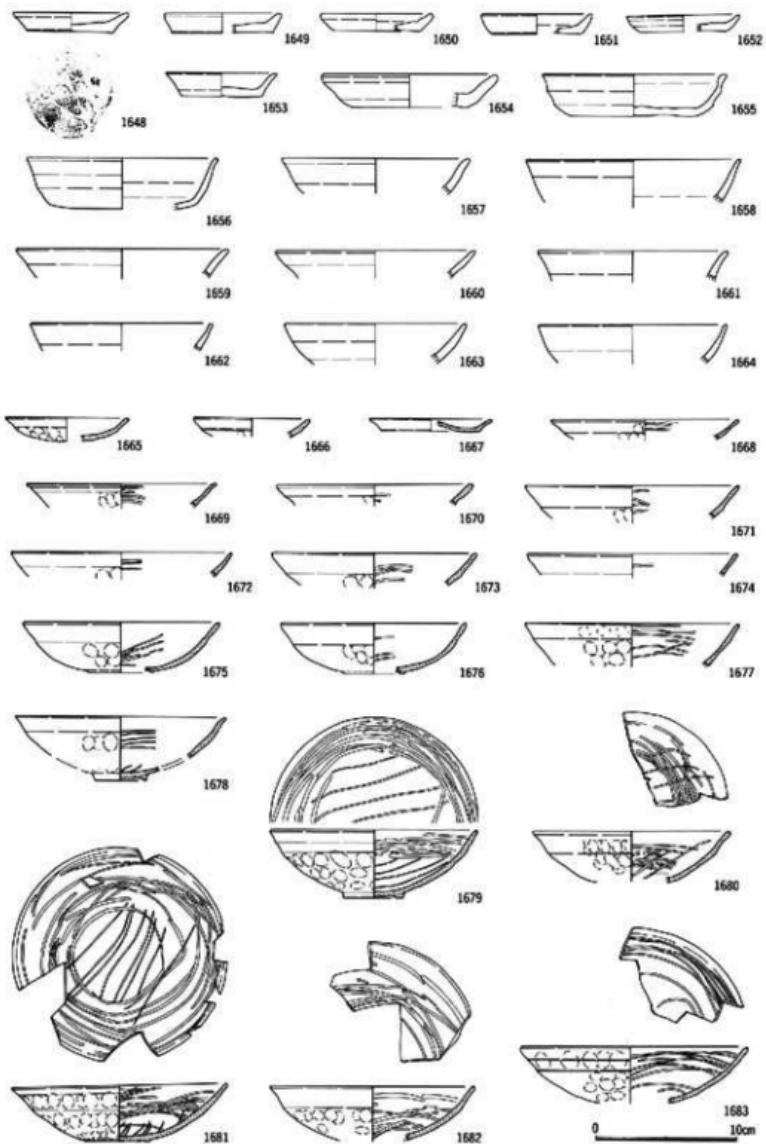
1648～1653は土師質土器小皿で、口縁部は短く外上方に立ち上がる。底部調整は全て回転糸切りである。1654～1664は土師質土器杯である。口縁部の形態から外反および直線的に立ち上がるタイプのもの1654～1662と内彫気味に立ち上がる口縁をもつもの1663・1664がある。調整は内外面ともヨコナデで、1655・1656の底部では回転糸切りが認められる。

1665～1667は瓦器小皿で、口縁部は短く外上方に立ち上がり丸くおさめる。内面のミガキ調整は見られない。1668～1686は和泉型瓦器椀である。口縁部は外上方に内彫気味に立ち上がり、端部は若干外反させ丸くおさめる。調整は外面ユビオサエ、口縁部ヨコナデで、内面側面部は圓線状ミガキが施され、1678～1681の内底面には平行線状ミガキが施されている。また、1685・1686には側面圓線状ミガキと内底面螺旋旋状ミガキが施されている。1687は楠葉型瓦器椀と考えられるもので、内彫気味に立ち上がる体部内面に細身の連結輪状ミガキが施されている。高台は幅広で、低い三角形状を呈する。胎土は黒灰色で若干の白色粒を含む。時期的には尾上編年のⅢ期におさまるものである。

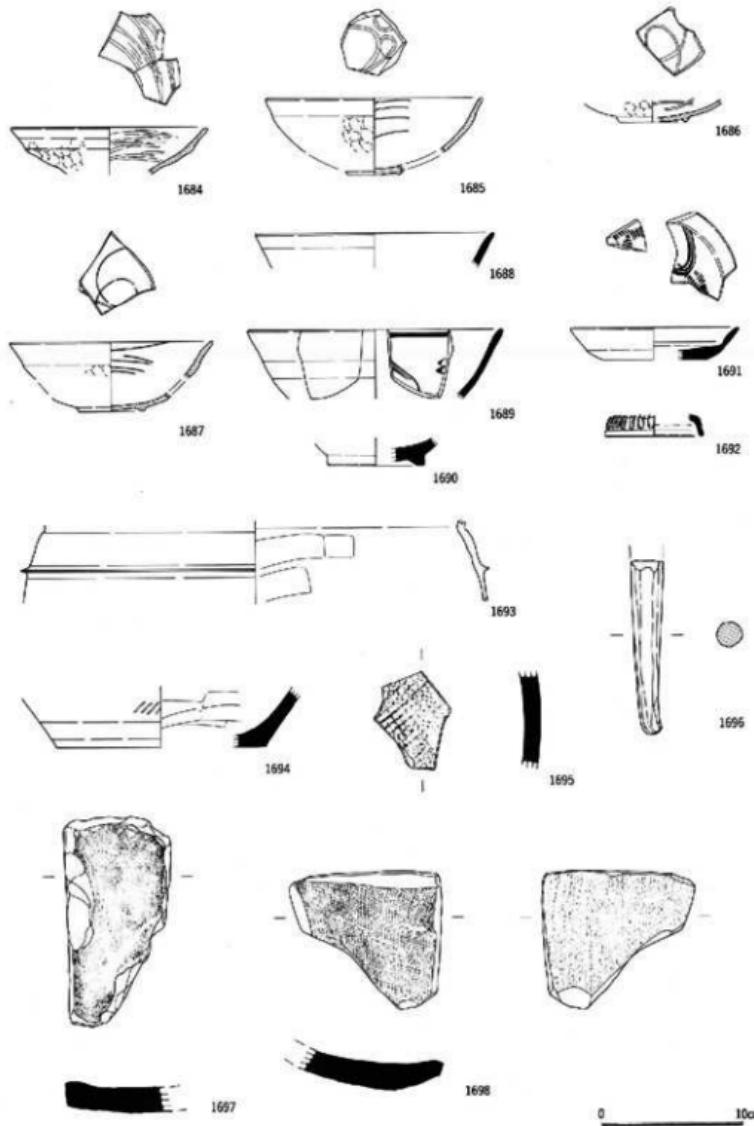
1688は青磁碗口縁部で口縁端部は尖りぎみにおさめる。1689は龍泉窑系青磁碗で内面に飛雲文が片彫りされている。上層出土遺物1547と同一個体の可能性がある。1690は白磁碗高台部で外面は直に、内面は斜めに成形されている。施釉は内面のみで、外面は高台まで達していない。1691は同安窑系青磁皿で体部中位で屈曲する。内面見込みには櫛描によるジグザグ文が施されている。施釉は全面に施された後に底部はかき取っている。1692は青白磁の合子



第483図 SR1001第4層出土遺物実測図



第484図 SR1001第4・5層出土遺物実測図 (1)



第485図 SR1001第4・5層出土遺物実測図 (2)

蓋で、外面に細身の蓮弁が型押しされている。

1693は土師質土器釜で、口縁部は欠損するものの外上方に屈曲する口縁を有するものと考えられる。また、やや下がった位置に断面三角形状の小さい鈎を巡らしている。1694・1695は須恵器壺・甕の底部および体部片で、外面に1694は平行状タタキ、1695には格子状タタキが施されている。1696は瓦質土器釜の脚部で、断面円形状を呈する。1697・1698は須恵質の平瓦で凹面には布目痕、凸面には繩文が残る。

第6・7層出土遺物（第486図）

1699～1717は第6・7層において出土した遺物である。

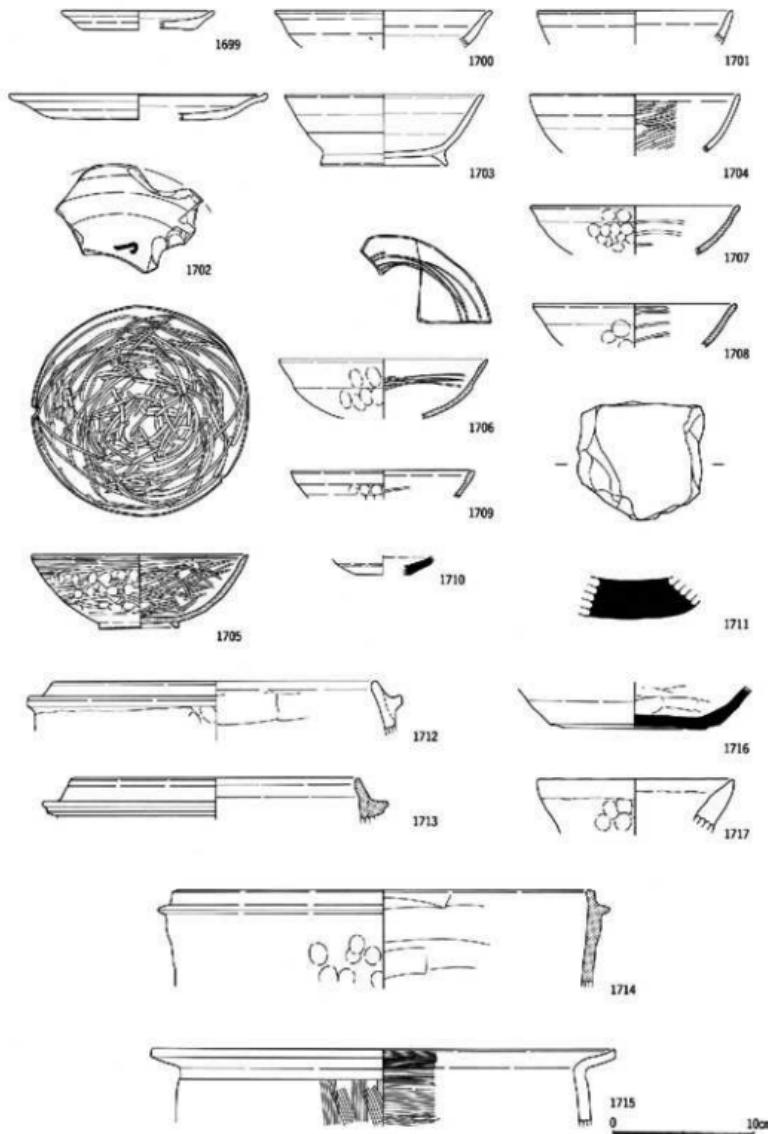
1699は土師器皿で口縁部中位で若干外反し、底部は回転ヘラ切りである。1700～1701は土師質土器杯の口縁部である。1702は土師器皿で、口縁部は浅く外上方に立ち上がり端部は若干肥厚させる。内外面とも赤色塗彩されており、底部外面には墨書きと考えられる痕跡が認められる。1703は土師器高台付杯で、口縁部は外上方に立ち上がり尖り気味におさめる。底部回転ヘラ切りで、底部内面以外は全面に赤色塗彩されている。1704は黒色土器A類椀の口縁部で内面には綿密なヘラミガキが施されている。1705～1709は瓦器碗である。1705は体部内彌氣味に立ち上がり口縁端部は丸くおさめ、高台部は断面方形状を呈する。調整は外面分割ミガキが体部下半まで施され、内面はやや粗略なヘラミガキで、内底面は三方向からのミガキが認められる。1705は尾上編年のII-2期に相当するものと考えられ、1706～1709はIII期におさまるものである。1710は同安窯系青磁皿である。1711は須恵質の平瓦片で凹面には布目痕、凸面には繩文が残る。

1712は土師質、1713・1714は瓦質の釜で、口縁部の立ち上がり及び鈎状の凸蒂は比較的しっかりしている。1713の鈎状凸蒂外面には凹線が巡る。1715は土師質土器鍋で、口縁部は体部より水平方向に屈曲する。1716は須恵器壺の底部片である。1717は製塙土器で口縁端部は尖り気味におさめる。胎土は荒く、砂粒を多量に含む。この他、製塙土器片は6点出土している。

第8層出土遺物（第487～491図）

1718～1794は第8層において出土した遺物である。

1718～1720は土師器皿で、1719は口縁部が外反し端部は丸くおさめる。底部は回転ヘラ切りである。1721～1756は土師器杯である。このうち1721～1728は赤色塗彩が施されているもので、1721～1725は外上方に立ち上がる口縁端部を若干上方に拡張し、口縁部内面に沈線が巡るものである。底部調整は1721・1722・1724・1727が回転ヘラ切り後ナデ、1723・1725・1726が丁寧なナデ調整である。1729は器高2.1cmで皿状を呈する。1730～1741は口縁部が外上方に



第486図 SR1001第6・7層出土遺物実測図

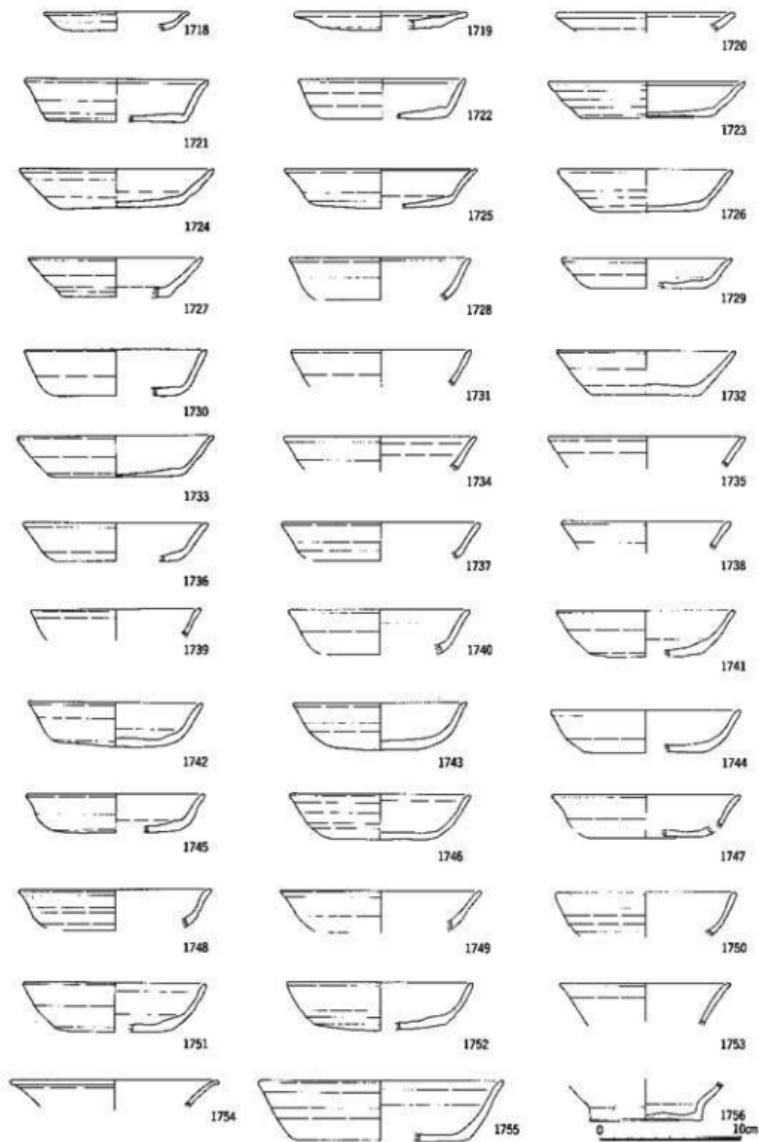
直線的に立ち上がるタイプで、口縁端部は丸くおさめる。1742～1749は口縁端部を外反させ丸くおさめるタイプ、1750～1752は口縁部が内彫気味に立ち上がるタイプである。1753・1754は口縁部が底部より外上方に開くタイプのものである。口径的には大きく3法量に分けられ、12cm前後を測るもの1738～1740・1743・1753、13cm前後を測るもの1730～1732・1736・1740～1742・1744～1752、14cm前後を測るもの1733～1735・1737である。底部調整は1733以外回転ヘラ切りである。1755は口径17.3cmを測る大型のもので須恵器の焼成不良と考えられる。1756は円盤状高台の杯で、体部は底部より直立気味に立ち上がり外上方に延びるものである。底部は回転ヘラ切りである。1757・1759は土師器椀口縁部、および1758は高台付杯の口縁部である。1759は内彫気味に立ち上がる口縁部で、内外面には横方向へのヘラミガキが施されている。1760～1762は土師器杯の高台部である。

1763～1766は黒色土器A類椀である。1764は内彫気味に浅く立ち上がる体部を有するもので、口縁部は外反し端部は丸くおさめる。ミガキ調整は内面は横方向への非常に緻密なミガキ、外面は口縁端部から中位にかけて横方向への分割ミガキが施されている。高台径は7.6cmと小さく、比較的高いものである。1766はやや大型で鉢形の可能性が考えられるもので、外面には平行タタキ後、数条のヨコハケが施されている。出土時には斎串が伴っている。1767は黒色土器B類椀で、低い断面方形状の高台が付く。内面は放射状に緻密なヘラミガキが施されており、外面は横方向へのヘラミガキが体部下半まで施されている。畿内からの搬入品で、時期的には11世紀中頃と考えられる。

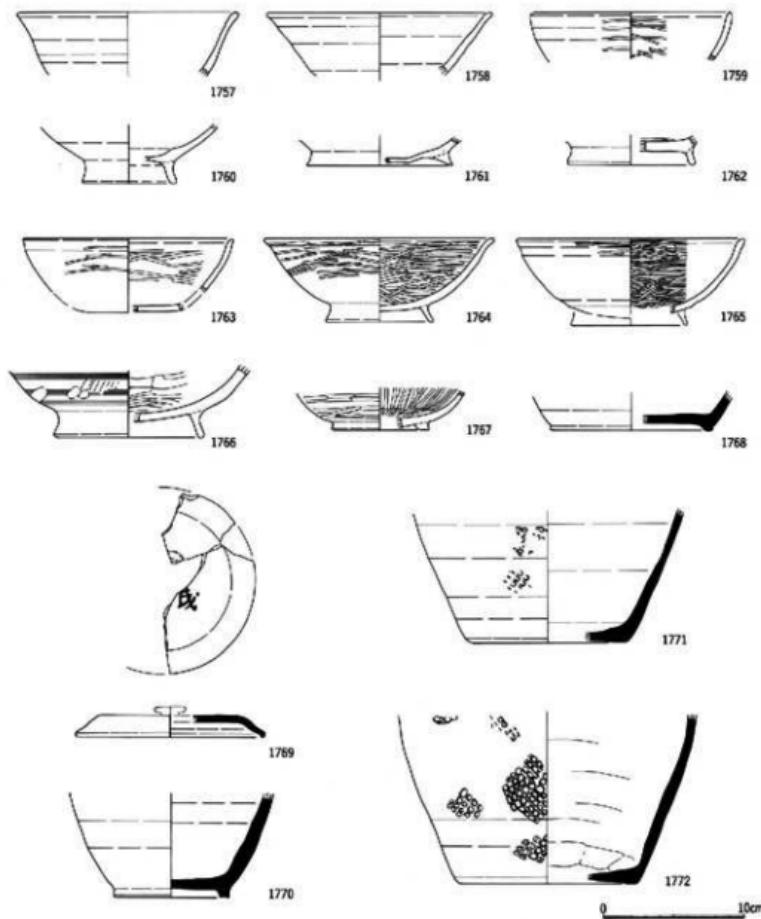
1768は須恵器高台付杯である。1769は須恵器杯蓋で、天井部は平坦で外縁部は下方に屈曲し、端部は尖り気味におさめる。外面には「成」が墨書きされている。1770～1772は須恵器壺体部片で、1770は方形の高台部を有するもの、1771・1772は平底で体部外面に格子状タタキが施されている。

1773～1783は土師器壺である。1773・1774・1776・1778・1780はやや長胴型の体部で「く」の字状に屈曲した口縁の端部を上方に拡張するものである。外面には荒いタテハケが施される。1777は屈曲した口縁端部を若干上下に拡張したタイプのものである。1781・1782は体部から外上方に短く屈曲した口縁をもつもので1781は端部を若干上方につまみ上げ、1782はやや方形状におさめるものである。調整は外面タテハケ、内面口縁部ヨコハケで体部はタテハケおよび下半部は縦方向へのヘラケズリである。1783は甕口縁部と捉えたが、甕等の別の器種の可能性も考えられる。

1784・1785は土師器釜で、口縁部直下に断面方形状を呈した鉢がめぐり、いわゆる撻津型釜と分類されるタイプである。胎土から見ると1777・1781・1782は砂粒の中に結晶片岩が含まれているもの、他は硬質で色調もチョコレート色を呈し石英・長石が多く含まれるなど1784の釜とほぼ同質を示すことから搬入された可能性が考えられる。

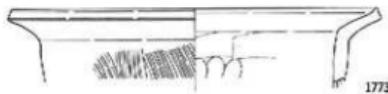


第487図 SR1001第8層出土遺物実測図 (1)

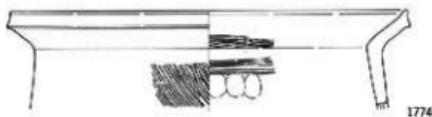


第488図 SR1001第8層出土遺物実測図（2）

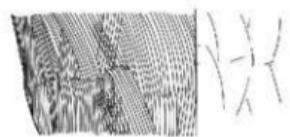
1786～1789は製塙土器口縁部で、口縁部の形状から薄手で端部を上方に延ばすタイプのもの1786、薄手で口縁端部を内向させるタイプのもの1787、やや厚手で口縁端部を若干上方に拡張し丸くおさめるタイプのもの1788、厚手で口縁端部を上方に拡張し尖り気味におさめるタイプ1789に分けられる。調整はいずれも外面ユビオサエのちナデ、1787の内面は布目痕が残り、他は板ナデである。胎土には多量の砂粒を含むものの、1787は若干きめの細かい胎土である。



1773



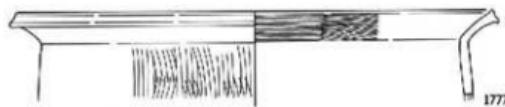
1774



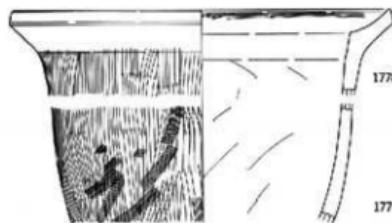
1775



1776

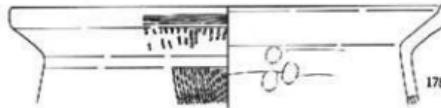


1777



1778

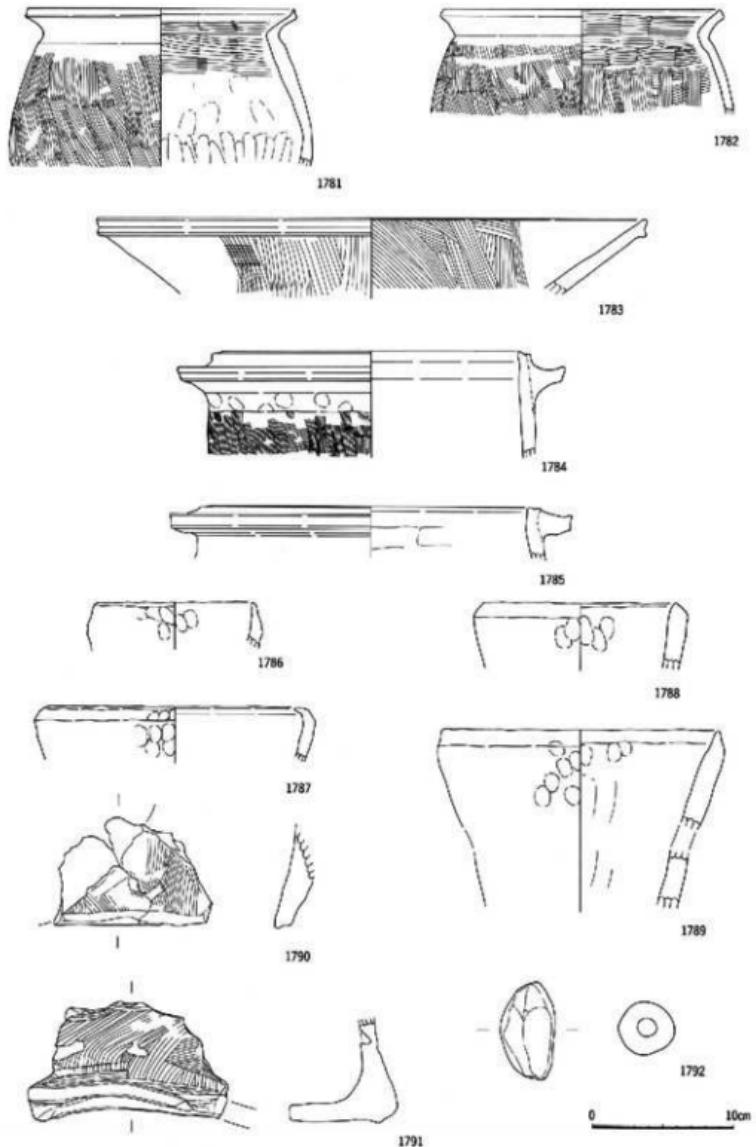
1779



1780

0 10cm

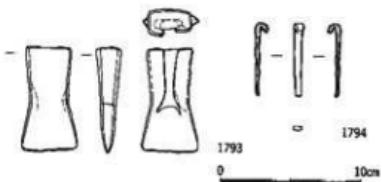
第489図 SR1001第8層出土遺物実測図 (3)



第490図 SR1001第8層出土遺物実測図 (4)

1790・1791は竈片である。調整は荒いハケが施されている。1792は土師質の管状土錐で、平面形状は梢円形を呈する。

1793は光形の鉄斧で、着柄部を袋状につくるものである。全長7.5cm・刃先幅4.0cmを測る。1794は鉄釘で頭部を逆U字状に折り返している。全長5.2cmを測る。



第491図 SR1001第8層出土金属製品実測図

自然流路1出土木製品

自然流路1 (SR1001) の上層から第8層において279点の木製品が出土した。

上層～第7層出土遺物 (第492・493図)

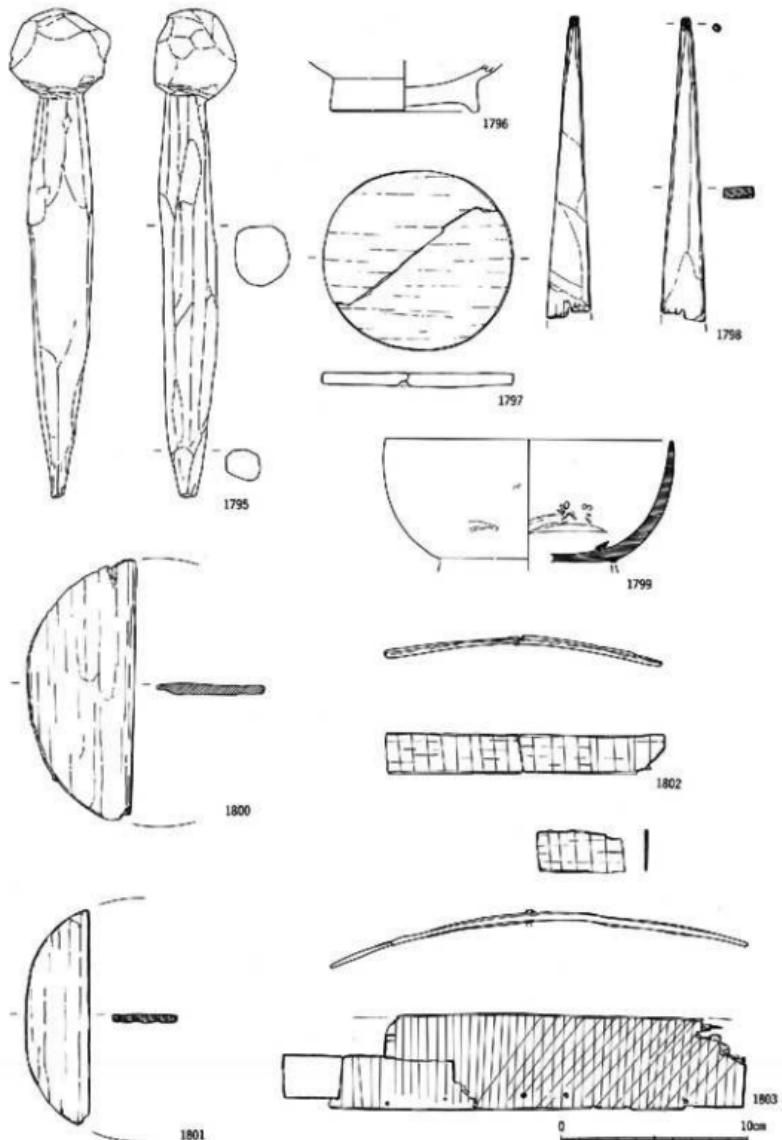
1795～1810は上層～第7層において出土した木製品で各出土層位は観察表に記載。

1795は人形状を呈したもので、頭部を球形状に、体部を断面円形状で端部を尖り気味におさめた枕状に削り出したものである。樹種は椿で丸木材を使用している。1796・1799は木製椀で内外面墨漆が施され、1799は外外面に黒漆地の上に朱漆による草花文様が描かれている。⁽²³⁾ 1798は串形木製品で平城宮分類のA形式にあたるもので、身の部分が断面方形で先端部は断面円形状を呈する。先端部には摩滅度が認められる。1797・1800・1801は曲物の底板と考えられるもので、1800・1801の側面には木釘痕が残る。1802・1803は曲物の側板で、1802の内面には縦に刻線、1803には縦および斜に刻線が施されている。また、1803下端には木釘痕が残る。1804の先端部はヘラ状に成形したものである。1805・1806・1807は板状の木片で、1806には炭化した痕跡が見られる。1808は板状のものを5枚に切り裂いている。1809は扇形に開く板状木製品で、長さ39.8cmを測るものである。元部に抉り痕が残り、檜扇未製品の骨板の可能性が考えられる。1810は断面方形を呈した棒状木製品である。

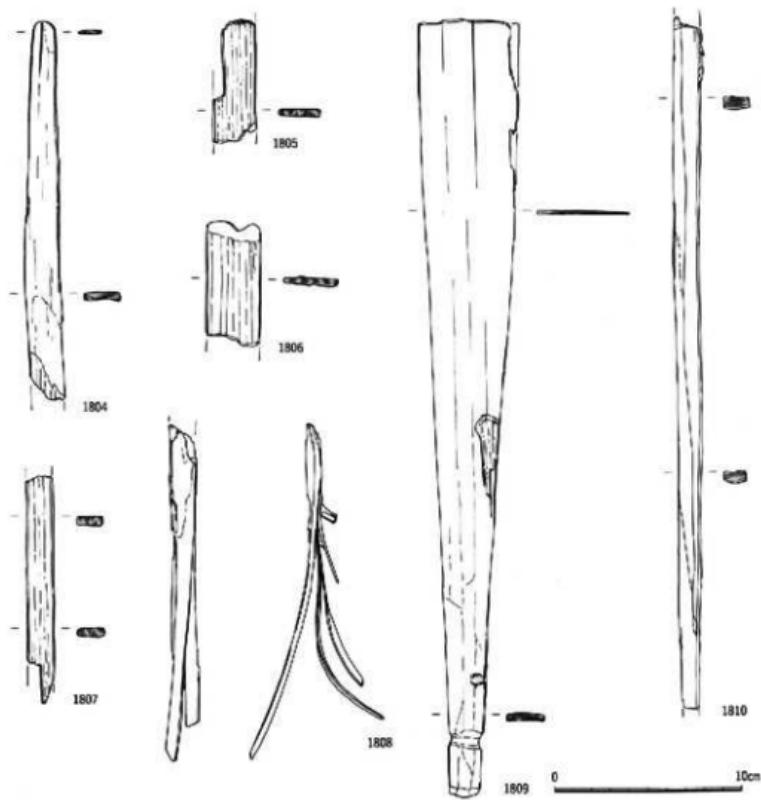
第8層出土遺物 (第494～496図)

1811～1842は第8層において出土した木製品で、祭祀具・工具・食器・その他木製品が出土している。斎車の分類は、基本的には奈良国立文化財研究所編『木器集成図録』近畿古代編にしたがう (以下図録分類で表記)。⁽²⁴⁾

1811～1824は斎車である。1821・1822以外は上端を主頭状に、下端を剣先状に成形するもので、C形式にあたる。削り掛けは上端部両端に1ヶ所に数回施したC III形式1811・1815・1818と、両側辺部に上端部からやや下がった位置に上下から2ヶ所に数回にわたり施すC V



第492図 SR1001出土木製品実測図 (1)



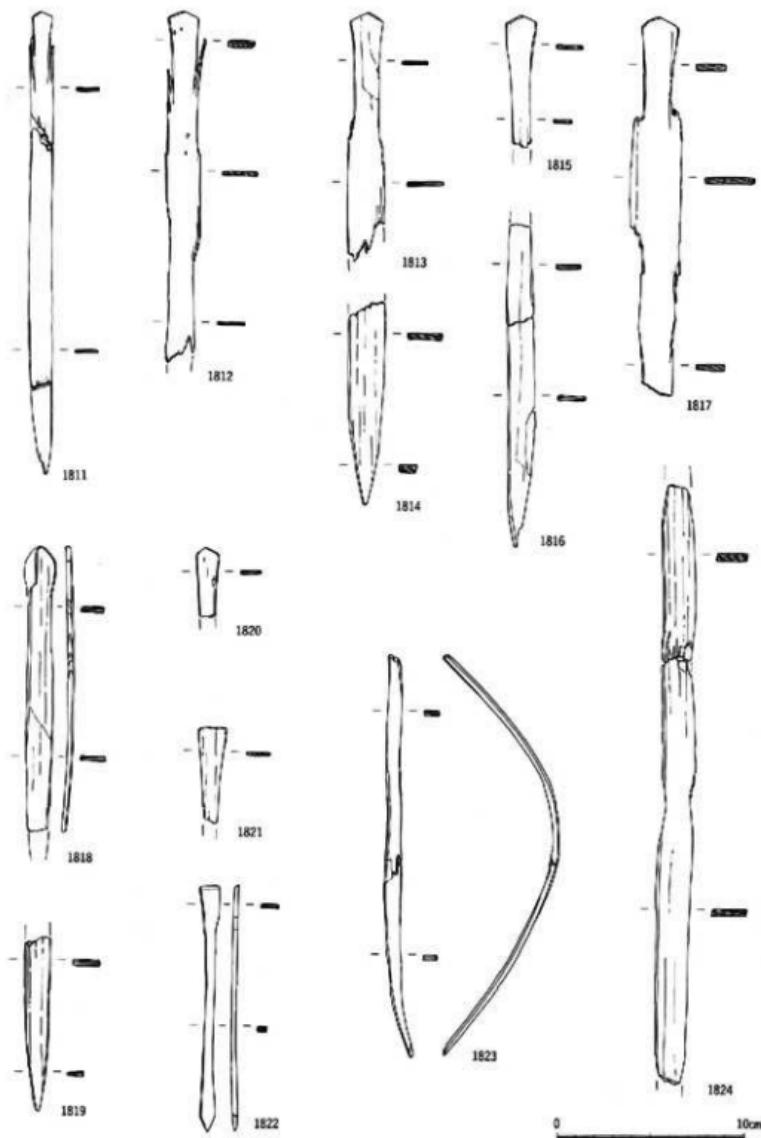
第493図 SR1001出土木製品実測図 (2)

形式1812・1813・1817がある。また、1821・1822は上端部を平坦につくるもので、分類基準にはないが、同形態のものは庄遺跡より出土している。

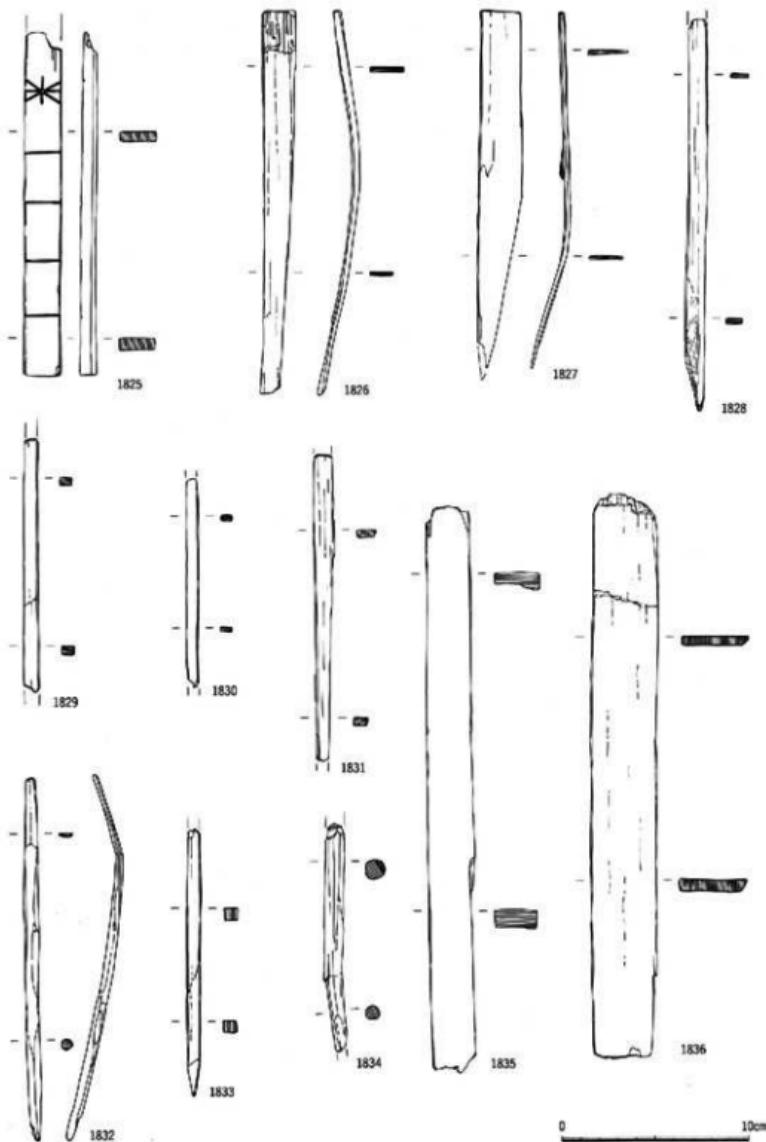
1825は木製尺で一端を欠損するものの、現存長18.3cm、幅1.9cm、厚さ0.6cmを測る。目盛りは片面に刻線を入れたもので5本確認でき、末端からの第5刻線(5寸の位置)は「米」印で示す。刻線の深さ幅は1.5mmを測るもので、刻線の間隔は末端部から3.15cm、2.9cm、3.1cm、2.65cm、3.3cm間隔と不揃いであるが、平均値は一寸3.02cmとなる。

この他、板状木製品1826～1828・1831・1835・1836、串状木製品1829・1830・1832・1833、棒状木製品1834がある。このうち板状木製品1828の先端には焼け焦げ痕が残る。

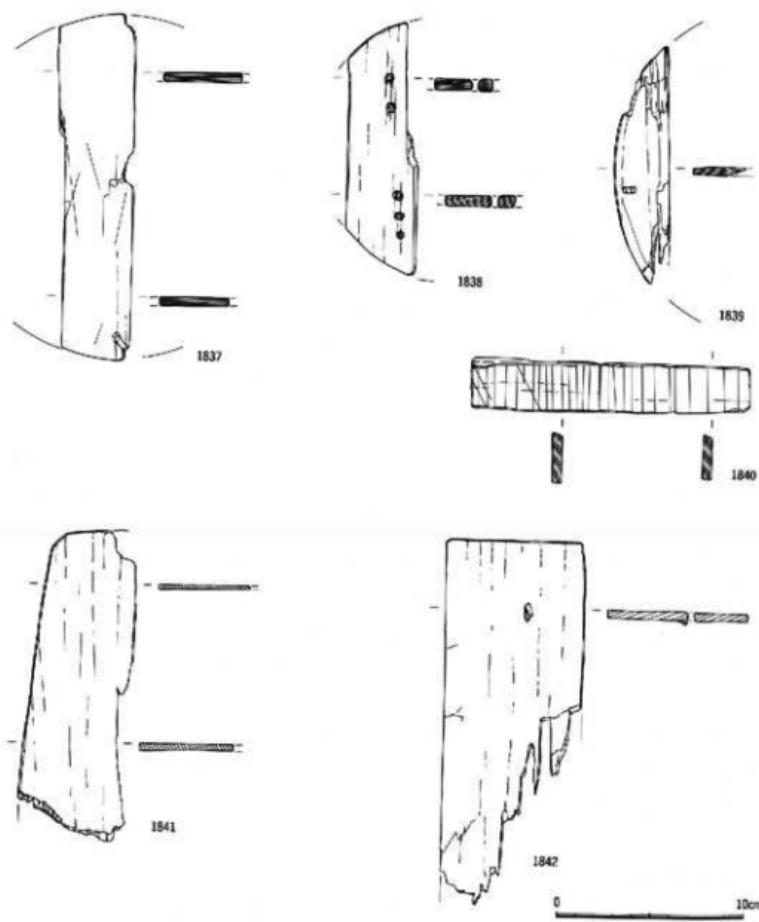
1837・1839は曲物の蓋板と考えられるもので、蓋板を繕ぐための棒皮および穿孔の跡が残



第494図 SR1001第8層出土木製品実測図 (1)



第495図 SR1001第8層出土木製品実測図 (2)



第496図 SR1001第8層出土木製品実測図 (3)

る。1839には側板留めの櫛皮が残る。1838は曲物の底板と考えられるもので、5カ所において穿孔が認められる。1840は曲物の側板で内面には綴の刻線が施されている。1841は折敷底板で、形状は隅丸方形状を呈するものと考えられる。1842は方形を呈した板材で、上部中央部に釘穴痕と考えられる穿孔が残る。

自然流路2 (SR1002) (第497・498図)

自然流路2 (SR1002) は微高地の南端を東西方向に延びる河道で、現黒谷川に沿って広がる低位部にあたる。自然流路の北西側は、犬伏谷川の支流沿いに南北に延びる自然流路1 (SR1001) と合流するものと考えられる。また、自然流路2 は北側微高地上から南に向かって急激に落ち込み、対岸は約60m前後で古城の微高地上に立ち上がるものと考えられる。

調査地点は調査区画の第3分割の南半分と第4分割にあたる。

遺物を含む包含層は現地表面から約3.0m下部で第11層の植物遺体の堆積層以下、標高0m前後において基本的に3層ないし一部4層にわたる灰色系統の粘質土層において確認された(第5図)。また、第497図の土層図ではAE-44グリッドの第3層(灰色粘質土)に集中する傾向が認められた。

上記の第11層(植物遺体堆積層)は本調査区から東側下流部、約200m地点において県教委調査で検出した第10層に対応し、また下層部の遺物包含層も対応することから木製遺物を包含する層は、東西方向への広い範囲においてほぼ同一堆積を示しているものと考えられる。

調査区内での遺物の出土傾向は遺物分布図(第497・498図)からほぼ全面において出土している。その中で木製遺物の集中する地点を中心に捉えてみると、木製品は調査区南東隅に集中しており、分布状況から流水の方向は南西方向から北東方向と考えられる。

また、木製品の分布からいくつかの集中地点が見られ、第1群から第4群の4カ所のプロックとして捉えられる。

出土した木製品は加工痕が認められる破片を含め総数1,315点を数え、その中でも木製祭祀遺物である斎車が多数認められる。

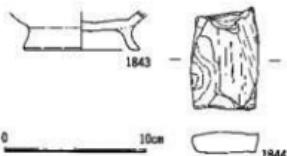
以下、各層および各群ごとで遺物の整理を行う。

灰色粘質土層出土遺物 (第499図)

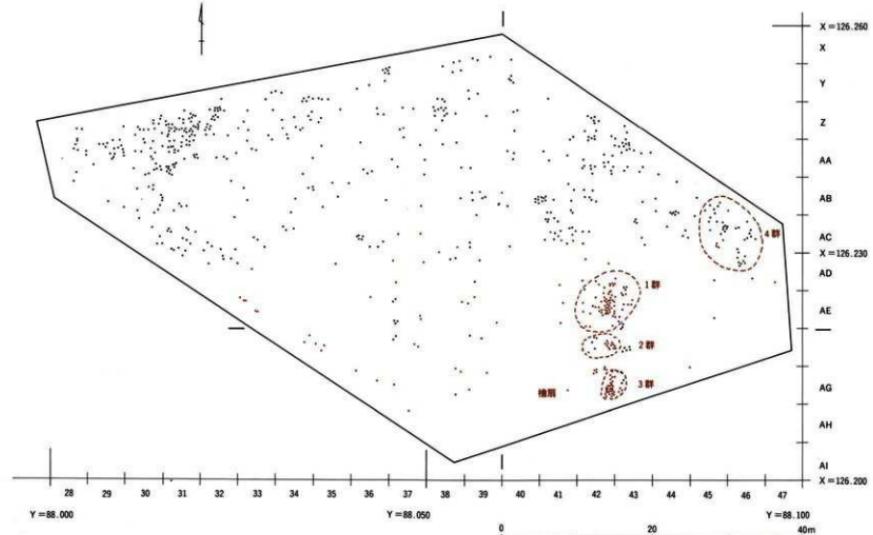
灰色粘質土層は第14層(緑灰色粘質土)の上層の第4層、黄灰色粘質土層に対応する(第5図、M-8トレンチ)。また、遺物は調査区内の中央部より北側において出土したものである。

1843は高台付杯底部である。高台部は「ハ」の字状に開いた方形状を呈した比較的高い高台を有するもので、端部は若干尖り気味におさめる。

1844は緑泥片岩製の砥石で、1面に使用痕が認められる。



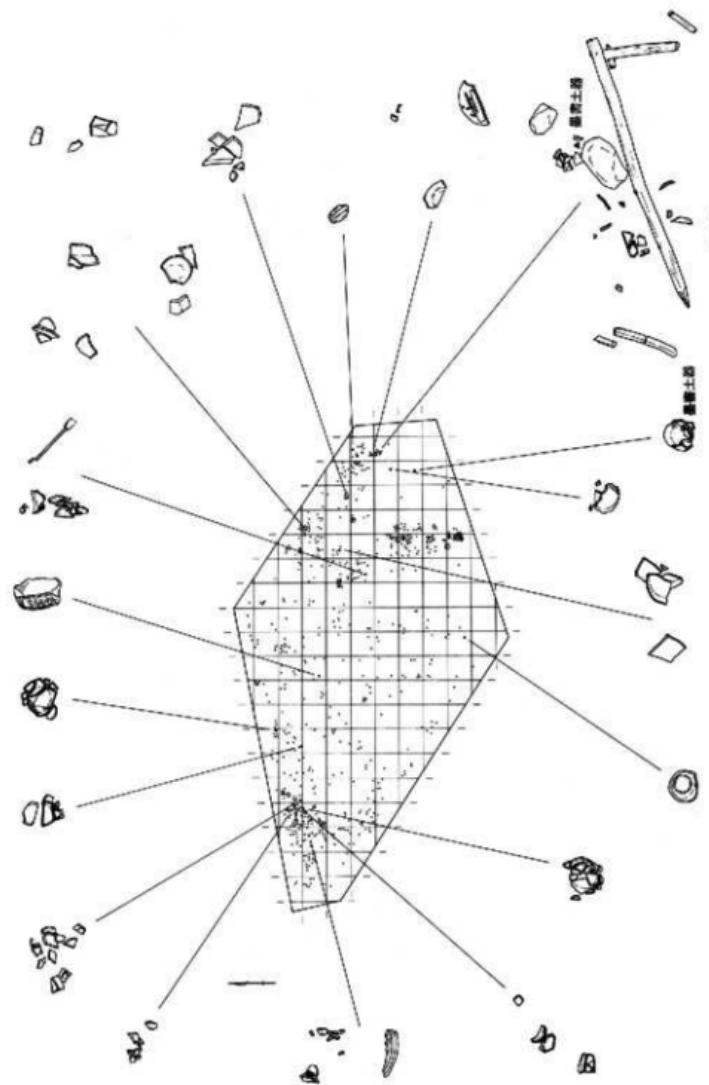
第499図 SR1002灰色粘質土層出土遺物実測図



1 灰オリーブ色7.5Y5/2粘質土(粘性あり)
2 灰色7.5Y5/1粘質土(①より粘性つよい)
3 オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土(鉄分を含む)
4 灰色10Y4/1粘質土(鉄分を含む)
5 増オリーブ灰色5GY4/1粘質土(鉄分を小量含む)

第497図 SR1002遺物分布状況（・土器・木製品）、土層実測図

第498圖 SR1002遺物出土狀況測量圖



第2層出土遺物（第500・501図）

第2層は緑灰色粘質土層で、黄灰色粘質土の下層、第14層にあたる（第5図、M-8・M-9トレンチ）。また第497図のAA-39グリッド土層図の第1・2層に対応する。出土遺物は調査区中央部より北側に集中する。

1845～1847は土師器皿で、1846は欠損するが高台が付くものである。1847は断面U字状の低い高台がつく。1848～1858は土師器杯である。1848～1855は口縁部が外反気味に立ち上がり端部を丸くおさめる。1856・1857は口縁部が内彎気味に立ち上がり端部を若干外反させるもので、椀口縁部の可能性もある。1857には内外面に赤色塗彩が施されている。1858は円盤状高台の杯で、体部は底部より直立し上部は外上方に内彎気味に立ち上がる。1859～1862は土師器高台付杯で1862は「ハ」の字状に開いた高い高台がつく。1863は土師器椀高台部、1864～1866は黒色土器A類椀で断面U字状の高台が付き、内面にはやや幅広の横方向のヘラミガキが施されている。1867は須恵器皿の口縁部で端部は若干水平方向に屈曲し尖り気味におさめる。1868は須恵器壺底部片で高台部は断面U字状を呈し、体部との境につく。1869は壺口縁部であるが体部との接合部は斜位をもち、多嘴壺の一部になる可能性が考えられる。1871・1872は須恵器甕体部片で体部外面には格子状タタキが残る。1873は土師器高杯の脚柱部で、8角柱を呈する。外面には赤色塗彩が施されている。1870は須恵器壺の体部片で底部の高台部は剥離している。1874は白磁碗片で高台は低く断面方形状に削り出しており、体部内面には沈線状の段が巡る。横田・森田分類のIV-1類にあたる。

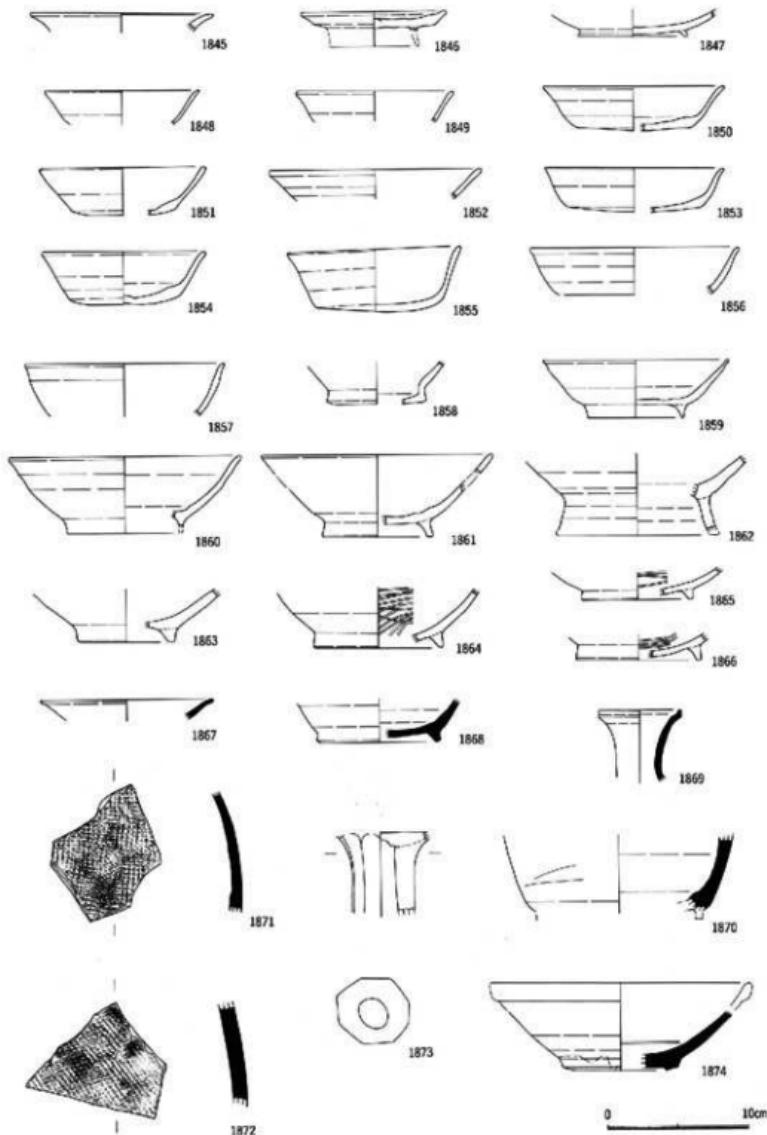
1875～1877は土師器釜で、直立する口縁部直下に水平方向に延びる鈎を巡らせるものである。1875・1876は口縁部上端および鈎端部を若干拡張する。1878・1879は土師器甕である。1878は体部直立気味で口縁部は外上方に屈曲し、端部を若干上方に拡張する。胎土には石英粒・長石粒および雲母を多く含んでいる。1880は竈片と考えられるもので、端部は方形状におさめ外面には荒いハケが施されている。

1881は須恵質の平瓦片、1882・1883は須恵質の軒平瓦である。1882は瓦当面外区には斜格子文、内区には均整唐草文が施され、かんぞう庵寺出土瓦と同範ないしは同型である。1883は外区に珠文、内区に唐草文が施され、金光明庵寺出土瓦と同範ないしは同型と考えられる。

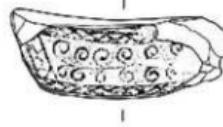
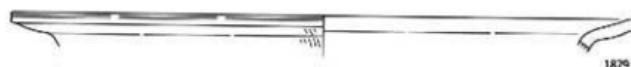
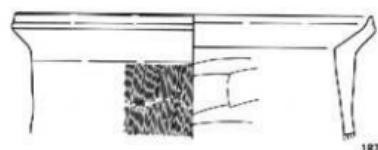
第3層出土遺物（第502図）

第3層は灰色系統の粘質土で、M-8トレンチでは第15層、M-9トレンチでは第17層、M-10トレンチでは第13層が対応する（第5図）。また、AE-40・41グリッドでは第3・4層、AE-44グリッドでは第3層、AE-44グリッドでは第3層が対応し、この層には多量の木製品が含まれている（第497図）。

1884・1885は土師器杯で、1884は外底面に「當全」か、墨書きされている。また、外底面以

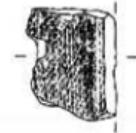
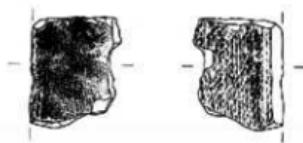


第500図 SR1002第2層出土遺物実測図(1)



1880

1882

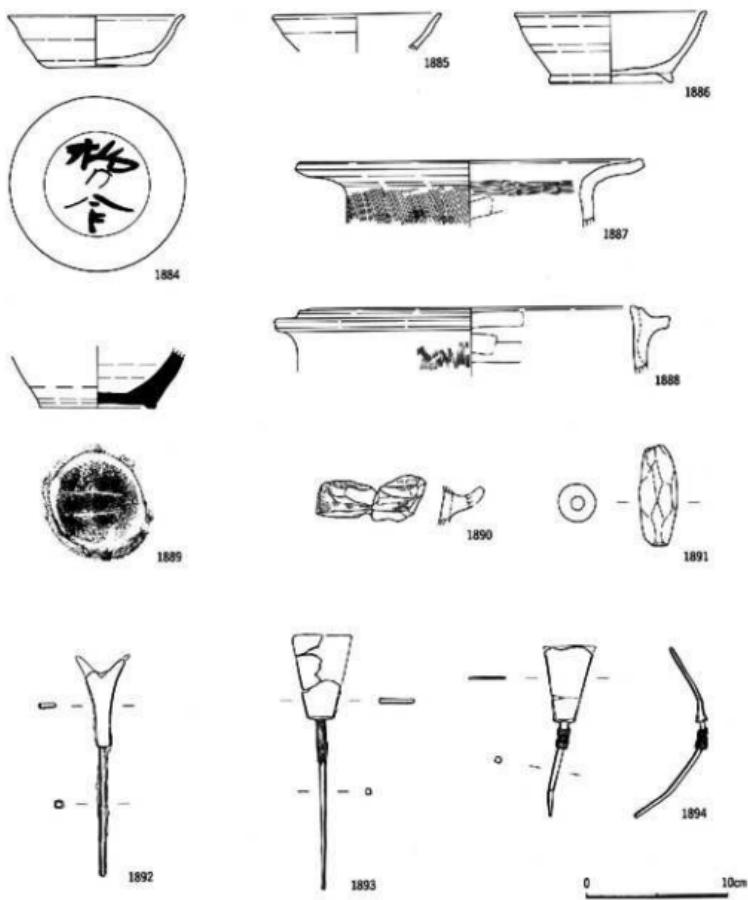


1881

1883

0 10cm

第501図 SR1002第2層出土遺物実測図 (2)



第502図 SR1002第3層出土遺物実測図

外全面に赤色塗彩が施されており、刷毛塗りの痕跡が明瞭に残る。AE-45グリッド出土。1886は土師器杯で底部に断面U字状の高台がつくものである。1887は土師器壺である。口縁部は外方に大きく屈曲し端部は若干拡張ぎみで方形状におさめる。2次掘削時に出土した土師器壺と同一個体である。1888は口縁直下に断面方形状の鉤が巡る土師器釜である。1899は須恵器壺の底部片で、外底面には「ヰ」が刻書されている。1890は土師器鍋の把手で、平面形状

は三角形状を呈する。1891はやや大型で土師質の管状土錐である。

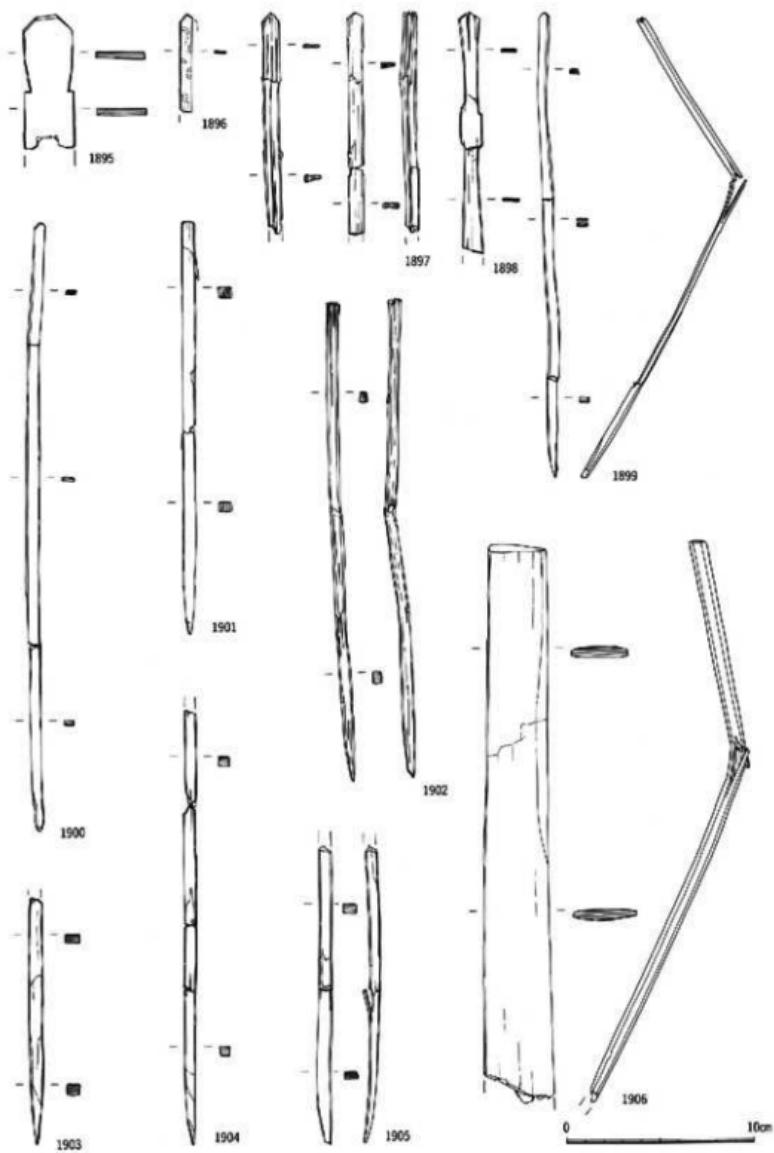
1892～1894は鉄錐である。1892は雁又錐で先端部は欠損する。残存長は15.4cmを測る。AD-42グリッド出土。1893は方頭錐で茎部には木質が残存する。錐身部の長さ6.0cm、茎部は0.4cm角前後で長さ12.2cmを測る。AC-41グリッド出土。1894は方頭錐でほぼ中央から緩やかに折れ曲がる。錐身部長5.3cmを測り、茎部には桜皮状の巻紐が残る。AE-41グリッド出土。

第1群出土遺物（第503・504図）

第1群は AD・AE-42・43グリッド、径約6.0m範囲において検出した木製遺物群で若干の土器を伴っている。検出した層位は AE-40・41グリッドでは第3・4層で層厚は約0.30m前後を測り、主に第4層の暗青灰色粘質土に集中する（第497図）。



第503図 SR1002第1群木製品出土状況実測図



第504図 SR1002第1群出土木製品実測図

出土した遺物は約100点前後で、現地で出土地点を確認し得たのは木製品約60点余りである。1895は人形で体部から下半を欠損する。形状は頭頂部を平坦に成形し、頭部から肩にかけては若干斜めに切り込む。肩部は水平方向に切り込むことによって怒り肩を呈している。腕および脚部の形状は不明である。顔の描写は確認できない。1896は板状木製品で上端部を圭頭状に成形したもので斎串の可能性が考えられる。また、片面には墨書状の文様が確認できる。1897は削り掛けは施されていないが斎串と捉えたもので、頭部を圭頭状に成形している。また、上端部からは切り裂かれており上半部は4枚に分かれている。1898は上端部を圭頭状に、削り掛けは両側辺に上下から施されている。「図録分類」のC V形式にあたる。1899～1905は串状木製品で、上端部を圭頭状に下端部を剣先状につくるものである。1899・1900は完形品で、1900は長さ32.5cmを測る。また、1903と1904は接合する可能性があり、接合すれば串状木製品の形状は両端部を鋭く尖らせたものがあったことが考えれる。出土した串状木製品は全て中央部付近および数ヶ所で折られており意図的な様相が伺えられる。1906は板状木製品で、幅3.3cm前後、厚さ0.6cmで丁寧に成形されている。

第2群出土遺物（第505～507図）

第2群として捉えた範囲および遺物は第1群の南側約3.0mの位置で、径約4.0m前後でまとまりをもつ。出土した遺物は約30点前後であるがここでは斎串が折り重なるように集中して出土しており、完形の斎串数点が確認できた。出土層位はほぼ第1群検出層位と同位で、AE-40・41グリッドの第3層（灰色粘質土）・第4層（暗青灰色粘質土）の2層である（第



第505図 SR1002第2群木製品出土状況実測図

497図)。

1907は土師器杯で口径18.0cmを測るもので、口縁部は外方に立ち上がり端部は若干外反させた後、上方に拡張する。口唇部内面には沈線状の凹線が巡る。

調整は口縁部ヨコナデで、外底面は丁寧なナデ調整である。また、全面に赤色塗彩が施されている。

1908は須恵器甌口縁部で、口縁上端部は丸くおさめ、下端部は若干下垂させ端面を形成する。

1909～1921は斎串および斎串の体部片で、1913～1915は完形である。

1909は頭部を圭頭状に成形し、削り掛けは両側辺上端から1ヶ所1回のみ施されるもので、「図録分類」のC II型式にあたる。

1910・1912～1918は頭部を圭頭状に成形し、両側辺の削り掛けは上下から2ヶ所に数回にわたり施されるものである。C V型式に分類される。この中で、やや幅広につくるもの1915～1918と1913・1914のように上下の削り掛けを長く削りだし細身に成形するもので、長さ約36.0cmを測る大型のものがある。

1913・1914はほとんど長さ形とも同形状で、削り掛けの部位および幅も同一である。また、1910も頭部形状など同一と認められる。

樹種鑑定の結果、1910・1912～1914はコウヤマキで、その他は全てヒノキ材が使用されていることから考えて1910・1913・1914は同一形状に成形された厚手の板材から3枚に切り裂いて作った可能性が高いものと考えられる。

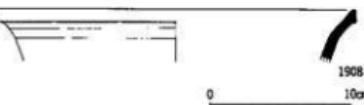
第3群出土遺物(第508～513図)

第3群は第2群の南約5.0mの地点、AG-42・43グリッドで検出した木製品の集中区で、南側矢板沿いに掘られた溝掘りの遺物も含め広がりは径約3.0mを測る。

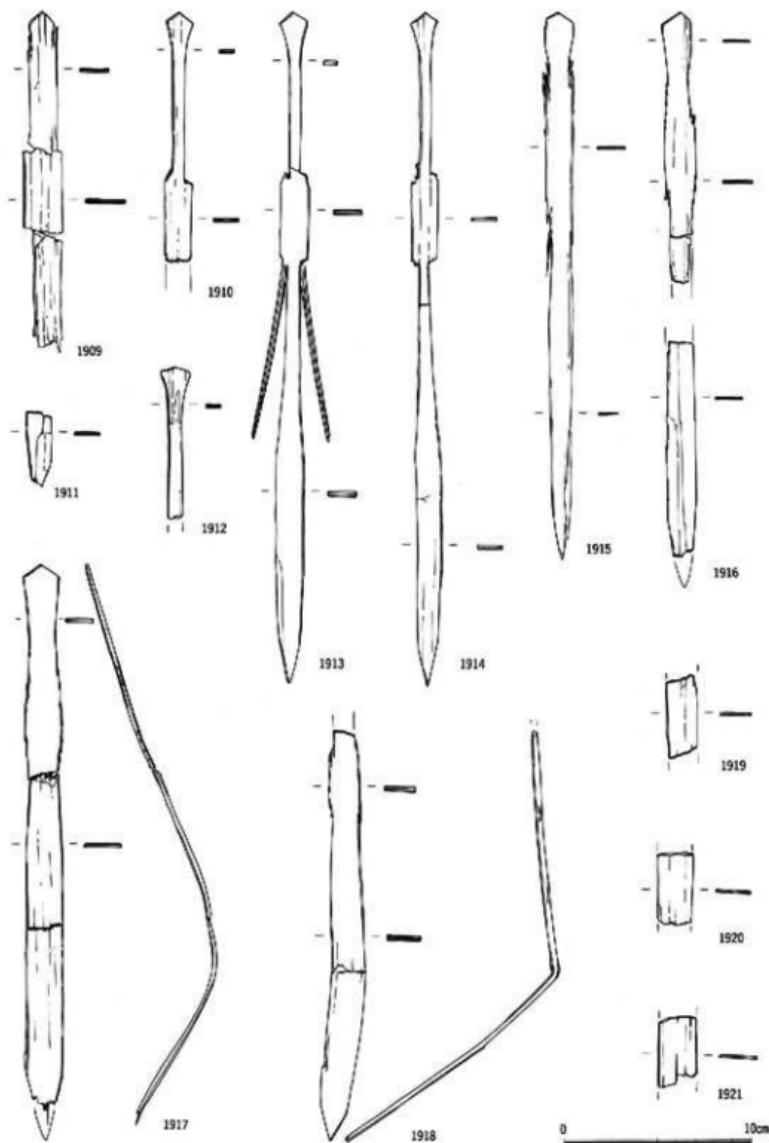
出土状況はある程度のまとまりが見られるが、完形に近いものは比較的少なく断片的なものがほとんどである。

出土層位はAE-44グリッドの第3層(灰色粘質土)にほぼ対応する(第497図)。

出土遺物は若干の土器類を含むものの、ほとんどが斎串および串状木製品で、出土した遺物の点数は約70点前後を数える。また、3群からは約5.0m西側(AG-41グリッド)でほぼ完形に近い檜扇が単独で出土しているが、同一層(灰色粘質土)または同レベルであることから併せて記載する。



第506図 SR1002第2群出土遺物実測図



第507図 SR1002第2群出土木製品実測図

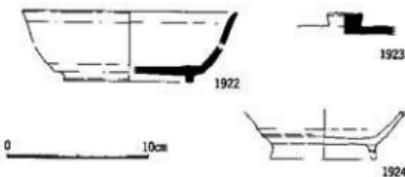
AF-42
AG-42



0 1 m

第508図 SR1002第3群木製品出土状況実測図

1922は須恵器杯で、断面方形を呈した高台が体部との屈曲部よりやや底部内側につく。口縁部は若干外反気味で端部は尖り氣味におさめる。1923は須恵器杯蓋で、断面方形のやや高いつまみがつくもので、天井部は平坦である。



第509図 SR1002第3群出土遺物実測図

1924は土師器高台付杯で、体部はやや直線的に外上方に立ち上がるるものである。高台部は低い断面方形を呈する。

この他、赤色塗彩が施された土師器杯片・土師器壺片が若干出土している。

1925～1957は斎串で、全て欠損あるいは中央部で折れており完形品は少ない。形態的には1925～1937は剣先部も含まれるが、頭部を圭頭状に成形し削り掛けを両側辺の上下2方向から数回にわたり施すもので「図録分類」C V型式に分類される。このうち1925は完形品であり、長さ21.5cm、幅1.0cm前後と比較的小型のものである。

1938～1948の頭部片は両側肩部上端から下方に1ヶ所、1回の削り掛けを施すもので、C III型式にあたる。この中で、1940は頭部上端から切り裂かれており、切り裂きは中位下半までおよぶ。1945は数回の削り掛けを施した可能性も考えられる。1949～1957は斎串の頭部・剣先部片である。

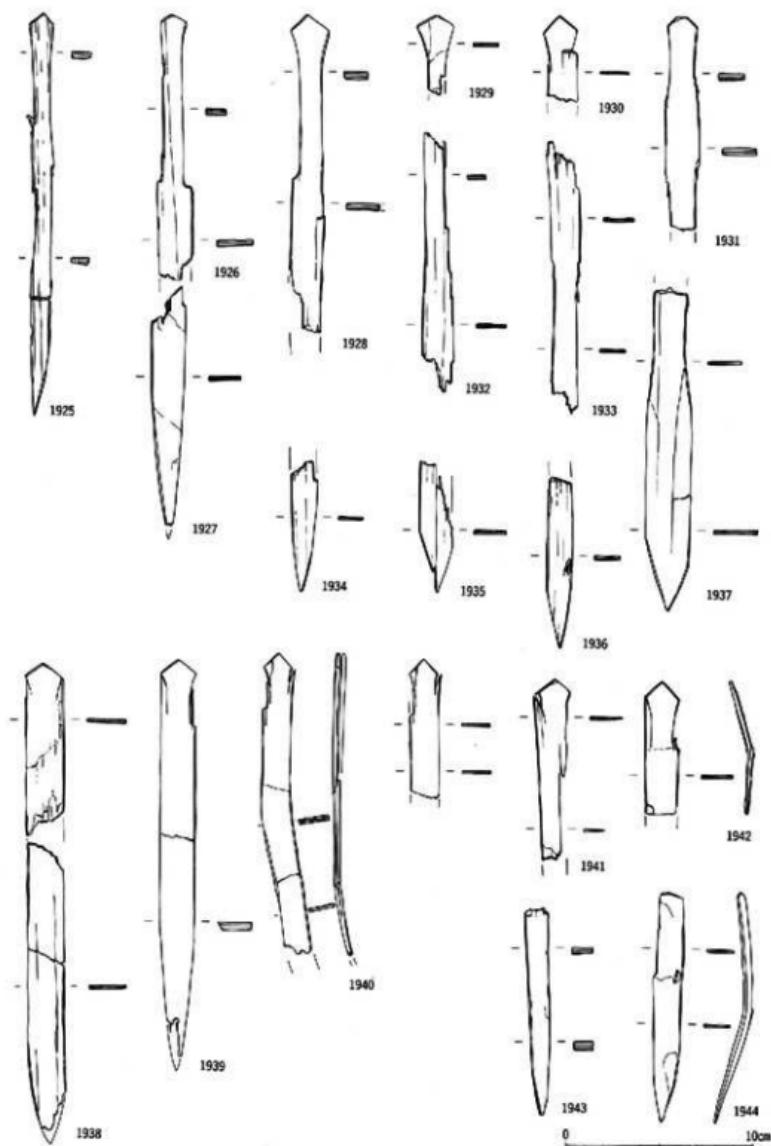
1958～1976は串状木製品で、断面形状は方形あるいは偏平な方形を呈し下端部を尖らせたものである。上端部の形状は1958に見られるように圭頭状に成形するものと考えられる。串状木製品は斎串と同様に全て欠損あるいは折られているものである。

1977～1978は棒状の木製品で、上端部を山形に、下端部を尖り氣味に成形したものである。また、上端部からやや下がった位置に切り欠きを施しており1977は一面に2段、1978は1ヶ所を表裏対に施している。この切り欠きを施した同形態の棒状木製品は黒谷川宮ノ前遺跡第16層（県教委調査）から数点出土している。この形態のものは黒崎氏分類⁽²⁰⁾の斎串F類に分類されるものである。

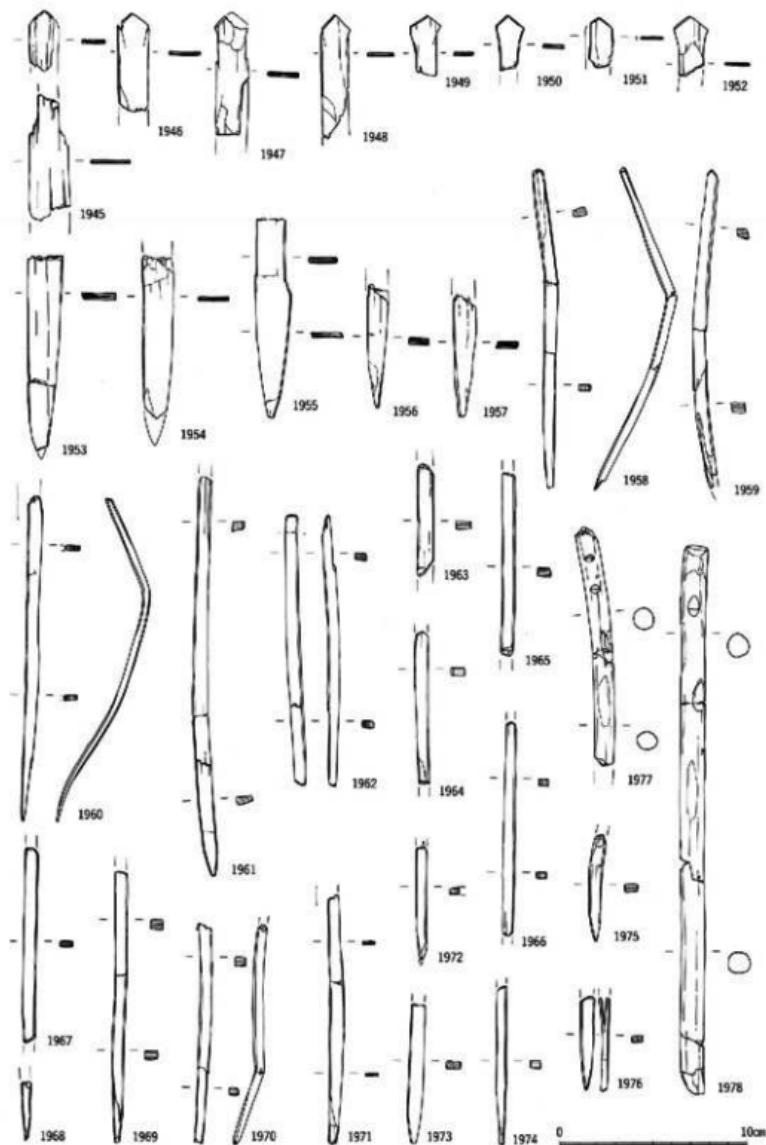
1979～1991は檜の薄板を用いた檜扇の骨板で、総数13枚出土した。檜扇は13枚が一束に閉じた状態で出土しており、その内4枚がほぼ原形をとどめている。

形状は骨板の末部分が開く形で、上端部を平坦に、本の下端部は半円形に成形するものである。

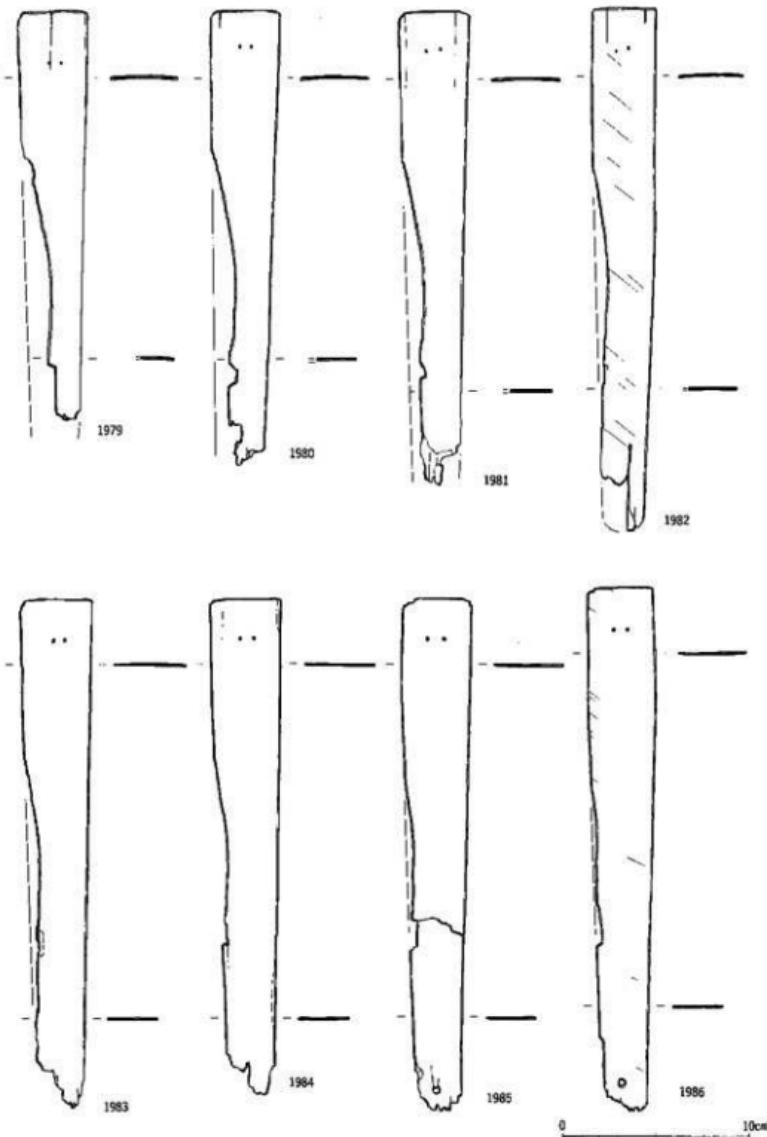
完形部分での計測値は長さ28.2cm、末部分での幅3.45cm、要部分での幅2.4cmを測り、厚さは0.1～0.2cmで、末部分に向かって若干薄くなる。下端部から1.8cmの位置に要の孔があり径0.3cm程度を測る。また、末上端部から2.3cm下がった位置に0.8cm間隔で約0.1cm程度の糸綴



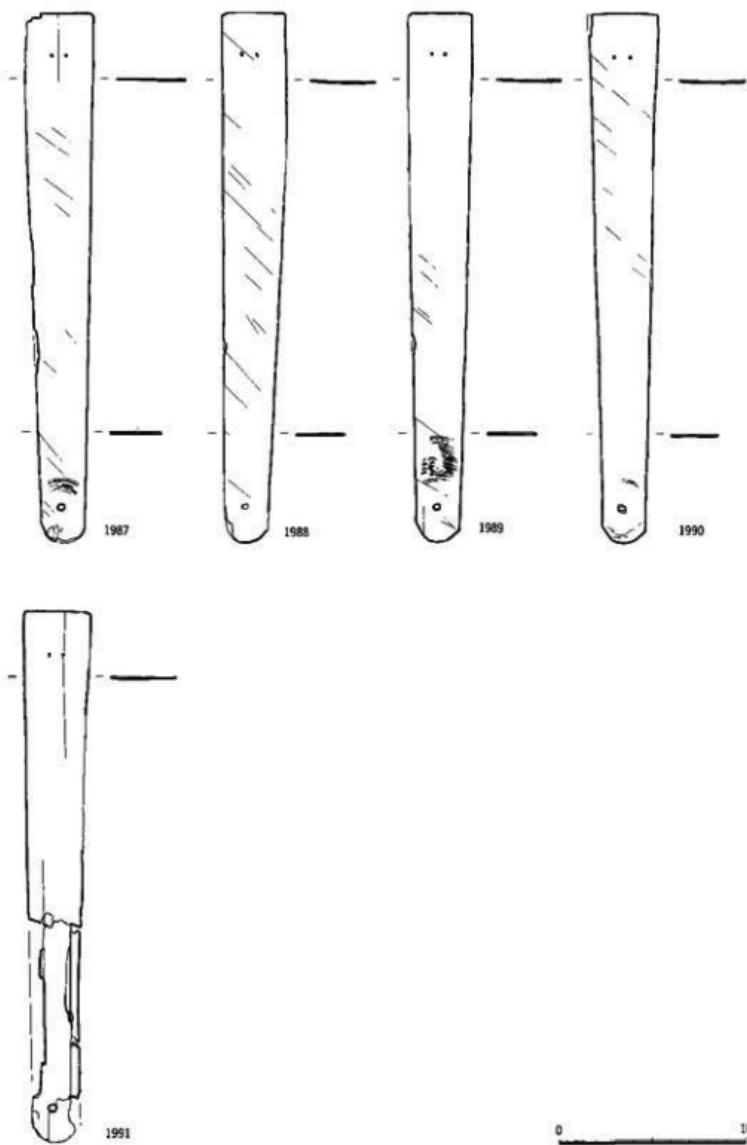
第510図 SR1002第3群出土木製品実測図 (1)



第511図 SR1002第3群出土木製品実測図 (2)



第512図 SR1002出土木製品（槍鶴）実測図（1）



第513図 SR1002出土木製品（槍扇）実測図（2）

じ孔が2ヵ所あけられている。

末部での断面形状は1979～1983が「一」、1984～1991が「一」を尾し1983・1984であわせが逆転することからこの部分が扇の中心部になるものと考えられる。1987・1989・1990の要部のまわりには開閉時に生じたと考えられる半円形の擦痕が認められる。

第4群出土遺物（第514・515図）

第4群は第1群～第3群が近接した位置にあるのに対して第1群から約20m北東側、AC-45グリッドを中心に検出したものである。

第4群では土器類を中心としており、木製品では斎串等祭祀具はほとんどなく曲物など容器等が若干出土しているのみである。出土層位はAE-44グリッドの第3層にほぼ対応する（第497図）。

1192～1994は土師器皿である。1992は口縁端部を外反させ尖り気味におさめるもので、第2層からの出土である。1993は口縁端部を内側に丸く拡張する。1994は底部丸底気味で口縁部は緩やかに外上方に立ち上がる。

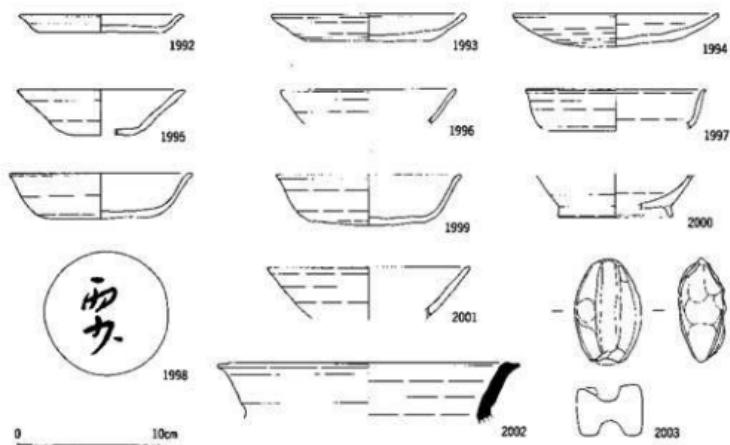
1995～1999は土師器杯で1995・1996は第2層、その他は第3層出土である。

1995は小さい底部に外上方に直線的に延びる口縁部を有するものである。1996は口縁部が外上方に直線的に延び端部を丸くおさめるもので、内外面には赤色塗彩が施されている。1997は口縁部が若干直立気味に立ち上がるもので、端部を若干外反させ尖り気味におさめる。調整は口縁部内外面ヨコナデ、外底面静止ヘラケズリである。1998は外底面に「カ」状の文字が縦に2文字墨書きされている。口縁部は外上方に立ち上がり端部を若干外反させるものでほぼ完形に復元される。内外面は全面、外底面は約半分程度にわたり赤色塗彩が施されている。彩色の状況および技法は1884の墨書き土器杯と同様である。1999は口縁部の形状および法量的には1998とはほぼ同一であるが、赤色塗彩は施されていない。

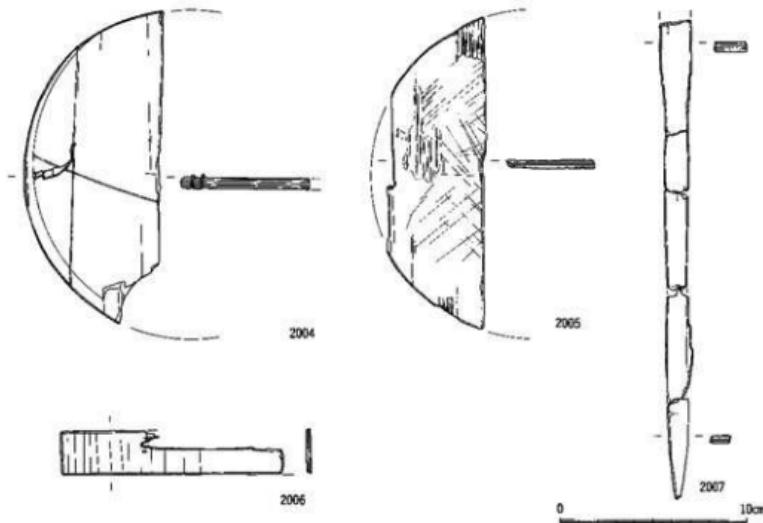
2000は土師器の高台付杯で、高台部の形状はやや細身で、断面方形状を呈する。第2層出土である。2001は口縁部が若干内彎気味に立ち上がるもので、椀形態を示すものと考えられる。

2002は須恵器甕口縁部で口縁端部を外方に拡張し、上端面を平坦に成形するものである。2003は有溝土鍤で、断面形状はH形を呈する。

2006は曲物の蓋板で、内面には円形の刻線および側板を固定するための樺皮の樹皮が残る。2005は曲物の底板で、内面には不定方向への刻線が無数に施されている。2006は曲物の側板で、内面には縱方向への刻線が施されている。2007は斎串で、上端部を欠損する。削り掛けは両側辺に下方から数回にわたり施されており、「図録分類」のC V型式にあたるものと考えられる。



第514図 SR1002第4群出土遺物実測図



第515図 SR1002第4群出土木製品実測図

各グリッド出土遺物（第516～518図）

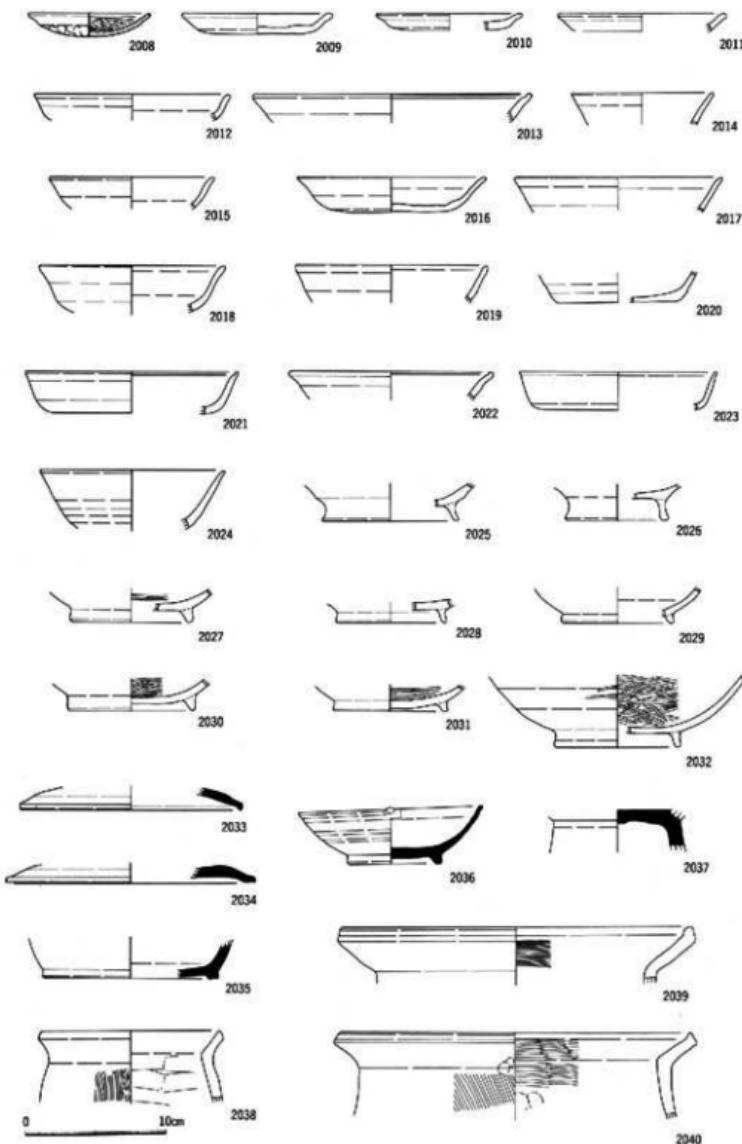
2008～2052は出土層位の不明なものである。2008は瓦器小皿で、内面に幅広のヘラミガキが施されている。機械掘削時に出土したもので、第11層より上層からの出土である（第5図）。

2009～2012は土師器皿で、2012は内外面とも赤色塗彩が施されている。2013は口徑20.0cm前後を測る土師器皿である。口縁部は短く外上方に立ち上がり、端部は若干上方に拡張し丸くおさめる。内外面には赤色塗彩が施されている。2014～2023は土師器杯である。2021・2022の口縁部は外上方に立ち上がり端部を若干上方に拡張し、口唇部内面には浅い沈線が巡る。2014・2017・2020～2023は内外面とも赤色塗彩が施されている。2024は土師器碗口縁部で外面には黒色有機物が付着する。2025～2028は土師器碗底部片で2027・2028には内外面とも赤色塗彩が施されている。2029～2032は黒色土器A類碗で内面には緻密な横方向へのヘラミガキが施されている。

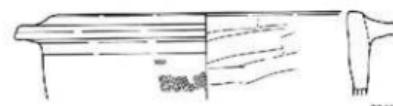
2033・2034は須恵器杯蓋で口縁端部を下方に屈曲させ、2033は尖り気味に、2034は丸くおさめる。1235は須恵器高台付杯で、体部との境に断面方形状の高台がつく。2036は綠釉陶器の高台付皿と考えられるが、須恵質で釉の発色は悪い。口縁部は内弯気味に立ち上がり端部は若干肥厚させ丸くおさめる。また、口縁端部には外面からヘラ状工具による押さえにより輪花状に形成する。底部は削り出しによる輪高台で、断面は方形状を呈する。篠塚庵で、前山2号窯期段階にあたるものと考えられる。2037は円面硯と考えられるもので、平坦な硯部と脚台の一部が残存するが透し孔は確認できない。脚部は張り付けである。2038～2040は土師器甕口縁部で口縁部は「く」の字状に屈曲するものである。2038は口縁端部を方形状におさめるもの、2039・2040は口縁端部を上方に拡張するものである。調整は荒いタテハケが施され、胎土には多量の砂粒が含まれている。2041・2042はいわゆる折津型釜で、口縁直下に水平方向に延びる断面方形状を呈する鋸が巡るものである。2043は内面にススの付着が認められるもので、土師器甕の据部として捉えたものである。端部は方形状におさめ、荒いタテハケおよびヨコヘラケゼリが施されている。同形態のものは旗見塙跡から出土しており報告書では翫口縁部としている。

2044は須恵器壺の底部で、断面方形状の低い高台が付く。2045・2046は須恵器甕の口縁部で、口縁上部は若干内弯気味に肥厚させ端部は方形状におさめる。2047～2049は須恵器甕の体部片である。2047・2048は体部外面に平行状タタキ、2049には格子状タタキが施されている。2050は須恵質の平瓦で凹面には布目窓、凸面には繩階文タタキが施されている。2051・2052は土師質の土錘で、2051は両端に穿孔をもつ棒状土錘、2052は管状土錘である。

2053・2054は横樋で、破損するが2054の高さは4.0cmを測る。型式的には平城宮分類A型式にあたり、肩部を角張らせるもの2053と、丸くおさめる2054に分けられる。2055は曲物の底板で、ほぼ中央部に2次的な加工と考えられる1孔を施している。また、内面縁周部に刻線



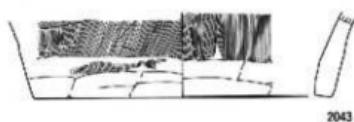
第516図 SR1002各グリッド出土遺物実測図 (1)



2041



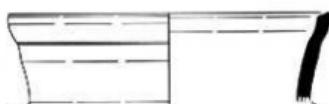
2042



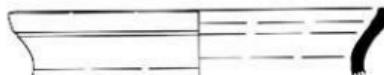
2043



2044



2045



2046



2047



2048



2049



2050



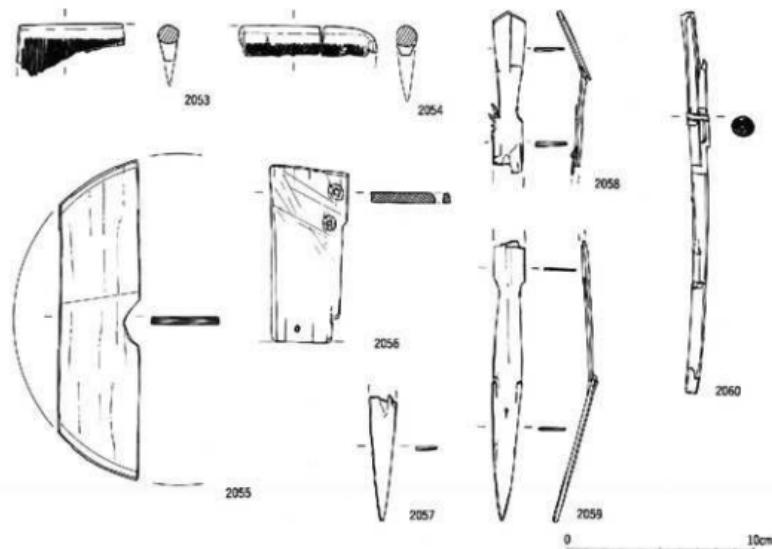
2051

0 10cm

2051

第517図 SR1002各グリッド出土遺物実測図 (2)

が巡る。2056は板材で、補修によると考えられる穿孔が2ヵ所施されている。2057～2059は簀申片である。2058は削り掛けを両側辺に上下2方向から数回にわたり施すもので「図録分類」のC V型式にあたる。2060は棹まき棒で、半裁した梢円形の棒状品を4本束ね0.3cm幅の棹皮によって巻き付けられている。

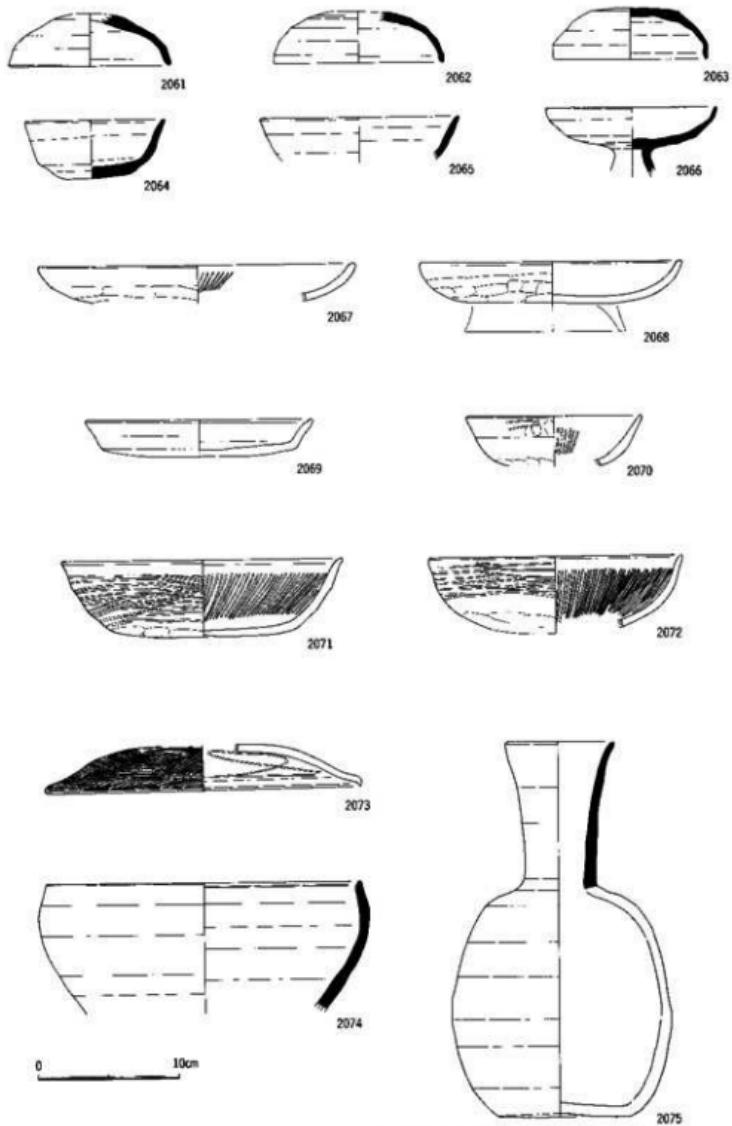


第518図 SR1002各グリッド出土木製品実測図

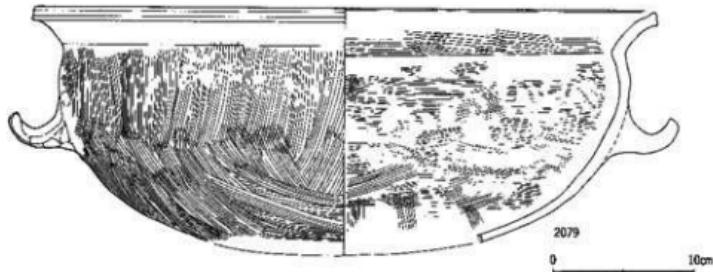
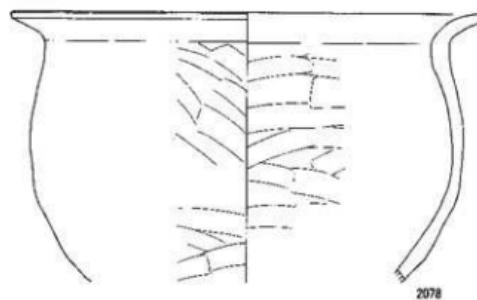
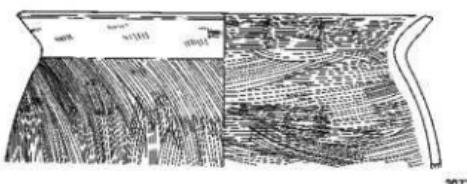
第2包含層出土遺物（第519～520図）

第2包含層として捉えた層位は簀申等を包含する第3層（M-8トレンチの14・15・16層対応層）の下層において検出したものである。M-9トレンチでは無遺物層の第18層暗オリーブ灰色粘質土下層第20層のオリーブ黒色粘質土にあたり、検出した包含層の広がりはAC～AE・40～43グリッドの比較的狭い範囲および調査区北東隅の一部である（第5・497図）。2061～2063は口径11.0cm～12.0cm前後を測る須恵器杯蓋で、口縁部は若干屈曲する。2064・2065は須恵器杯で口縁部は外上方に直線的に立ち上がる。2064の底部はやや平底気味である。2066は須恵器高杯である。杯部は浅い皿状を呈し、脚部は据部が開く円柱状を呈するものと考えられる。時期的には田辺昭三編年のTK-46・47段階と考えられる。

2067・2068は土師器皿である。口縁部は底部から緩やかに立ち上がり端部は丸くおさめる。調整は外面口縁部上半はヨコナデ、下半から底部は手持ヘラ切りである。2067には放射状暗



第519図 SR1002第2包含層出土遺物実測図 (1)



第520図 SR1002第2包含層出土遺物実測図 (2)

文が施され、2068には高台の剥離した痕跡が残る。2069は土師器皿で、口縁部は底部から外上方に屈曲し口縁端部を上方に拡張するものである。時期的には新しく第1包含層の遺物と考えられる。2070～2072は土師器杯である。2070は口径12.3cmを測るもので、外底面ヘラケズリ、口縁部外面横ヘラミガキ、内面放射状暗文が施されている。2071の口縁部は外上方に立ち上がり、端部を若干外反させ丸くおさめるものである。調整は口縁部外面2段の横ヘラミガキ、内面は1段の放射状暗文および内定面には螺旋状暗文が施されている。外底面はヘラケズリである。2072の底部はやや丸みをもつもので、口縁部は内彎気味に立ち上がり端部を丸くおさめる。調整は底部外面ヘラ切り、上半部ヨコヘラミガキで内面には放射状暗文が施されている。胎土は若干の石英粒・砂粒を含み精良なもので、色調も赤褐色を呈することから搬入品の可能性が考えられる。2073は土師器杯蓋で、天井部は若干丸みをもち、口縁端部は下方に屈曲させ尖り気味におさめる。外面には綿密な分割ミガキ、内面には螺旋状暗文が施されている。土師器の時期については2067・2068が飛鳥III前後、2071が平城宮I前後、⁽³⁾2072が飛鳥III前後と考えられる。

2074は須恵器鉢で底部は尖底気味におさめるものと考えられる。口縁部はやや直立気味に立ち上がり端部は尖り気味で口唇部内面には弱い沈線が巡り段を形成する。2075は丸みをもつ長胴形の須恵器壺で、外上方に聞く頸・口縁部を有する。焼成は須恵器と考えられるがやや軟質で、外面は黒色を帯びる。2076は横瓶で、梢円形の体部中央に外上方に聞く口縁部をもつもので口縁端部は若干上方につまみ上げる。調整は外面格子状タタキ後カキメ、内面は同心円状の当て具の痕跡が残る。2077・2078は土師器壺の体部から口縁部で、口縁部は外上方に屈曲し端部は方形状におさめる。2077は体部外面タテハケ、内面ヨコハケ調整で、2078は内外面とも強いヨコナデ調整である。2079は把手付土師器鍋で半球形状の体部で、口縁部は若干外反し、外端面はヨコナデにより端部は僅かに拡張する。把手は三角形状で、U字状に端部を屈曲させ体部のほぼ中央部に貼り付けられている。

第2包含層の年代はほぼ飛鳥II段階から平城宮II段階前後におさまるものと考えられる。

注

- (1) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- (2) 年代については片桐孝浩氏のご教示による。
- (3) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『奈良國立文化財研究所創立30周年記念論文集 文化財論叢』同朋社 1982
- (4) 前掲注(3)文献
- (5) 尾上 実「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古希記念古文化論叢』1983 以下、和泉型瓦器 挿の緒年はこれに準ずる。

- (6) 間壁忠彦「備前」「世界陶磁全集3(日本中世)」小学館1977 以下、備前焼の編年について
はこれに準ずる。
- (7) 上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究No.2』1982
- (8) 森田勉「14~16世紀の白磁碗の分類」『貿易陶磁研究No.2』1982
- (9) 横田賛次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』
四 1978
- (10) 小野正敏「15~16世紀の染付碗、皿の分類とその編年」『貿易陶磁研究No.2』1982
- (11) 前掲注(1)文献
- (12) 「中島田遺跡・南島田遺跡、県道鶴鳥鷺鳥線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」徳
島県教育委員会 1989
- (13) 萩原正明「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告 第19集』1989
では、伯耆・山城型に類似する。
- (14) 前掲注(13)文献
- (15) 片桐孝治「製紋十瓶山窯製品の流通について」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研
究会 1992
- (16) 「福岡県内出土の窯について一分類と編作に関する一試案一」『九州歴史資料館研究論集9』
1983
- (17) 前掲注(9)文献
- (18) 辻 佐仲「前田遺跡の在地生産瓦器について」『前田遺跡・四国縦貫自動車道建設に伴う埋
蔵文化財調査報告2』徳島県教育委員会 1993 では在地産瓦器をI類・II類に分類してお
り、底部回転系切り痕をとどめる瓦器小皿はII類に分類される。
- (19) 佐藤昭嗣「草戸千軒の天目碗」『草戸千軒、調査研究ニュース 第15巻 No.168』広島県草戸
千軒町遺跡調査研究所 1988
- (20) 前掲注(13)文献
- (21) 前掲注(12)文献
- (22) 森田 稔「東播磨」「東日本における古代・中世窯業の諸問題」大戸窯検討のための「会津
シンポジウム」資料 1992
- (23) 「平城宮発掘調査報告Ⅳ」奈良国立文化財研究所 1976
- (24) 「木器集成図録」近畿古代編「奈良国立文化財研究所 資料第27冊」奈良国立文化財研究所
1985
- (25) 「中世の呪術資料」「第4回中世遺跡研究集会」資料 1984
- (26) 「黒谷川宮ノ前遺跡、黒谷川中小河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」徳島
県教育委員会 1993

- (27) 浪花勇次郎「阿波國古瓦拓本集」1973
「歴史時代の徳島市—阿波の古瓦—」徳島市教育委員会 1982
軒半瓦188も同文献による。
- (28) 黒崎 壱「斎寧考」「古代研究 第10号」1977
- (29) 「縹跡群II、京都府遺跡調査報告書 第11回」財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
- (30) 「若狭・近江・阿波における古代生産遺跡の調査」「同志社大学文学部考古学調査報告 第4冊」同志社大学文学部文化学科 1971
- (31) 前掲注(23)文献
- (32) 古代の土器2『都城の土器集成』古代の土器研究会1992 の基準資料を参考。また、
2070~2072の土器については林部均氏のご教示を得た。

(2) 第1遺構面小結

第1遺構面は標高約3.5m前後の微高地上に位置し、東西および南端を自然流路1・2(SR1001・1002)によって分断されることから、微高地南西隅を占地するものと考えられる。検出した遺構は、東西方向に190m、南北方向50mにわたりほぼ全面において分布し、遺構は古墳時代および古代から中世にわたる。

各時期における遺構・遺物については前項で記述した通りで、古墳時代後期・奈良～平安時代および過渡期を含めて第I期、中世(13世紀～16世紀前半)を第II期として整理した。その結果、微高地上での遺構の形成は奈良時代以降、平安時代以降が中心で、中世では溝による方形区画敷地の形成以後、区画内での遺構数は増大する傾向がみられた。

本遺跡での遺構数は多数を検出したが、掘立柱建物の復元は50棟にとどまった。検出した遺構は各時期において屋敷地ごとのまとまり、及び規則性を示すものが存在する。そこで、掘立柱建物については各時期において様相についてまとめ、集落の変遷について若干のまとめを行いたい。

掘立柱建物についての時期は柱穴内の僅かな遺物によって存続時期の決定は困難であるが、それぞれの建物には方向性に一致するものがみられ、また溝等の遺構との関連も一つの視点と捉え整理を行った。

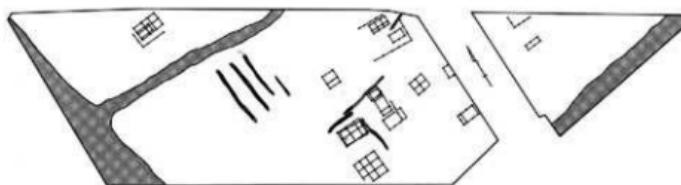
建物の方向性および遺物から第I期を小2期に、第II期を小2期の計4小期に分けて整理する(第521図)。

第I-①期(9・10世紀～12世紀代)

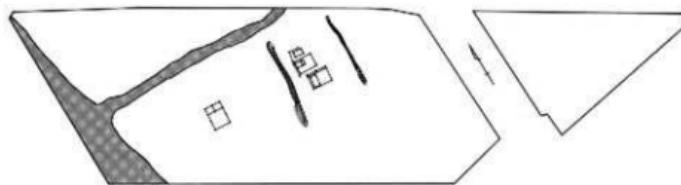
当該期における掘立柱建物および各遺構の形成は1・2分割調査区の東寄りに集中する。当該期における検出した掘立柱建物はSB1002・1003・1004・1005・1006・1007・1008・1012・1019・1020・1021・1022・1025・1037・1043・1046・1049の17棟である。このうち柱穴から出土した遺物より時期的におさえられるのはSB1002が12世紀代、SB1003・1004・1007・1022が黒色土器甕および土師器杯などから9世紀～10世紀代。SB1025は和泉型瓦器椀のII-2段階で12世紀中頃に比定できる。

この段階の建物は棟方向を別にすれば、ほぼ真北から8°前後西偏するもので、ほぼ同時期、10世紀代と考えられる溝はSD1007・1008・1013・1016で、南北溝はほぼ真北から8°前後西偏し、東西溝は南北溝に直交する方位を示す。

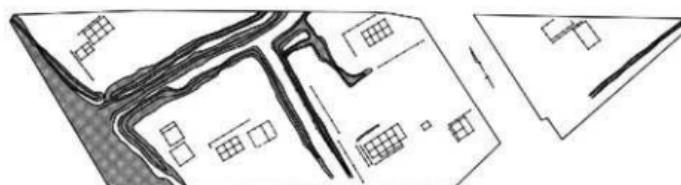
この時期には溝のSD1003を併せて図示している。当溝は方向性から見るとほぼ東西を示



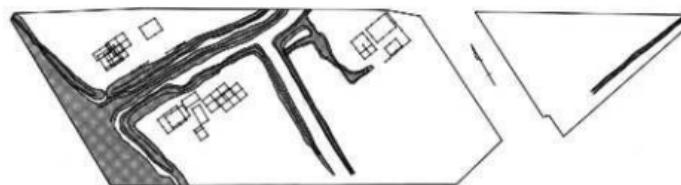
第 I -①期



第 I -②期



第 II -①期



第 II -②期

0 20 40m

第521図 黒谷川宮ノ前遺跡遺構変遷図

し次期の中世段階の溝とほぼ平行し、また前記の土層堆積状況および出土遺物からも中世(13世紀後半以降、16世紀前半頃まで)の流路と捉えられるが、自然流路1(SR1001)との合流地点(吐き出し口)の最下層(自然流路1の第8層)には9世紀後半から11世紀前後の大量の遺物が出土していることから中世段階の掘削の前段階に東西方向に延びる溝が存在していた可能性が考えられる。

第I-②期

当時期は第I-①期からII-①期(13世紀代)への過渡期に相当するものと考えられる。この時期の溝状構造ではSD1010・SD1015(第II期溝に記載)があり、各溝とも13世紀以降の遺構によって切られており溝の方向性は真北より5°前後東偏するものである。

この溝と平行す掘立柱建物はSB1009・1010・1011・1013・1014・1027がある。

溝内からの出土遺物には若干新しい遺物も含まれるが、切り合い関係から区画敷地形成以前の溝で、また建物と捉えられる。当該時期に形成された建物群は小規模である。

第II-①期

当該時期は建物の棟方向はほぼ真北および東西を示す。これら建物のもつ方向性は屋敷地を区画する溝SD1001・1002・1004および1006とほぼ平行し、また建物も各屋敷地内でまとまりを見せていている。1号屋敷地ではSD1006に区画された建物SB1017と溝SD1001に区画された建物SB1001が見られる。また、2号屋敷地では溝SD1002に区画された建物群SB1026・1031・1032・1056が、3号屋敷地ではSB1039・1040が確認される。4号屋敷地ではSB1047・1048が見られる。

この時期の建物の特徴はほとんどの建物に柵列を伴っていること、また2号屋敷地および3号屋敷地では溝SD1003側の区画溝からやや離れた屋敷地中央部付近に建てられている点が挙げられる。

建物の時期は建物および柵列の柱穴から出土した和泉型瓦器挽から尾上編年のIII-2期にあたり、第II-①期は概ね鎌倉時代前半(13世紀前半から中頃)と捉えられる。

なお、区画溝であるが溝内からは13世紀代に掘削時期を求める積極的な遺物は無いが各建物および柵列が溝を意識した形で建てられていること、また建物が各ブロックを形成することからほぼ当該時期の間に区画を意識する屋敷地の形成が行われたものと考えられる。

また、各区画溝であるが、これら溝は明らかに溝SD1003の灌漑用水路と関連しており、溝SD1003の再掘削とともに区画の方向性も規制されたものと捉えられる。

第II-②期

当時期の建物群はほぼ前時期と同様に各区画溝の跡襲とともに区画敷地内でまとまりを見せている。

検出した建物は、1号屋敷地ではSB1015・1006・1008が柵列SA1010によって東側が区画され一屋敷の建物配置が見られる。2号屋敷地では屋敷地中央部より北寄り、溝に面して建物SB1028・1029・1030・1033・1034・1035・1036が見られる。また、3号屋敷地では2号屋敷地と同様に南側区画溝に面して建物SB1038・1041・1042・1044・1045が建てられる傾向が見られる。4号屋敷地においては掘立柱建物は検出されなかった。

第II-②期は建物の柱穴から出土した遺物および区画溝から出土した遺物等から14世紀～16世紀前半までの間、(区画溝の埋没によって屋敷地の消滅するまでの間)に設定される。

黒谷川宮ノ前遺跡における各期の建物群の変遷は第I-①期段階では調査区中央部において集中する。しかし、各建物の配置には規格性は見られず、また包含層および自然流路から多量に出土した官衙に伴うと考えられる遺物群の出土にかかわらず8世紀から9世紀代の官衙的および関連施設を示す掘立柱建物がみられないことは、建物群が調査地より北側に存在するか、またこの段階から以後の削平等によって遺構が消滅した可能性も考えられる。

第II期への過渡期には建物は数棟に激減する。そして、第II-①期(13世紀代)には各建物が柵を伴い独立して存在し、またSB1001の様に根石を伴った総柱建物が現れている。また、この時期には各建物がある程度のまとまりを見せることから屋敷地を区画する溝が存在した可能性が考えられる。この段階の屋敷地を区画する溝については中島田遺跡⁽¹⁾で検出された溝SD205・206・219が考えられ、時期的にも13世紀後半代から14世紀が与えられることから当遺跡の区画溝も13世紀半ば以降と捉えておく。

次期の第II-②期(14世紀～16世紀前半)には明確な区画溝が存在する。建物群は1・2号屋敷地でみると前時期が屋敷地の中央部に位置するのに対して区画溝寄りに集中し、2号屋敷地では南側に、3号屋敷地では北側に広い空き地を構える様になる。その後、区画溝の埋没する16世紀前半以後は掘立柱建物等、各遺構は現れていない。

区画溝を伴う屋敷地の消滅については近接する古城遺跡・宮ノ前遺跡からも同時期の傾向がみられ、当該地域の沖積平野部での中世集落の形成および消滅は期を一にしているものと考えられる。

注

- (1) 徳島県教育委員会「中島田遺跡」「県道徳島鴨島線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1989
- (2) 徳島県埋蔵文化財センター「古城遺跡（C地点）」「徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 21 1990
- (3) 徳島県教育委員会「宮ノ前遺跡現地説明会資料」1990

4 考 察

(1) 黒谷川宮ノ前遺跡における古代の土器様相について

はじめに

従来、徳島県内における古代の土器偏年作業は資料の蓄積が行われているにもかかわらず、断片的に様相が示されているのみで、良好な一括資料に恵まれないこともあってほとんど進捗していないのが現状である。

しかし前代の古墳時代においては古墳出土の須恵器を畿内陶邑偏年の併行関係から時期設定を進め、近年調査された古墳時代後期の資料については在地生産の須恵器から各支群ごとの須恵器の比較検討および偏年作業が進められてきている。⁽¹⁾

7世紀以降、奈良時代から平安時代の遺物については唯一継続された同府関連の調査においても各時期の遺物の一括資料に恵まれず器種構成および偏年作業は停滞していると言わざるを得ない。しかし、平安時代中期から中世の遺物については乏しい資料の中からも積極的に資料の検討を行い各器種の時期的変遷の様相がまとめられている。⁽²⁾

このような現状の中において黒谷川宮ノ前遺跡から出土した遺物について資料の検討は十分に整理できないが、概ね7世紀から10世紀段階に比定される遺物を県下の遺跡との対比の中から各時期の土器様相について整理し、大まかであるが各土器群・遺構の変遷を提示したい。

なお、本文中に記述する土器番号については本報告書土器番号と一致し、基本的な器種分類については平城宮分類に従っている。

① 古墳時代後期から飛鳥時代（6世紀後半から7世紀代）

黒谷川宮ノ前遺跡において微高地に遺構が形成されるのは古墳時代後期、畿内陶邑編年のT K43段階にあたる。当該時期は主に横穴式石室をもつ古墳が山麓沿いに構築されているにもかかわらず集落遺跡は上板町所在の神宅遺跡が想定されるのみで、古墳数とは相対的にまったく未確認の状況である。したがって土器構成も古墳の副葬遺物以外十分に把握できず、特に土師器についてはまったく不明の状況下にある。

黒谷川宮ノ前遺跡のS X 1001では須恵器の蓋杯・短頸壺・台付椀・長脚2段透かし高杯など須恵器他、土師器のやや長胴形の壺・鉢が若干出土している。器種構成の中で多器種を占める須恵器ほかは土師器壺・鉢形土器がみられるのみで、法量的にも壺形土器では大・中・小の3形態、鉢形土器では大・小の2形態が存在する。調整では体部外ハケ・内面板ナデないしはハケ調整で、鉢形土器では7C代に見られるような放射状のミガキは施されていない。

(飛鳥 I ~ 飛鳥 IV・平城宮 I)

飛鳥 I ~ II 段階にかけては、阿波郡阿波町所在の日吉谷遺跡の竪穴住居跡 (SB1001) から陶邑編年 TK217 段階の須恵器杯 H と共に作して土師器の長胴形壺・鉢と、胎土および調整技法から畿内から搬入されたと考えられる土師器杯 C が出土している。当該時期の畿内産土師器とされるものは他に板野郡上板町所在の柿谷遺跡、3 号墳 (SM1003) から若干新しい須恵器杯 G 蓋とともに飛鳥 II 段階の土師器杯 C が出土し、上板園場整備関連の分布調査においても多量の須恵器とともに土師器杯 C が表採されている。

黒谷川宮ノ前遺跡では自然流路 2 (SR1002) 下層部、第 2 包含層より飛鳥 II 段階前後の須恵器杯 G・高杯他、内面に 1 段放射状暗文を施した土師器杯 C (2070) が出土している。杯 C (2072) は飛鳥 III 段階で、畿内からの搬入品と考えられる。飛鳥 V (平城宮 I) 段階では土師器杯 A (2071)・皿 B (2068)・杯 B 蓋 (2073) が認められる。

I 期 (飛鳥 I ~ V 段階) は県内の出土例は少なく古墳に伴う副葬物以外集落内での出土例は極めて少ない。黒谷川宮ノ前遺跡以外では徳島市国府町所在の阿波國守関連の調査から散在的に須恵器杯類が出土しているが、土師器の供膳具では飛鳥 V 前後段階の内面に 2 段放射状暗文を施した土師器杯 A・杯 B 蓋が、煮沸具では土師器壺が若干出土しているのみである。⁽⁷⁾ このように金属器模倣といわれる内面に暗文を施した新器種の出現は飛鳥 I の新段階から飛鳥 III 段階に見られるが、出土地点は古墳の副葬品以外は吉野川下流域においては後の国衙周辺あるいは郡衙の推定地にかぎられ、極めて拠点的な状況を示す。

土器の成形・調整技法上、土師器供膳具については畿内産土師器に採用されている粘土紐巻き上げ後、ヨコナナデ + 底部外面手持ちヘラケズリ + 内面ミガキ (放射状暗文) が基本的な技法と考えられるが、現段階において在地産土師器の調整技法は明確にしがたい。

② 奈良時代 (8世紀代)

黒谷川宮ノ前遺跡においては当該時期に相当する遺構の確認はできなかったが遺物包含層および自然流路 2 (SR1002) の堆積層中から上記、平城宮 I 段階の遺物および平城宮 III 段階前後の土師器・須恵器類が若干出土している。

厳密には時期決定できる資料には恵まれないが概ね奈良時代前半頃 (平城宮 III 段階前後) には土師器杯 A (508・510・1907・2021)、土師器皿 (362・1300) が、煮沸具では手付き鍋 B (2079) が相当するものと考えられる。

この段階の畿内産と考えられる土師器杯類は断片的ではあるが比較的多く搬入されているよう、黒谷川宮ノ前遺跡では出土していないが平城宮 II ないし III 段階の遺物は国府守関連跡・庄遺跡 (徳島大学体育館地点・加茂名中学校地区)⁽⁸⁾ で認められる。また、寺院関係では阿南市宝田町所在の隆禪庵寺においても杯 A・皿 B が出土している。⁽⁹⁾